

北海道立埋蔵文化財センター

年報26

令和6(2024)年度

北海道立埋蔵文化財センター

年報26

令和6(2024)年度

目 次

I	施設の概要	
1	設置の目的	1
2	沿革	1
3	施設の概要	1
	(1) 工期	
	(2) 面積	
	(3) 組織図	
	(4) 職員名簿	
II	調査研究事業	
1	重要遺跡確認調査	2
	(1) 浜頓別町クッチャロ湖畔遺跡の調査	
	ア、過去の調査	
	イ、今年度の調査	
	(ア) 浜頓別町郷土資料館（展示施設）	
	(イ) 旧下頓別小学校校舎（収蔵施設）	
2	埋蔵文化財に関する調査研究	5
	(1) 保管出土品を活用した研究	
	ア、保管遺物を対象とした科学的分析	
	イ、保管出土品を活用した体験学習の開発	
	(ア) 「こども考古学教室」まいぶん遺跡探検隊（第4次）一雪の中で発掘調査に挑戦！	
	(2) 研修・情報収集	13
	ア、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会	
	イ、北海道古代集落遺跡保存活用協議会第3回臨時代表者会議	
	ウ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議	
	エ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第36回研修会	
	オ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第2回役員会	
	カ、北海道古代集落遺跡保存活用協議会第4回定例代表者会議	
3	分析・鑑定・保存処理等	18
	(1) 分析・鑑定	
	(2) 保存処理	
	(3) 施設保管環境	
	ア、温湿度管理	
	イ、保管状況点検	
	ウ、重要文化財について	
4	市町村教育委員会支援	19
	(1) 指導・協力等	
	ア、恵庭市西島松2遺跡出土鉄製品の保存処理指導	
	(2) 令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員出前研修会	
	(3) 令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員研修会	

5	周辺施設・大学・諸機関との連携	46
	(1) 文京台地区道立教育3施設連携	
	(2) かるちやるnet	
	ア、秋のイベント「発見・体験 文化の秋 ～遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつ～」	
	イ、施設紹介パネル展	
	ウ、特別企画「てくてく、ぺったん！かるちやるスタンプラリー」	
	(3) のっぽろ11ネット	
	(4) 北海道生涯学習協会 まなびの広場パネル展	
6	利用状況	48
	(1) 入館者数一覧	
	(2) 団体利用者対応	
7	講演会要旨	54
	(1) 春季講演会「古墳の始まりから終焉まで1」「コシの古墳時代」	(講師：伊藤 雅文 氏)
	(2) 冬季講演会「キーワードで読み解く北海道・北東北の縄文遺跡群3」	
	「北海道・北東北の縄文集落－円筒土器文化から大規模環状列石へ－」	(講師：高田 和徳 氏)
8	企画展示要旨	86
	北海道・北東北の縄文遺跡群3－縄文遺跡群とストーンサークル もっともっと鷲ノ木遺跡－展	

I 施設の概要

1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、展示公開並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

2 沿革

平成7年

3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）
基本構想策定

平成8年

9月 本館基本設計完了

平成9年

3月 本館実施設計完了

10月 本館建設工事着手

12月 別館（整理作業所）基本設計完了

平成10年

3月 別館（整理作業所）実施設計完了

9月 別館（整理作業所）建設工事着工

平成11年

3月 本館建設工事竣工

4月 北海道立埋蔵文化財センター開設

8月 別館（整理作業所）建設工事竣工

11月 一般公開

3 施設の概要

(1) 工期

[本館工事] 平成9年10月31日着工

平成11年3月18日竣工

[別館工事] 平成10年9月10日着工

平成11年8月18日竣工

[外構工事] 平成11年7月28日着工

平成11年12月10日竣工

(2) 面積

[敷地面積] 18,599.50㎡

[延床面積]

本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・
2階建）

別館：2,081.80㎡（鉄筋造・3階建；整理
作業所）（渡り廊下含む）

[部屋別面積]

本館1階

調査研究室（253㎡）

保存処理室（167㎡）

観測・計測室・修復室（47㎡）

金属製品処理室（31㎡）

分析室（48㎡）

実験室（53㎡）

撮影室・暗室（105㎡）

図書室（177㎡）

一般収蔵庫（399㎡）

展示収蔵庫（321㎡）

展示室（310㎡）

本館2階

所長室（47㎡）

事務室（241㎡）

特別収蔵庫（227㎡）

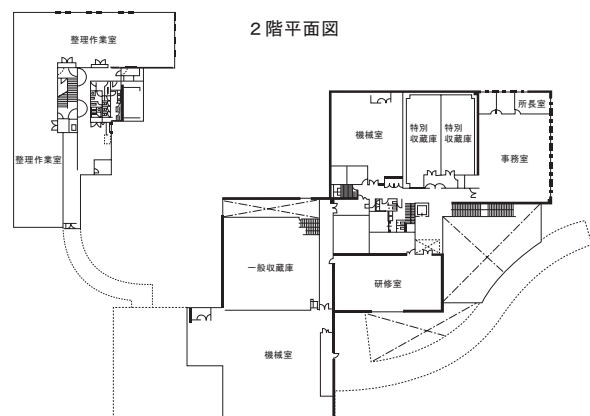
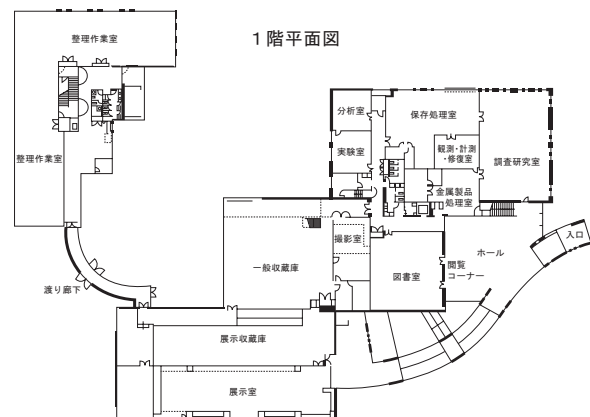
研修室（196㎡）

一般収蔵庫（319㎡）

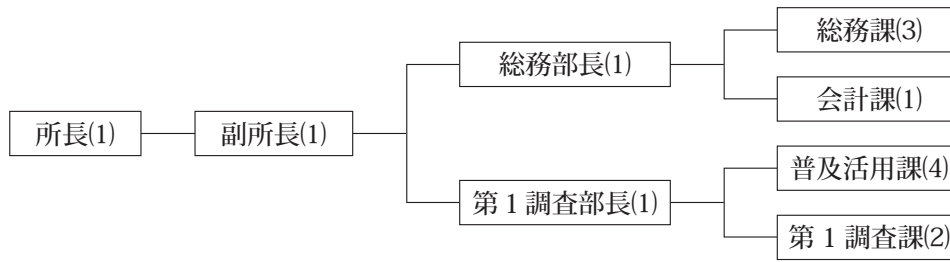
別館1階：整理作業室（520㎡）

別館2階：整理作業室（540㎡）

別館3階：整理作業室（220㎡）



(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	長沼 孝	総務部長	馬橋 功	第1調査部長	鈴木 信
副所長	馬橋 功	総務課長	小杉 充	普及活用課長	倉橋 直孝
		総務課嘱託	多地真奈美	普及活用課主査	芝田 直人
		総務課参与	葛西 宏昭	普及活用課主査	坂本 尚史
		会計課長	中村 貴志	普及活用課主任	鎌田 望
				第1調査課長	中山 昭大
				第1調査課主査	立田 理

Ⅱ 調査研究事業

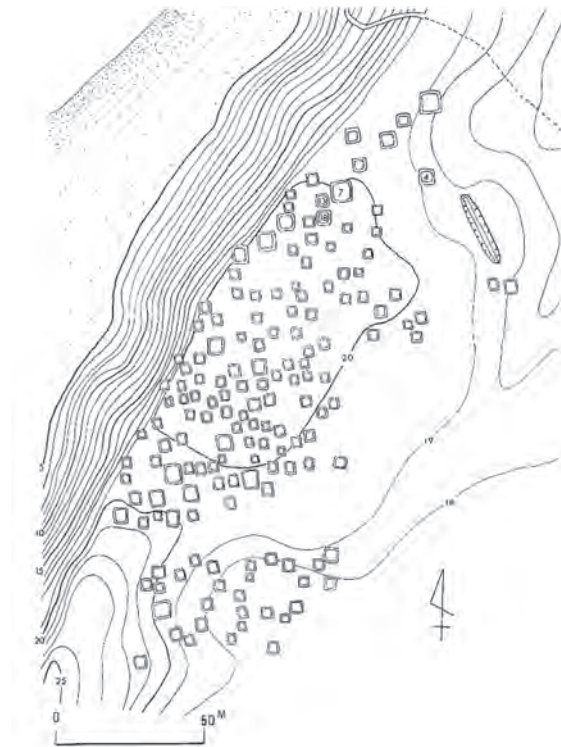
1 重要遺跡確認調査

令和4年8月に北海道教育委員会（以下、道教委）から示された、「令和4年度から令和8年度重要遺跡確認調査実施要領」に基づき、令和6年6月3日に令和6年度重要遺跡確認調査実施計画案および実施要項案を作成した。6月6日にはこの案について道教委文化財・博物館課と協議を行い、6月6日に計画が決定した。これにより令和6年度は浜頓別町のクッチャロ湖畔遺跡（道指定史跡クッチャロ湖畔竪穴群）の調査を実施することが決められた。

(1) 浜頓別町クッチャロ湖畔遺跡の調査 ア、過去の調査

クッチャロ湖畔遺跡はクッチャロ湖畔の東岸台地上、標高10～15mに立地する。現在クッチャロ湖沿岸には13か所程度の埋蔵文化財包蔵地が確認されているが、縄文海進時に湖が拡大し形成された「古クッチャロ湾」の沿岸部には36か所ほどの遺跡が形成された様子が復元されている（浜頓別町1995『浜頓別町史』）。

クッチャロ湖畔遺跡の調査は、昭和33・34年（1958・1959年）に北海道大学の児玉作左衛門（1次）、大場利夫（2次）を発掘担当者として



▲図Ⅱ-1-1 昭和33・34年調査竪穴測量図(大場・菅1977)

浜頓別町教育委員会が実施し、その詳細は大場利夫・菅正敏により北海道考古学第13輯で報告されている（大場・菅1977）。この報文によれば竪穴建物4軒と長軸60mを超える大規模な貝塚を



▲図Ⅱ-1-2 GPS測量成果による竪穴分布図（QGISでGoogle Mapsを背景地図とし、「登記所備付地図データ（浜頓別町2024）」（法務省）を加工して作成。竪穴はドットで表示している。）

調査し、前者は全て擦文文化期、後者は縄文時代前期～中期に形成されたことが判明している。また竪穴は地表面の観察から173軒が確認され、平面方形が主体を占めることから擦文文化期の拠点的な集落と考えられる。この調査により遺跡の重要性が明らかとなり、1966年に道指定史跡に指定されている（図Ⅱ-1-1）。

近年では、平成24・25年（2012・2013年）に名古屋大学博物館新美倫子准教授が、遺跡の測量調査と1958年の貝塚調査トレンチの再発掘を実施し、貝層の確認と、土器・石器のほか貝などの動物遺存体が採取されている。

イ、今年度の調査

今年度は遺跡の現地状況および、浜頓別町教育委員会が所蔵するクッチャロ湖畔遺跡出土資料の収蔵状況を確認調査した。

遺跡の現地状況調査については、平成24・25年の名古屋大学博物館の調査の中で、GPS（Garmin GeKo 201）を使った竪穴の地点測量が、同大学博物館の門脇誠二氏により実施されていることから、この測量成果データを門脇氏から

ご提供いただき、QGISソフトにより分布図面を作成した（図Ⅱ-1-2）。門脇氏の記録によれば、測量の計測誤差は4～6mであり、現地調査では作成図面を現地竪穴群の概ねの分布範囲の視認に利用した。

浜頓別町所蔵資料に関する調査については、令和7年度関連資料調査の計画を検討するため、北海道大学大場利夫教授による昭和33・34年調査資料を中心に展示・収蔵状況を確認した。調査は浜頓別町郷土資料館と収蔵施設である旧下頓別小学校校舎で行った。クッチャロ湖畔遺跡出土資料は、縄文時代前期～中期、続縄文時代、擦文文化期の土器・石器・土製品・骨角器、動物遺存体などが認められた。重要遺跡確認調査の計画では竪穴群を主要な対象としており、過去の調査から最も関連性が強いと推測される擦文文化期資料の状況を確認することとした。

（ア）浜頓別町郷土資料館（展示施設）

竪穴調査で出土した擦文文化期の甕・高坏・椀、紡錘車、縄文時代前・中期の土器・石器類の一部が常設展示されている状況を確認した（写真

▼表Ⅱ-1-1 下頓別小学校収蔵クッチャロ湖畔遺跡の擦文文化資料

竪穴	箱数	木箱種類	内容
4号竪穴	4	40×30cm 3箱 30×25cm 1箱	擦文土器のみ収納が3箱 北筒式混在が1箱
18号竪穴	2	40×30cm 2箱	擦文のみ
13号竪穴	7	40×30cm 2箱 30×25cm 5箱	擦文のみ 大型破片がまとまるもの1箱 手書き図面メモの同封を1箱に確認
7号竪穴	6	40×30cm 4箱 30×25cm 2箱	擦文のみ
混在箱	2	40×30cm 2箱	いずれも竪穴番号不明だがクッチャロ湖畔の遺物と考えられる 「石槍」と箱書きされた木箱中に擦文土器がビニール袋に収納されていた 「獣骨類」の箱に獣骨と共に擦文土器が収納



▲写真Ⅱ-1-1 郷土資料館の展示状況



▲写真Ⅱ-1-2 下頓別小学校の収蔵状況



▲写真Ⅱ-1-3 擦文文化期の資料(1)



▲写真Ⅱ-1-4 擦文文化期の資料(2)

Ⅱ-1-1)。展示資料には報告掲載資料も含まれていた。また高坏など石膏で復原された一部資料に劣化したものが認められ、再整理の必要性が考えられる。

(イ) 旧下頓別小学校校舎（収蔵施設）

■ 遺物

木箱に収納保管された昭和33・34年調査資料を確認した（表Ⅱ-1-1、写真Ⅱ-1-3・4）。資料は竪穴資料と前期の貝塚資料があり、前者が擦文文化期、後者が縄文時代前・中期を主体とする。昭和33・34年調査は竪穴4か所（竪穴4・7・13・18号）を調査しているが、全ての竪穴の資料を確認することができた。擦文土器は甕・高坏片が混在し、小破片が多い。接合作業の対象となる大きさの土器片がまとまる箱や、拓本などで特徴を表せる資料もみられた。

令和7年度は擦文文化期の展示資料、竪穴資料（21箱）を対象に関連資料調査の実施を検討する必要があると判断した。

■ 写真・文字資料

浜頓別町の郷土史家である佐藤豊氏の写真・文字記録の資料からクッチャロ湖畔遺跡に関わる資料を確認した。

【引用参考文献】

大場利夫・菅正敏

1977 「枝幸郡浜頓別町日の出遺跡調査報告」『北海道考古学』第13輯 北海道考古学会

2 埋蔵文化財に関する調査研究

(1) 保管出土品を活用した研究

【今年度研究概要】

指定管理第5期においては下記2つの課題を中心に保管出土品を活用した調査研究を進めた。

ア、保管遺物を対象とした科学的分析で、主に材質分析を行うこと。

イ、保管遺物を活用した、体験学習内容や方法を開発すること。

【保管出土品を対象とした研究】

ア、保管遺物を対象とした科学的分析

滑石製遺物の産地同定を目標として、道内松前町江良、芦別市新城、岩手県盛岡市、一関市等各産地の岩石試料に対し、鉱物ごとの化学組成値の測定を昨年度から継続して行っている。今年度は

茨城県日立変成帯の試料を対照試料に追加し、昨年度の調査結果をまとめ、今年度刊行の『松前町郷土資料館研究紀要』第2号にその成果を掲載した。使用機器は、電子顕微鏡（JSM-IT200）、偏光顕微鏡（Nikon ECLIPSE E600pol）及び岩石カッター、卓上研磨機等である。

イ、保管出土品を活用した体験学習の開発

令和6年度の保管遺物を活用した体験学習の開発として、「こども考古学教室」まいぶん遺跡探検隊の第4次において、雪の中での模擬的な体験発掘を行った。

(ア)「こども考古学教室」まいぶん遺跡探検隊（第4次）一雪の中で発掘調査にちょうせん！一

本教室は高校生以下の「子ども」とその保護者を対象としている。参加者は、雪を掘り込み、埋め戻した模擬的な土坑の発掘体験により、考古学的調査の基本的な手順を体感し、さらに土坑墓の認定や覆土の堆積、副葬品、ベンガラなどについての知識を得ることができる。また、自らが「墓」より掘り出した土偶などの複製品を観察し、その実際の出土状況や既存の知見を学ぶことで、縄文時代に生きた人々の死者を悼む心、高度な精神性について理解を深めることも目的の1つである。

いわゆる「体験発掘」について

遺跡の体験発掘は、埋蔵文化財の普及活用の方法の1つとして位置付けられてきた。普段は立ち入ることのできない遺跡の発掘現場で、専門職員の指導を受けながら、自分の手で土を掘り、土器や石器を発見する感動を経験できる。主に自治体



▲まいぶん遺跡探検隊（第4次）

の教育委員会が主催し、遺跡の発掘調査が行われた際に、小学校や中学校の校外学習に取り入れられることが多い。一方、史跡や遺跡公園などのガイダンス施設では、子供だけでなく、成人も対象とした模擬発掘体験が稀に見られる。

開発行為に伴う緊急発掘調査では、その調査区の多くが危険な工事現場に隣接、またはその内部であることから、一般の住民が立ち入ることは難しい。そもそも限られた発掘予算の中では、普及啓発のための経費は計上されておらず、住民向けの現場説明会（現説）ができればよい方で、地元からの強い要請がなければ体験発掘はほとんど行われない。

大学の学術調査であれ、市町村の範囲確認調査であれ、行政による緊急発掘調査であれ、実際に発掘現場で汗水を流して働いているのは、考古学を専攻する学生や調査主体より雇用された作業員である。彼らは一般住民ではあるが、「労働」の対価として知識や技術、金銭を得ることを目的として発掘調査に従事しているのであって、いわゆる普及活用的な「発掘体験」を求めているわけではない。一般住民が上記の目的以外で、本格的な発掘を「体験」するためには、相当な関門や煩雑な手続きを突破しなければならないというのが実情であろう。

前述の史跡や遺跡公園で行われている「発掘体験」の、北海道での代表的な実践例として、世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産である函館市垣ノ島遺跡や伊達市北黄金貝塚における体験学習が挙げられる。

函館市垣ノ島遺跡では、本物の土器や石器を使った発掘体験が行われている。これは体験エリアに埋め込まれた遺物を、参加者が「発掘調査」するもので、実際の遺構や遺物包含層を掘るのではない。しかし、体験棟での発掘調査の目的や方法、掘り出した遺物についての学習がセットになっており、単なる「宝探し」ではなく、埋蔵文化財や縄文文化への理解が深められる内容となっている。所要時間は40分、参加料は無料。

伊達市北黄金貝塚でも、本物の土器や石器を使った「模擬体験発掘」が行われている。これは、北黄金貝塚情報センターに隣接する体験学習エリアに設けられた複製の竪穴住居跡や墓坑を「発掘調査」するもので、やはり実際の遺構や遺物包含層ではない。一方でこの体験発掘を通じて、史跡を見学した際には見えなかった、地下にある遺構について、その構造を学ぶことができる。大きめ

の上屋があり、雨天であっても実施可能である。所要時間は30～45分、参加料は300円。

どちらの遺跡も、本物の土器や石器を使用しているが、実存の遺構や遺物包含層には一切触れずに、模擬的なものを「発掘」する点が共通している。これは出土遺物を大量に保有する大規模遺跡という利点を活かしている一方で、国指定史跡、そして世界文化遺産として資産（埋蔵文化財）の保全管理を万全にしなければならないという事情があると思われる。発掘調査、埋蔵文化財への理解を助けるという役割をある程度果たしているが、初期の設備投資や維持管理のランニングコストに経費・労力を割かなければならないというデメリットもある。また、屋外での体験学習であるがゆえに、積雪のある冬季間（概ね11～3月ごろ）は行われていない。

（公財）北海道埋蔵文化財センターにおける体験発掘

北海道立埋蔵文化財センターの指定管理者である公益財団法人北海道埋蔵文化財センターは、これまで遺跡の発掘現場で、地元の教育委員会の要請による小学校児童の体験発掘、事業委託者の新人研修の一環としての体験発掘などを受け入れてきた。これらの体験発掘では、参加者の「発掘調査は必要なの？」、「何か難しい仕事らしい」、「適当にガツガツ掘ればいい」といった疑問や先入観を解消し、丁寧に解説、指導することで、発掘調査や埋蔵文化財への理解を促進してきた。

しかしながら、実際の発掘調査現場での体験発掘は減っている。これは発掘事業量の減少、少子高齢化、社会全体のコスト意識の高まりなどが要因と考えられる。そこで、北海道立埋蔵文化財センターでは、普及活用事業として、敷地内で体験発掘を実施できないかという検討を進めてきた。

北海道立埋蔵文化財センターは、道立野幌森林公園内にあるため、地形の改変や地下の掘削は認められていない。よって、埋蔵文化財包蔵地ではないにもかかわらず、函館市垣ノ島遺跡や伊達市北黄金貝塚のような、敷地内の地面を掘り込むような体験発掘は不可能である。そのため便宜的に、コンテナの内部に土器片を混入した砂を充填し、プラスチック製のショベルで「発掘」してもらおうという、幼児向けの、いわば「砂場遊び」感覚のコーナーを屋内に設けている。ただし、使用している土器片は、千歳市美々4遺跡出土の本物である。これはあくまで幼児が宝探しの感覚で楽



▲埋め戻しが完了した模擬的な土坑

しむことのできる「遊び場」であり、発掘調査や埋蔵文化財について自主的に学習できる年齢の子どもを対象にはしていない。

近年、北海道立埋蔵文化財センターでは、小・中学生向けの発掘調査についての室内体験学習プログラムを開発してきた。令和元年度の「こども考古学教室」まいぶん遺跡探検隊（第4次）は、竪穴住居跡の小型模型を使用し、発掘調査を模擬的に体験する講座を行った。前半で、発掘調査と竪穴住居跡についてクイズ形式を交えて学習し、後半で前半の学習内容を踏まえて、実際の発掘調査と同じ方法・手順を体験していくというものである（北海道立埋蔵文化財センター年報21）。令和3年度も同じく「こども考古学教室」まいぶん遺跡探検隊（第4次）が、A4サイズの遺跡を模した箱庭を用いて、遺跡の調査方法を体験する講座であった。前半の発掘調査篇、後半の整理作業篇に分かれており、発掘調査での記録、整理作業で作成した拓本や遺物の観察記録をまとめて、簡易的な調査報告書を作成した（北海道立埋蔵文化財センター年報23）。以上の過年度の体験プログラムは、年間を通して、屋内で天候に関係なく実施できるという利点がある。

雪中発掘体験プログラム開発のねらい

発掘調査は野外での調査を基本とするので、実際に屋外で体験する方が発掘の臨場感が味わえる。当センターの屋外体験の不利な条件を克服す



▲集積した雪のステージ

るには、積雪の中に模擬的な遺構を設置すれば、その下の本来の地面を壊さないでよいのではと考えた。さらに、雪は土よりも軟らかく、造形が容易であるため、様々な掘り込みのある遺構を作り出すことができる。空間（スペース）さえあれば、素材の雪はほぼ無尽蔵にあるので、竪穴住居跡のような大型の遺構を用意することも可能である。

北海道はほぼ毎年11月から翌年の4月までの約半年間、降雪がある。近年は豪雪による交通障害などの雪害の問題が取り上げられることが多いが、一方でウィンタースポーツや「さっぽろ雪まつり」などのイベントで雪を楽しむという風土が北海道民には根付いている。また、北海道生まれの子ども（道産子）は、物心ついたころから冬季間の雪遊びに慣れ親しんでいる。体験学習では、子どもの興味関心を惹きつけ、飽きさせないためには、楽しさと遊びの要素は不可欠である。それゆえ、体験発掘に雪遊びの要素を取り入れることは、きわめて有効である。

実施要項

まいぶん遺跡探検隊での雪中発掘体験は、昨年度に引き続き2回目である。

【準備】

a. 場所（スペース）の確保

雪を集積して、模擬的な遺構を設置するのに十分な広さをもつ場所（スペース）が必要となる。参加人数や遺構の種類（土坑、竪穴住居跡など）によって、体験に必要な広さは変わる。できるだけ本来の地形が平坦な方がよいが、多少の傾斜は雪を低位部分に集積して均すことで解決できる。

掘削や排土（雪）の運搬などの作業スペースを



▲模擬的な遺構の設定



▲模擬的な遺構の掘削

確保するため、模擬的な遺構の間隔は50cm以上空ける。また、ショベルや手ぐわなど刃の付いた道具類を使用することから、安全管理の面からも参加者同士には一定の距離があったほうが望ましい。そのため、過年度の模型を用いた室内の体験発掘に比べると、ある程度のスペースが必要であり、例えば広場あるいは中庭のような広い場所がよい。

当センターの建物南西側の後背地には面積約600~700㎡の空間がある。普段は特に使われておらず、道立野幌森林公園との緩衝地帯となっている。今回はこの場所（スペース）を利用した。

b. 雪の集積

素材となる雪は、一冬に降雪する総量としては無尽蔵といえる。しかし、幌加内や音威子府、倶知安といった豪雪地域を除けば、実際に積雪が恒常的に1m以上となるような市町村は、北海道でもあまり多くない。爆弾低気圧のような、いわゆる「どか雪」ならば一時的に北海道南西部や太平洋側の都市部でも積雪量は増えるが、体験発掘の開催時期に合わせて発生するとは限らない。むしろ、近年は暖冬の影響で、1~2月に気温上昇や雨により融雪が進み、雪が少なくなるという現象が見られる。

そこで、事前に周辺から雪を集めてきて、いわゆる「嵩増し（かさまし）」をする必要がある。あまり雪の堆積が浅いと、掘削深度が雪の厚みを上回って、本来の地面を壊してしまう恐れがあるからである。遺構が土坑や竪穴住居跡などの場合、雪の厚さは50~60cm以上あった方がよい。

雪の集積には、一般のホームセンターで販売さ

れている雪かきの道具である、スコップや「スノードンプ」などを用いた。5日ほど前から、周辺の森林や草地に積もった、なるべく汚れていない、きれいな雪を集めた。枯れ葉や木の実、草、枝、ゴミなどを取り除き、雪に混入しないように注意した。

今回は遺構の数などから1.5×5.0mの範囲を設定し、高さ80cmほどの台形に整えた。上面はステージ状に平坦にした。親子（子どもと保護者）が上面に乗っても陥没しないように、しっかりと踏み固めながら、平坦面を作り出した。また、雪を削り出して、数か所に昇降用の階段（ステップ）を設けた。

c. 模擬的な遺構の造営

今年度は模擬的な遺構として、土坑墓を選択した。ステージ上の平坦面に、平面形が楕円形の穴を掘削した。令和5年度は、参加者が小学校高学年と中学生で、長軸長60cm、短軸長40cm、深さ40cmの規格であった。一方、令和6年度は、参加者が幼稚園年長~小学校中学年であったため、長軸長50cm、短軸長30cm、深さ30cmと少し小さめにした。

掘削は、剣先スコップで荒く内部の雪をくりぬいた後、移植ゴテなどで内面を滑らかに成形した。「しまりのある壁面・坑底面」を再現するために、内面を手のひらで敲きしめて固めた。さらに、霧吹きで水を満遍なく壁面や坑底面に塗布した。水は表面が濡れて水滴が垂れるくらい、多めの方がよい。作業時は氷点下なので、内面がすぐに凍って硬くなる。竪穴住居跡など大型の遺構の場合、霧吹きだと時間がかかるので、噴霧器など



▲坑底面に撒いた「ベンガラ」風砂利



▲絵の具で着色した雪（茶色）

の使用も考えられる。

d. 覆土の埋め戻し

坑底面の中央部にはベンガラ（赤色顔料）を模した赤茶色の小砂利を撒いた。これは煉瓦や溶岩を細かく砕いたもので、ペットショップや園芸店で入手できる。

覆土は着色した雪である。模擬的な遺構の壁面が雪本来の白色であることから、参加者が遺構の形状を認識しやすく、かつ段階的に坑口から坑底面までを掘り下げる目安とするためである。まず、水彩用の黒色、黄色、茶色の絵の具を大きめのペットボトル（焼酎の大型容器など）に入れた水でとがして、色水を作った。このとき、絵の具が完全に水にとけるように、ペットボトルを強めに振った方がよい。次にバケツに雪を詰め、色水を加えて移植ゴテなどでよくかき混ぜる。バケツいっぱい雪を充填させてしまうと、可動域が少ないので、色水がなかなか浸透せず、着色がまだらになる。よって、雪を詰めるのをバケツ容積の8割ほどに抑えるのがコツである。

以上のようにして製作した、色のついた雪を、坑底部から、茶色→黄色→黒色の順番に埋め戻していった。茶色は遺体層、黄色は埋め戻し土（ロームや火山灰）、黒色は腐植土層の落ち込みを想定している。層厚の比率は、おおそ茶：黄：黒＝1：3：2とした。検出面では、白い雪の中に黒い雪が楕円形にまとまっている。覆土は、子どもでも掘りやすいように、上から圧力をかけずに、できるだけ「ふわっと」埋め戻した。

e. 遺物の埋設

出土遺物として、以下の3種類の土製品のミニチュアを用意した。A：千歳市ママチ遺跡AP-310出土の土製仮面（道埋文1987）、B：同市美々4遺跡出土の動物形土製品（道教委1977）、C：同遺跡土坑墓P-373出土の土偶（道埋文1983）。これらは縄文時代晩期の墓に関連する遺物である。ミニチュアはいずれも大きさ5～10cmほどで、工作用粘土で造形し、着色した。雪で濡れることを想定し、色が剥がれないよう表面にクリアラッカーでコーティングした。

遺物は、それぞれの出土状況を参考として、前述の覆土の埋め戻しの過程で、Aを坑口部、B・Cを坑底面に配置した。A（土製仮面）は、土坑墓の坑口部付近の腐植土層（第1黒色土層）中で出土しており、木製の墓標に括りつけられていたという説がある。B（動物形土製品）は、盛土墓のマウンド下より出土している。美々4遺跡の盛土墓は掘り込みをせずに、遺体の上に支笏火山灰をマウンド状に盛り上げたものである。動物形土製品は遺体の傍から出土したわけではないが、葬送に関わる遺物の可能性があると考えた。令和5年度は実際の動物形土製品に準じたミニチュアを作成したが、今年度は参加者の年齢を考慮して、当センターのマスコットキャラクターである「ビビちゃん」を模したものとした。C（土偶）は、土坑墓の坑底面のベンガラが撒かれた範囲に「うつぶせ」の状態で置かれていた。出土位置や出土状況を今回の模擬土坑でもほぼ再現している。

f. 道具類

体験発掘では、基本的に実際の発掘調査におけ



▲坑口部に埋設した土製仮面



▲動物形土製品のミニチュア（ビビちゃん）

る道具類を使用した。参加者それぞれに、移植ごて、手箕、小型の塵取り、ジョレン、水糸、50cmピンポール2本を配布した。また、膝あてとして段ボールを二重に束ねたものも用意した。

g. 体験発掘の手順

体験発掘は、「遺構の検出」、「半截」、「土層断面の記録」、「遺物出土状況の記録」、「完掘」の5つの工程で進行した。屋外での体験時間は、約80分である。検出状況、土層断面、遺物出土状況、完掘状況を観察して記録する。その都度、保護者がスマートフォンのカメラで撮影し、後から印刷して探検手帳に貼付できるようにした。

h. 遺構の検出

埋め戻した模擬的な遺構は白い雪の中に楕円形の黒い雪の範囲として検出される。いきなり遺構を検出するのではなく、「包含層を掘り下げていて発見された」という状況を作り出すために、白い雪が5～10cm程度と薄く上面に堆積しているのが理想である。自然の降雪（新雪）が望ましいが、前日までに降雪がない場合は、周辺から雪を集めて被せる必要がある。

まず、ジョレンがけをして、上部の白い雪を厚さ2～3cmずつ取り除いていく。ぼんやりと黒い輪郭が見えてくると、移植ごてで丁寧な表面を少し削りながら、遺構の平面形を明らかにする。

i. 半截

遺構の短軸両端の外側にセクション・ポイントを設定し、50cmピンポールを打ち込み、水糸を張った。これを半截のラインとして、手前側の半

分を掘り下げていった。

遺構の掘り方は、通常の発掘調査とまったく同じである。遺構の壁面や坑底面を壊さないようにするため、ラインの手前中央部から徐々に掘り広げた。また、一気に坑底面まで掘るのではなく、黒色→黄色→茶色と変わっていく雪の色を確かめながら、1層ずつ掘り下げるようにした。

遺構の壁面や坑底面は、前述のように凍らせたため固く締まっており、また色が雪本来の白色であるため、参加者は覆土（着色された雪）との差異を容易に認識することができた。

j. 土層断面の記録

半截中は、ライン下の断面を土層が変わる度に垂直に整えて清掃し、色の変化を観察しやすいようにした。坑底面までの掘り下げが終わると、土層断面の全体を観察した。

覆土に相当する雪の色の変化が、土坑墓の埋め戻しと埋没の過程に対応することを理解してもらった。また、遺構の調査において、土層断面から得られる情報、たとえば覆土が埋め戻しか自然堆積かなどが、遺構の性格を判断する材料の1つとなることも併せて説明した。

k. 遺物出土状況の記録

前述のように、あらかじめ遺物のミニチュア複製品3点を、坑口部と坑底面に埋設しておいたので、参加者は半截から完掘までの間に順次検出することになる。A（土製仮面）は半截を始めた直後の黒色の雪の中、B（動物形土製品）は半截完了前の坑底面（土層断面の手前側）、C（土偶）は完掘直前の坑底面（土層断面の奥側）で出土す



▲土偶のミニチュア



▲調査方法の説明

る。

遺物が出土しても、できるだけ出土位置から動かさずに、すぐに取り上げないように注意した。移植ごてで遺物を傷つけないように、上部に被さっている雪を丁寧に取り除いて、遺物の輪郭をきれいにし出すことに努めた。出土状況の観察・記録が終わってから、遺物を取り上げて、小型の塵取りの中に保管した。

1. 完掘

土層断面の観察・記録を終えた後、残りの半分（半截ラインより奥側）を掘り下げる。半截調査および土層断面の観察により、覆土の堆積状況が把握されているため、半截よりも手早く坑底面まで到達することができる。

覆土（着色された雪）をすべて取り除き、壁面と坑底面に相当する、固く締まった雪の面をきれ

いに露出させることができれば、完掘である。

m. 実施状況

前半は屋内での座学を30分程度行った。パワーポイントを使用して説明するだけでなく、クイズや質疑応答により、できるだけ参加者自身が考えて、発表するようにした。

第1部「発掘調査のヒミツをさぐれ！」では埋蔵文化財や発掘調査について基本的な説明を行った。遺跡は埋蔵文化財であり、地下に埋まっていた、大切に保護、保存しなければならないものであることを述べた。また、遺構や遺物をきちんと記録して残すという形で、遺跡を「保存」する「記録保存」の考え方について解説した。

第2部「どうしてお墓だとわかったの？」では土坑の種類や墓の認定について説明した。遺跡で見つかる遺構は形態や出土遺物などから様々な性



▲遺構の検出（ジョレンがけ）



▲半截調査



▲完掘

格（機能）が推測されていることに言及した。また、人骨以外に、漆塗り櫛や玉などの貴重品が出土することで墓の可能性が高まることを解説した。

第3部の「発掘調査にちょうせん！」では、まず発掘調査の道具・手順などを説明した。今回の体験学習では使わない道具類、たとえば、一輪車、水平オートレベル、測量用スタッフ、野帳などについても、実際の発掘現場ではどのような役割があるかを解説した。発掘調査の手順は、実際の遺構の調査状況写真を用いて説明した。

その後、屋外へ移動し、雪に埋もれた墓坑を模した穴を検出することから始まり、半截、断面観察、出土遺物の記録、完掘といった一連の発掘体験を行った。概ね前述の手順通りに進行することができた。体験時間は、移動などを含めて、予定よりも10分ほど超過して約80分である。

最後は屋内へ戻り、掘り出したミニチュア（模造品）のママチ遺跡の土面、美々4遺跡の土偶・動物形土製品について10分ほど解説した。これらの副葬品から、縄文時代の人々の死者を悼む心が推測され、高い精神性がうかがえることを述べた。

このほか探検手帳を配布し、体験中に気づいたことを書き込み、スマートフォンで撮影した調査写真を貼り付けられるようにした。

n. 成果と課題

参加者は、座学ではなかなかイメージしづらい発掘調査の具体的な内容について、雪の中で模擬的な遺構を実際に自分の手で「発掘」することにより実体験として体感できた。一般住民や子ども



▲出土遺物についての説明

が野外での発掘調査へ参加する機会が少なくなっている現況では、雪のある冬季限定ではあるが、より具体性のある発掘体験を実現できたと自負している。雪国ならではの自然環境を活かした発掘体験プログラムといえよう。

雪中発掘体験のメリットとしては、まず素材の雪が無償で、しかも大量に手に入ることが挙げられる。また、雪の特性として、ある程度可変性があり、形状や大きさを任意に加工できることも大きい。今回のように参加者の年齢構成によっては、模擬的な遺構の規格を少し小さめにする事ができる。これに対し、参加人数が多く、成人主体など年齢が高めならば、竪穴住居跡のような大型の遺構を共同で掘るという企画も考えられる。

一方、デメリットとしては、天候の影響を受けやすいことがある。今年度の雪中発掘体験では事前に告知したが、吹雪など荒天の場合は、安全面を考慮して中止にせざるを得ない。また、年によっては降雪が極端に少なかったり、暖冬で雪解けが早かったりするので、素材の雪が集積できない可能性がある。屋外での体験を断念した場合に備えて、過年度の、屋内で実施できる、小型模型を用いた発掘調査体験メニューを事前に人数分準備しておくことも想定される。

今後の課題としては、応用的なプログラムの開発がある。現在のところ模擬的な遺構の発掘調査のみであるが、逆の発想として、いわゆる「かまくら」のような「雪葺き」の竪穴住居を作る体験も考えられる。そのほかに、雪でミニチュアの周堤墓を再現するという体験も検討したい。

北海道だけでなく、東北や北陸など積雪のある地域でも、この雪中発掘体験は可能である。その

地方の特色を活かした体験プログラムが実施されることが望まれる。

【引用・参考文献】

北海道教育委員会

1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』

(財)北海道埋蔵文化財センター

1983 『美沢川流域の遺跡群Ⅶ—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』北埋調報14

(財)北海道埋蔵文化財センター

1987 『千歳市ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報36

北海道立埋蔵文化財センター

2020 『年報21』

2022 『年報23』

(2) 研修・情報収集

ア、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

期 日：令和6年5月30・31日（木・金）

会 場：岩手県盛岡市大通3丁目3-18

アートホテル盛岡

参加者：所長 長沼 孝

内 容：令和6年5月30日（木）総会・講演
5月31日（金）視察見学

詳 細：5月30日（木）

13：30～16：50 総会・講演

総 会

○開会挨拶

会 長：河西健二富山県埋蔵文化財センター所長

開催地：内館茂盛岡市長

来 賓：近江俊秀文化庁主任文化財調査官

議 事

1 会員の入退会について

- ・入会申請なし
- ・退会申請は山口県埋蔵文化財センター

【了承】

(令和6年5月現在：31道府県71機関)

2 令和6年度事業報告について

- ・事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、「発掘された日本列島展2023」への協力等についての説明・報告

【了承】

3 令和6年度収支決算について

- ・事務局から説明・報告

4 監査報告

- ・監事による監査結果の報告

【決算・監査報告合わせて了承】

5 新規加盟組織の勧誘について

- ・未加盟機関及び都道府県教育委員会（文化財主管課）に対し、加入への案内文書を送付。各機関においても、加入機関の増加に向けて協力願いたい。

6 「発掘された日本列島展2023」について

- ・全埋協との共同パネルを作成など

7 役員改選について

- ・現在の令和5・6年度役員は、令和5年度総会での決定。次期（令和7・8年度）の役員は、令和7年度の総会で決定予定

【了承】

8 令和6年度事業計画（案）について

- ・事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動についての説明・報告

【了承】

9 令和6年度収支予算（案）について

- ・事務局からの説明

【了承】

10 令和7年度総会及び研修会等開催について

- ・総会及び第1回役員会：鳥取県
- ・研修会：大分県
- ・第2回役員会：京都市（幹事機関は会長の福井県）

【了承】

11 令和8年度以降の総会・研修会等の幹事機関について

- ・ローテーションに基づき調整中（コロナ感染症拡大のため変更あり）

12 全国埋蔵文化財法人連絡協議会との連携について

- ・協議して進める

13 その他

- ・「四国地区埋蔵文化財センター発掘へんろ展」への協力
- ・「埋蔵文化財発掘調査等技術検討委員会」について

記念講演

演題：「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

講師：文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門主任文化財調査官 近江俊秀

要旨：

○これからの埋蔵文化財保護の在り方について（第一次報告書）について

○社会全体の課題

- ・建設業や労働者人口の現状と課題
- 埋蔵文化財の課題
 - ・制度上の課題
 - ・埋蔵文化財の把握とイノベーション事業取組
 - ・発掘調査経費の削減
 - ・指定相当の埋蔵文化財のリスト化
 - ・近世と近代の遺跡の保護

特別講演

演題：「再考遺跡分布調査」

講師：盛岡大学名誉教授 熊谷常正

要旨：

- 東日本大震災と指定文化財の被害状況
- 復興事業と埋蔵文化財
- 遺跡分布調査と先人の遺跡情報
- 埋蔵文化財保護行政と遺跡分布調査（遺跡地図や指定基準など）
- 近代の文化遺産へのまなざし
- 文化財保存活用地域計画と関連文化財
- 地域に根ざした活動を目指した取組み
- 文化財保護の主体を地域住民・社会へ

5月31日（金）

9：00～12：30 視察見学

- ・盛岡城跡公園（国史跡盛岡城跡）
- ・志波城古代公園（国史跡志波城）
- ・盛岡市遺跡の学び館

イ、北海道古代集落遺跡保存活用協議会第3回臨時代表者会議

日 時：令和6年9月4日（水）

15：00～16：30

会 場：オンライン会議

出席者：所長 長沼 孝（代表者）

普及活用課主査 坂本尚史（同席者）

内 容：

1 開会挨拶、出席者確認の後に、2 議事(1)の新規加入構成法人（浜中町、中標津町）の提案があり、本会議で加入が承認された。

2 議事(2)情報共有では、学校教育における北海道古代集落遺跡群の活用について、下記①～③の3つの報告が行われた。

「①古代集落遺跡群の活用事例について」では、協議会を構成する31市町に行った学校教育における構成文化財の活用状況のアンケート結果が公表され、a) 利用が低調であること、b) 学校教育と社会教育の横断的な取り組みの不足が理由に考えられること、c) 活用を進める上で必要

な取り組みや条件整備についての意見、などが説明された。

また、道教委義務教育課の上野主任指導主事からは、a) 定期的に行っている学校教育との連携事例についての照会（釧路市教委が事例回答）、b) 学校教育での継続的活用につながるための社会教育が持つべきマインド（プログラム作成の視点として「子供たちにどんな力がつくか?」、「古代遺跡に学ぶ魅力とは何か?」に留意すること）について意見が述べられ、併せて、児童だけではなく学校教員が効果や魅力に気付くことで利用の継続や拡大の機会につながる事が説明された。

「②オホーツク文化を活用した地域学習～枝幸町の事例紹介～」(枝幸町教育委員会高島孝宗氏報告)では、地方人口の減少のなかで博物館が担うべき役割として「ふるさと教育」と「地域の学び」の推進をあげ、オホーツク文化が学校教育のなかで地域資源として扱われるための取組み、オホーツク文化の教育的意義、提示の方法について報告が行われた。

「③近くて遠い文化財?－はなれて知る郷土の遺跡－」(網走市教委梅田広大氏報告)では主要な構成文化財であるモヨロ貝塚の説明の後にシステムトラブルが生じ、本題の学校教育での活用事例については後日の誌面報告となった。

このほか厚真町教育委員会からの質疑で、道教委が行っているタブレット端末を活用した埋蔵文化財活用コンテンツ開発の取組みや、市町村への利用の働きかけの事例について照会があった。道教委からはタブレット用に開発した教材の紹介と、学校教育での利用を促進するための指導プログラムも併せて作成している旨の説明があった。また普及については教育局を通じた自治体教育委員会への通知、「ふるさと教育」での活用提案、SNSでの発信、チラシ5000部の全道教育機関への配布が報告された。

3 事務連絡では、西島松5遺跡出土品の重要文化財指定に係る資料の該当期の判断について恵庭市教育委員会から説明があった。

ウ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議

期 日：令和6年11月14日・15日（木・金）

会 場：多賀城市埋蔵文化財調査センター
(宮城県多賀城市中央2丁目27-1)

参加者：第1調査部長 鈴木 信

内 容：

1 日目

～議事～

協議事項2件、照会事項14件について、意見が取り交わされた。

1 協議事項

(1) 令和7・8年度ブロック幹事機関決定

全国役員については、北海道地区から札幌市埋蔵文化財センター（監事）、東北地区から八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館（幹事）に決定した。

(2) 文化庁への要望書

要望書について7月5日に文化庁へ提出した旨の報告、来年度の要望事項について追加の要望等の確認を行った。

2 照会事項

(1) デジタルデータの保管・管理について

近年のデジタル化に伴いデータの保管や管理方法について、各機関の現状を確認した。

(2) 発掘調査等における調査員及び作業員の発掘調査技術の育成・後継について

調査員及び作業員の高齢化により、将来的な発掘技術等の継承について行っているか、また予算措置についての意見交換を行った。

(3) 発掘調査現場で実施している発掘作業員の熱中症対策について

近年北海道・東北地区でも酷暑が増えていることから現場での熱中症対策について意見交換を行った。

(4) 収蔵施設内及び収蔵品のカビ等菌類の発生について

収蔵庫内でカビ菌類が発生した場合の対応方法と予算措置について意見交換を行った。

(5) 発掘調査出土品の取扱い基準により、特に重要な出土品として区分されているものの選定の基準及び手続等方法について

各機関での出土品の取扱い基準等について確認した。

(6) 発掘調査及び出土品整理作業員の募集方法や任用条件について

近年発掘作業員の高齢化や人員が集まりにくいといった問題に直面しており、各機関での募集方法や任用条件について意見交換を行った。

(7) 3D計測の導入事例と報告書への掲載方法、活用事例、費用について

3D計測したデータ等の報告書等への活用事例について確認した。

(8) 試掘調査における重機代の費用負担について

各機関での民間開発の試掘費用負担について何らかの基準を設けているか確認した。

(9) 発掘調査現場における暑さ対策について

各機関でのAEDの設置状況やファン付きベストの支給等について確認した。

(10) 近代の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて 戦争遺構等の近代の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて各機関での基準等について確認した。

(11) フォトグラメトリ技術を用いた遺構・遺物の三次元計測について

各機関での導入状況等について確認した。

(12) 発掘作業員の任用について

各機関での発掘作業員の任用方法について確認した。

(13) 国指定重要文化財の保存・管理について

国指定重要文化財を所有する施設における問題点や取組事例について確認した。

(14) 近世・近代の埋蔵文化財保護について

調査対象とする時代の拡充や業務量の拡大等、各機関の現状と課題について確認した。

2 日目

～視察～

多賀城跡の見学を行った。

エ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第36回研修会

期 日：令和6年10月17・18日（木・金）

会 場：須玉ふれあい館

（山梨県北杜市須玉町若神子521-17）

参加者：第1調査部普及活用課長 倉橋 直孝

テーマ：日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の新展開

【司会】北杜市教育部学術課長 村松 佳幸 氏

【会長法人挨拶】

富山県埋蔵文化財センター所長 河西 健二 氏

【開催地挨拶】

北杜市教育委員会教育部長 小沢 永和 氏

【基調講演】

「中部高地の縄文文化—土器造形の妙技—」

新津 健 氏（山梨県考古学協会会長）

【はじめに】

(1) 日本遺産とは

(2) 「星降る中部高地の縄文世界」

【1 比類なき造詣の妙技】

【2 顔面装飾土器のはじまり】

(1) 前期・五領ヶ台式期：簡単な顔

- (2) 五領ケ台Ⅱ式～貉沢式期
- 【3 土偶装飾付き土器等との関わり】
- 【4 土偶付土器との関わり】
- 【5 壺を抱く土偶との関わり】
- 【6 比類なき造形の妙技：顔面把手付土器の意味】
- 【7 動物装飾と土器】
 - (1) イノシシ造形
 - (2) ヘビ造形
 - (3) カエル造形
 - (4) 再び安道寺の動物を考える
- 【8 まとめ】

事例報告(1)

日本遺産の取組と展望について

山梨県埋蔵文化財センター史跡資料活用課 網倉邦生 氏

1. 日本遺産とは
 - 1) 主旨と目的
 - 2) 制度の変遷
2. 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」の取組
 - 1) 認定されたストーリー
 - 2) 協議会組織
 - 3) 沿革
 - 4) 6年間の取り組み
 - (1) 組織整備
 - (2) 戦略立案
 - (3) 人材育成
 - (4) 整備
 - (5) 観光事業化
 - (6) 普及啓発
 - (7) 情報編集・発信
 - 5) 令和6年度の総括評価
 - 6) 令和6～8年度の地域活性化計画
 - 7) 星降る中部高地の縄文世界魅力増進事業

【協議会の取り組みと展望】

【総括評価】

【おわりに】

事例報告(2)

北杜市の日本遺産の取組と展望について

北杜市教育委員会学術課主幹 長谷川 誠 氏

【企画展示事業】

【縄文文化観光資源化事業】

- ① 縄文クラフト体感プログラム
- ② 黒曜石交易体感プログラム
- ③ まるごと1日縄文生活体感プログラム

事例報告(3)

市民ボランティアによる史跡梅之木遺跡の竪穴住居復元

特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所 佐野隆 氏

【梅之木遺跡概要】

【史跡整備と地域づくり】

【みんなでつくる縄文ムラ】

【質疑応答】

10月18日（金）現地視察

【史跡梅之木遺跡】

史跡ガイダンス施設見学後、梅之木遺跡の復元建物2棟を外部、内部から見学。復元後、柱の劣化があり、再修復中の1棟、計3つの復元建物を見学。

さらに、水場遺構と水場遺構へと向かう道も見学した。

【山梨県立考古博物館】

特別展示「縄文時代の道具箱」と常設展示室の見学を行った。

オ、令和6年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第2回役員会

期 日：令和6年12月4日（水）

会 場：京都市中京区竹屋町通烏丸東入る清水町375 京都府立総合社会福祉会館ハートピア京都会議室

参加者：所長 長沼 孝

議 事

(ア) 協議事項

○令和6年度の事業について（中間報告）

・総会及び第1回役員会

令和6年5月30日（木）・31日（金）に盛岡市遺跡の学び館が幹事機関として盛岡市で開催（39機関50名参加）

*議案は全て承認

・文化庁への要望活動

令和6年7月5日（金）に文化庁京都庁舎において会長・副会長と全埋協会長・副会長で実施。ただし、長官不在のため、文化財審議官及び文化財鑑査官と面談後に要望書を手交。その後、近江主任文化財調査官、桑波田文化財調査官と懇談

・研修会

令和6年10月17日（木）・18日（金）に北杜市埋蔵文化財センターが幹事として北杜市（須玉ふれあい館）で開催（29機関30名参加）

- 令和7年度の総会・役員会・研修会について
 - ・総会・第1回役員会
幹事機関：鳥取県埋蔵文化財センター
会場：ホテル モナーク鳥取
日程：令和7年5月29日（木）
監査・第1回役員会・総会等
5月30日（金）
視察見学（鳥取城跡・青谷上寺地遺跡）
 - ・第2回役員会
幹事機関：会長機関
会場：京都市内
日程：11月下旬～12月上旬
 - ・研修会
幹事機関：大分県立埋蔵文化財センター
会場：大分市内
日程：10月中・下旬で検討中
テーマ：キリシタン考古学の最前線
- 令和7・8年度の役員について
 - ・今後の各ブロック会議で確認して来年度の役員会で報告予定
- 令和9・10年度の総会・役員会・研修会及び令和8年度以降のローテーションについて
 - ・令和8年度の総会等は神奈川県、研修会は三重県
 - ・以後、総会等は、9年度は北海道・東北から近畿（京都市か）に、10年度は中四国・九州から北海道・東北に変更、11年度以降は未定
 - ・研修会は、9年度は近畿から中四国・九州に、10年度は中四国・九州から近畿に変更、11年度以降は未定
- 令和7年度の文化庁への要望活動
 - ・要望時期：6月下旬～7月上旬
 - ・調整役：令和7年度は全国埋蔵文化財法人連絡協議会が担当
- 全国埋蔵文化財法人連絡協議会との共同事業について
 - ・現在の共同事業は、「発掘された日本列島展」への協力と文化庁への要望活動
 - ・今後も継続的に検討
- (イ) 報告事項
 - ・今年度は、第73号・第74号の発行予定
 - ・令和6年度の予算の執行状況
令和4年度に規約改定したとおり、年会費は5,000円減額し、都道府県・政令市は25,000円、市町村は20,000円
 - ・入会・退会について

なし

情報交換事項

- ・オブザーバー参加の文化庁近江主任文化財調査官から、近年の文化庁での調査研究や補助事業の動向に関する情報提供
- ・各ブロックなどの現状報告及び意見交換

カ、北海道古代集落遺跡保存活用協議会第4回定例代表者会議

日時：令和7年3月27日（木）

10：30～11：45

会場：オンライン開催（事務局：北海道本庁舎内Web会議専用スペース）

出席者：所長 長沼 孝（代表者）

普及活用課主査 坂本尚史（同席者）

内容：

1 開会挨拶・出席者確認の後に、2 議事に入った。

2 議事の(1)議案では二つの議案が扱われた。一つめの議案では、新規加入構成法人（日高町）の提案があり、本会議で加入が承認された。二つ目の議案では本会議第4年次（令和7年度）の代表者会議議長の選出が行われ、第3年次に引き続き道教委文化財・博物館課長が選任された。

2 議事の(2)情報共有では、公益財団法人日本ユネスコ協会連盟主催事業「プロジェクト未来遺産」に、標津町のNPO法人「自然・文化遺産活用ネット」が実施する事業「標津遺跡群の魅力世界発信プロジェクト」が登録されたことを受け、標津町教育委員会 小野哲也生涯学習課長から、登録の経緯及び事業内容の説明と、法人理事長のコメント紹介があった。質疑では、事務局から「本プロジェクトのメリットとは何か？」の質問があり、小野氏から「町民主体の保存活用の体制にシフトする良好なモデルケースと感じている」との回答があった。また小平町から「標津は中近世の歴史やアイヌ文化を考える上で興味深い地域であるため、古代集落遺跡以降の歴史も含めた保存活用の推進を望む」旨の発言があった。

2 議事の(3)協議では、令和7年度の協議会の取組について説明が行われた。内容は①取組の方向性、②協調した取組の可能性、③取組上の課題と考えられる事項の3項目であった。

①では特に自治体間で協力して取組むべき優先的な課題として、a) 太陽光発電施設などの再生可能エネルギー関係施設が遺跡群の理解に役立つ自然環境・自然景観に与える影響への対応、b)

本遺跡群の学校教育への活用の実現、の2点があげられた。

②では、①で示された方向性を踏まえ、「竪穴群現況調査」と「オホーツク歴史街道推進ネットワーク」の主に2つの取り組みが紹介された。

「竪穴群現況調査」については事務局から説明があった。「竪穴群現況調査」は「北海道東部の竪穴住居跡群第3次調査計画」に基づき道教委が実施する取り組みである。竪穴群遺跡が保有する重層的な属性情報（竪穴の分布状況、現地の土地利用や所有者の情報、植生その他の環境情報）を取得し、それらをGISで統合したうえで保護に有用な整備の在り方を検討するもので、これまで浜頓別町（令和4年度）、大樹町（令和5年度）、別海町（令和6年度）で実施している。竪穴分布は簡易GPS端末による測量である。

質疑では「GISで統合された情報が振興局の林務部局などと共有されているか？今後GISを活用した手法による部局間の情報共有に期待したい。」（浦幌町）、「調査にどの程度の時間・労力をかけているか？太陽光発電施設の対応の関係で興味がある。」（釧路市）の質問があった。

事務局からは前者に対し「オープンデータを利用した情報統合の有用性を検討する段階で、制度・業務上の情報共有には至っていないが、試験的な運用の中で有用性を実感している」、後者に対しては「2～3日間の日程で、道教委1～3名、地元教育委員会1～2名が従事した。」の回答があった。

「オホーツク歴史街道推進ネットワーク」については、網走市教育委員会の梅田広大学芸員から概要説明を受けた。「オホーツク歴史街道推進ネットワーク」は、観光庁の「将来にわたって旅行者を惹きつける地域・日本の新たなレガシー形成事業」の「形成候補」として取り組みを進めている事業である。オホーツク文化を観光資源として活用することを目指し、調査研究などを行っており、団体は北海道オホーツク総合振興局、網走市、北見市、紋別市、興部町、関係民間団体が構成している。説明の主な内容として、①オホーツク文化の自然観、文化的感性、食文化などを観光振興に活かし面的な観光エリアの形成を目指す、②国・道・自治体・地域観光関係団体が連携した「ネットワーク」で調査研究・情報共有を進め周遊ルートや体験コンテンツなどを提示する、③オホーツク文化の認知度向上やインタープリターの育成と共に地域が積極的に参画できる仕組みを形成して

いくことが課題、などがあった。

質疑では本団体参加自治体の北見市から「北見市では観光部局主体の体制で事業を推進しており、観光部局が文化財への関心を高める機会となった。計画を作るだけで終わらないよう、文化財の価値と保護の理解が実現するよう目指したい」旨のコメントがあった。

3事務局連絡では、協議会共有フォルダの設置（令和7年2月末より供用開始）と関係資料の格納、道教委各教育局の共有について説明があり、人事異動に伴うアカウント情報の引継ぎ等に留意が求められた。

3 分析・鑑定・保存処理等

(1) 分析・鑑定

蛍光X線分析装置、電子顕微鏡、光学顕微鏡などの分析・鑑定に関わる機器の設置環境整備と維持管理を行っている。今年度作業中の分析・鑑定業務はない。

(2) 保存処理

木質遺物・金属製品の温湿度等の維持管理、保存処理に関わる機器類の設置環境整備と維持管理を継続して行っている。

(3) 施設保管環境

ア、温湿度管理

収蔵品は北海道教育委員会の定める「北海道美々8遺跡出土品」取り扱い指針（平成18年3月31日教育長決定）を遵守し保管管理を行っている。収蔵品のうち特別収蔵庫、展示室、展示収蔵庫に保管・展示されるものは、温湿度点検を日に3度行い、良好な収蔵環境の保持に努めている。

特別収蔵庫には重要文化財指定品を含む収蔵品があり、温湿度環境はデジタル式温湿度計2台、温湿度データロガー1台、毛髪自動記録温湿度計2台により記録を行っている。

展示室では、重要文化財指定品は常設ガラスケースと稼働式ガラス免振台に展示される。温湿度環境は展示室全体でデジタル式温湿度計9台、毛髪自動記録温湿度計1台で記録を行っている。

展示収蔵庫はデジタル式1台、毛髪式1台である。これに加え、データロガーによる記録も2か所で行っている。

全て温度20℃、湿度40%を基準としている。測定値が5℃もしくは10%以上の変化があった場合に調整を行っている。

イ、保管状況点検

観測室、木器処理室内にあった未処理遺物の現状把握作業を行い、現在も継続作業中である。

ウ、重要文化財について

ア、に記した温湿度管理を行っている。

4 市町村教育委員会支援

(1) 指導・協力等

ア、恵庭市西島松2遺跡出土鉄製品の保存処理指導

経緯：当センターにて保存処理を行った恵庭市西島松2遺跡、土坑墓P262出土の刀子が経年により錆が進行し、再処理が必要な状態であった。令和5年12月27日に恵庭市教育委員会教育長より保存処理指導・助言の依頼がありこれを受けたものである。

作業：昨年度は状態の記録、乾燥状態維持のためのシリカゲル交換、アルコール洗浄を行った。今年度は錆の除去、接合、オートクレーブによる脱塩作業、非水系アクリルエマルジョン樹脂NAD-10を用いて樹脂含浸を行った。今年度末に移管予定である。

(2) 令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員出前研修会「文化財デジタルデータの利活用について」

目的：地域の埋蔵文化財についての見識を深めるとともに、発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、文化財デジタルデータの利活用などについて、専門的な研修を行う。

講師：奈良文化財研究所企画調整部文化財情報研究主任研究員 高田 祐一 氏

日程：令和6年9月12日（木）

13：00 受付開始

13：20 オリエンテーション

13：30 研修1

14：50 休憩（10分）

15：00 研修2

17：30 研修終了

会場：ところ遺跡の森

内容：

研修1：「廉価型機材を用いた文化財の記録とデータ利活用—調査迅速化と高次化のために—」

文化財調査における記録の迅速化と、デジタルデータの利活用について解説する。モバイルスキャン（LiDAR）・SfM/MVS・RTK-GNSS・ドローン・QGIS・3Dデータ公開基盤等について、紹介

した。

研修2：「ワークショップ：文化財デジタルデータを迅速に取得し、活用する」

ところ遺跡の森内で、モバイルスキャン等で取得した3Dデータを図化・分析する演習を研修参加者が講師とともに操作を行った。

参加者：市町村職員等11名、センター職員2名、計13名



▲令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員出前研修会

	名 前	所 属
講師	高 田 祐 一	奈良文化財研究所企画調整部主任研究員
1	荒 山 千 恵	いしかり砂丘の風資料館
2	坂 本 恵 衣	いしかり砂丘の風資料館
3	乾 哲 也	厚真町教育委員会
4	奈 良 智 法	厚真町教育委員会
5	八重柏 誠	美幌博物館
6	林 勇 介	湧別町教育委員会
7	辻 ね む	浜中町教育委員会
8	熊 木 俊 朗	東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設教授
9	山 田 哲	北見市教育委員会 ところ遺跡の森所長
10	中 村 雄 紀	北見市教育委員会 ところ遺跡の森
事務局	鈴 木 信	北海道埋蔵文化財センター 常務理事
事務局	倉 橋 直 孝	北海道埋蔵文化財センター 普及活用課長

▲令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員出前研修会参加者名簿

(3) 令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員研修会「埋蔵文化財発掘調査の現状と文化財デジタルデータの利活用について（Ⅱ）」

目的：地域の埋蔵文化財についての見識を深めるとともに、発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、埋蔵文化財発掘調査の現状と文化財デジタルデータの利活用などについて、専門的な研修を行う。

講師：文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門
主任文化財調査官 近江 俊秀 氏
奈良文化財研究所企画調整部文化財情報研究室主任研究員 高田 祐一 氏

日程：令和6年12月13日（金）

10：00 受付開始
10：20 オリエンテーション
10：30 研修1
12：00 昼食休憩
13：20 研修2
14：30 休憩
14：50 研修3
16：30 質疑応答
17：00 研修終了

会場：北海道立埋蔵文化財センター2階研修室

内容：

研修1：「講義：埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

講師が全国埋蔵文化財担当職員研修会の際、解説をしている近年の埋蔵文化財保護行政の現状と課題について、わかりやすく説明した。

- 1、総論 埋蔵文化財保護行政の今日的課題
- 2、今やるべきこと、考えるべきこと
- 3、令和6年度予算と主な事業
- 4、指定相当の埋蔵文化財について
- 5、近世・近代の埋蔵文化財の取扱いについて
- 6、周知の埋蔵文化財包蔵地として扱う対象の考え方—第二段階の基準—
- 7、発掘調査のイノベーション事業—埋蔵文化財の把握と存在予測
- 8、(構想) オンラインプラットフォーム「全国遺跡情報ポータル」
- 9、令和7年度の事業 埋蔵文化財発掘調査の設計の透明化と業務の全部発注に関するガイドライン
- 10、その他、留意すべき事項
- 11、そもそも文化財保護法では出土品の扱いをどのように定めているのか

12、まとめ

研修2：「取得した3D調査データをいかにして公開活用に利用するか」

文化財調査においてはデジタルデータの取得が増加している。調査成果の報告に使用することは第一義であるが、データ自体も活用を図っていくことで結果的にデータ保管も実現できる。データの活用による効果的な普及を考える。

- 1、自己紹介
- 2、ポリシーと最近の動向
- 3、個人的には環境・機材面で良い時代
- 4、これまでの道埋文研修
- 5、3Dデータ保管の注意点
- 6、ファイルフォーマット
- 7、使うためのルール
- 8、問題の所在
- 9、著作権、所有権とは何か？
- 10、文化財に関係する権利はどういったものがあるか？
- 11、CCBY
- 12、PD：パブリックドメイン
- 13、政府標準利用規約2.0 CCBY4.0互換
- 14、奈良文化財研究所
- 15、使う・データを武器にする
- 16、使われる・必要とされるデータは未来に残りやすい
- 17、2020年
- 18、課題
- 19、デジタルデータ処理はクッキング
- 20、3Dデータの基本的な流れ（遺構）
- 21、文化財3Dデータのありか
- 22、3D公開基盤：Sketchfab
- 23、社会はデジタルツインへ 社会実装の段階へ
- 24、デジタルツイン時代へ 文化財3D地図の構築産業技術総合研究所との共同事業
- 25、Stylyで公開
- 26、内部利用・業務利用
- 27、事例：宮本式（阿蘇市）
- 28、事例：石井式（厚沢部）
- 29、踏査の迅速化 UAV-LiDAR
- 30、文化財調査における記録の迅速化
- 31、UAV-フォトグラメトリ 広範囲を記録
- 32、自動図化（DXF（3次元））
- 33、従来の課題-記録手法：拓本（刻印）
- 34、デジタル時代の成果公開・データ公開のあり方

- 35、バーナーズ＝リー オープンデータ評価指標「5 Star Open Data」
- 36、韓国国立文化財研究院の動向：研究院としてデジタル強化
- 37、今後の計画 紙の報告書を廃止し、プラットフォーム上で制作・公開へ
- 38、統合プラットフォームを活用したワンストップサービスへ
- 39、デジタルデータはデジタルで扱う
- 40、文化財データリポジトリ
- 41、文化財オンラインライブラリー
- 42、自動生成PDF
- 43、今後必要となるもの
- 44、既存データを活用する！！
- 45、過去財産に再度活用する
- 46、ネット時代の公開 新たな人と情報の流れ
- 47、まとめ

研修3：「ワークショップ：文化財デジタルデータでARコンテンツ等を作成する」

モバイルスキャン等で取得した3Dデータや報告書データ等で、ARコンテンツ等を作成する演習を研修参加者が講師とともに操作を行った。

参加者：市町村職員等23名、
センター職員7名、計30名



▲令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員研修会

	名 前	所 属
講師	近 江 俊 秀	文化庁文化財第二課埋蔵文化財部門主任文化財調査官
講師	高 田 祐 一	奈良文化財研究所企画調整部主任研究員
1	木 谷 萌 江	江別市郷土資料館
2	和 田 由希絵	千歳市教育委員会埋蔵文化財センター
3	浅 野 溪	千歳市教育委員会埋蔵文化財センター
4	荒 山 千 恵	いしかり砂丘の風資料館
5	西 川 萌	松前町教育委員会
6	佐 藤 貢 平	上ノ国町教育委員会
7	石 井 淳 平	厚沢部町教育委員会
8	高 橋 一 矢	泊村教育委員会
9	高 橋 美 鈴	余市水産博物館
10	八重柏 誠	美幌博物館
11	勝 田 一 気	斜里町立知床博物館
12	池 田 一 登	置戸町郷土資料館
13	林 勇 介	湧別町教育委員会
14	岩 波 連	苫小牧市美術博物館
15	菅 野 修 広	登別市教育委員会
16	越 崎 聖 也	日高町立門別図書館郷土資料館
17	長 田 佳 宏	沙流川歴史館
18	西 希	沙流川歴史館
19	田 中 康 平	新ひだか町博物館
20	小田島 賢	厚岸町海事記念館
21	山 本 悦 子	弟子屈町複合展示施設ふるさと歴史館
22	長 沼 孝	北海道埋蔵文化財センター理事長
23	鈴 木 信	北海道埋蔵文化財センター常務理事
24	中 山 昭 大	北海道埋蔵文化財センター1部1課長
25	袖 岡 淳 子	北海道埋蔵文化財センター1部2課主査
26	柳 瀬 由 佳	北海道埋蔵文化財センター1部2課主査
27	酒 井 秀 治	北海道埋蔵文化財センター1部2課主査
事務局	倉 橋 直 孝	北海道埋蔵文化財センター

▲令和6年度市町村埋蔵文化財担当職員研修会参加者名簿

Ⅲ 収蔵・保管事業

1 収蔵資料

出土文化財を北海道出土文化財取扱要領（平成13年4月11日付け教育長・出納長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数	
1	道教委	1	昭和52 1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委	1	昭和52 1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委	3	昭和54 1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委	3	昭和54 1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委	3	昭和54 1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委	3	昭和54 1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報	3	昭和55 1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報	3	昭和55 1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報	3	昭和55 1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報	3	昭和55 1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報	7	昭和56 1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報	8	昭和57 1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報	9	昭和57 1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報	14	昭和58 1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報	14	昭和58 1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報	17	昭和59 1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報	17	昭和59 1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報	24	昭和60 1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報	24	昭和60 1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報	24	昭和60 1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報	35	昭和61 1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報	36	昭和61 1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報	44	昭和62 1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報	62	平成1 1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報	62	平成1 1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報	69	平成2 1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報	69	平成2 1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報	77	平成3 1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報	77	平成3 1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報	77	平成3 1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報	77	平成3 1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報	83	平成4 1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報	83	平成4 1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報	83	平成4 1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報	86	平成5 1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報	89	平成5 1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報	90	平成5 1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報	90	平成5 1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報	92	平成6 1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報	92	平成6 1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報	92	平成6 1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報	96	平成6 1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報	96	平成6 1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報	100	平成7 1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報	102	平成7 1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報	102	平成7 1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報	103	平成7 1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報	104	平成7 1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報	105	平成7 1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報	113	平成8 1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報	114	平成8 1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報	115	平成8 1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報	116	平成8 1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報	117	平成8 1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報	119	平成8 1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報	124	平成9 1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報	125	平成9 1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159
58	北埋調報	126	平成9 1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1
59	北埋調報	127	平成9 1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5
60	北埋調報	128	平成9 1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81
61	北埋調報	133	平成10 1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63
62	北埋調報	134	平成10 1998	キウス4遺跡(3)AHKI地区	千歳市	キウス4	42	302	234
63	北埋調報	135	平成10 1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14
64	北埋調報	136	平成10 1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0
65	北埋調報	136	平成10 1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0
66	北埋調報	138	平成11 1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0
67	北埋調報	144	平成11 1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40
68	北埋調報	146	平成11 1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14
69	北埋調報	147	平成11 1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14
70	北埋調報	148	平成11 1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数	
71	北埋調報 152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45
72	北埋調報 157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380
73	北埋調報 159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69
80	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1623	696
81	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0
82	北埋調報 188	平成14	2002	オルイカ1遺跡	千歳市	オルイカ1	2	32	2
83	北埋調報 189	平成14	2002	オルイカ2遺跡	千歳市	オルイカ2	5	17	4
84	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0
85	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36
86	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11
87	北埋調報 206	平成15	2003	オルイカ1遺跡(2)	千歳市	オルイカ1	1	2	2
88	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12
89	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0
90	北埋調報 221	平成17	2005	オルイカ2遺跡(2)	千歳市	オルイカ2	23	34	10
91	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27
92	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41
93	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429
94	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6
95	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4
96	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22
97	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10
98	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181
99	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51
100	北埋調報 255	平成19	2007	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4
101	北埋調報 267	平成21	2009	オルイカ2遺跡(3)	千歳市	オルイカ2	3	6	53
102	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトロー7・9遺跡	千歳市	アンカリトロー7	3	10	3
103	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトロー7・9遺跡	千歳市	アンカリトロー9	8	1	0
104	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20
105	北埋調報 284	平成23	2011	キウス5遺跡(9)	千歳市	キウス5	5	22	134
106	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	祝梅川小野	31	180	81
107	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	梅川1		2	2
108	北埋調報 296	平成24	2012	対雁2遺跡(11)	江別市	対雁2	18	85	101
109	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	祝梅川小野	7		54
110	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	梅川1	1	27	3
111	北埋調報 299	平成24	2012	キウス5遺跡(10)	千歳市	キウス5	30	112	56
112	北埋調報 300	平成24	2012	祝梅川上田遺跡(2)	千歳市	祝梅川上田	5	30	13
113	北埋調報 306	平成25	2013	梅川4遺跡(3)	千歳市	梅川4	55	201	183
114	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	祝梅川小野	2	8	0
115	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	梅川1	35	108	0
116	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡(1)11遺跡(1)	千歳市	キウス3	2	3	8
117	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡(1)11遺跡(1)	千歳市	キウス11	13	33	36
118	北埋調報 348	平成29	2017	トブシナイ2遺跡・イカベツ2遺跡	千歳市	トブシナイ2	12	93	29
119	北埋調報 348	平成29	2017	トブシナイ2遺跡・イカベツ2遺跡	千歳市	イカベツ2	7	103	25
120	北埋調報 349	平成29	2017	根志越5遺跡	千歳市	根志越5	16	92	13

(道教委・道埋文センター発掘調査分)					合 計	1037	8334	5543
--------------------	--	--	--	--	-----	------	------	------

1	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18
2	保第 2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0
3	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1
4	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14
5	保第 3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0
6	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0
7	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8
8	保第 5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2
9	保第 6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7
10	保第 7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8
11	保第 8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4
12	保第 9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0
13	保第 10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23

(保護協会発掘調査分)					合 計	57	301	85
-------------	--	--	--	--	-----	----	-----	----

総 合 計						1094	8635	5628
-------	--	--	--	--	--	------	------	------

2 図書資料

(1) 購入図書一覧

	書名	編著者	出版社
1	貝輪の考古学	忍澤成視著	雄山閣
2	入門 大災害時代の文化財防災	高妻洋成・小谷竜介・建石徹編	同成社
3	石器痕跡研究の理論と実践	御堂島正編	同成社
4	パプアニューギニア民族誌と縄文社会	高橋龍三郎編	同成社
5	玉からみた古墳時代の開始と社会変革	谷澤亜里著	同成社
6	倭国の形成と東北	藤澤敦編	吉川弘文館
7	博物館DXと次世代考古学	野口淳・村野正景編	雄山閣
8	縄文編みかごの世界 東名遺跡	西田巖著	新泉社
9	最新 地学事典	地学団体研究会編	平凡社
10	アイヌ語地名の歴史	児島恭子	吉川弘文館
11	日本史の現在 1 考古	設楽博己編	山川出版社
12	日本史の現在 2 古代	大津透編	山川出版社
13	日本史の現在 3 中世	高橋典幸編	山川出版社
14	日本史の現在 4 近世	牧原成征編	山川出版社
15	日本史の現在 5 近現代 1	山口輝臣・沼尻晃伸編	山川出版社
16	日本史の現在 6 近現代 2	山口輝臣・沼尻晃伸編	山川出版社
17	Q&Aで読む縄文時代入門	山田康弘・設楽博己編	吉川弘文館
18	Q&Aで読む弥生時代入門	寺前直人・設楽博己編	吉川弘文館
19	弥生人はどこから来たのか	藤尾慎一郎著	吉川弘文館
20	世界遺産 宗像・沖ノ島	佐藤信・溝口孝司	吉川弘文館
21	ゴールデンカムイ 絵から学ぶアイヌ文化	中川 裕	集英社

(2) 受領刊行物一覧（令和6年3月1日から令和7年2月28日受領分）

	[北海道]
	北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
1	アイヌ民俗文化財 ユーカラシリーズ74 金成マツ筆録 アイヌ叙事詩 箆伏せ(2) Ichari koushushi
2	アイヌ民俗文化財 ユーカラシリーズ75 金成マツ筆録 アイヌ叙事詩 女性叙事詩 オタサムンマツが獣皮の中に入る Menoko Yukar Otasamummat Kaboroma
3	令和5年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗技術調査15 〈生活習慣(食)に関する民俗技術 2〉
	北海道環境生活文化局文化振興課縄文世界遺産推進室
4	じよもるん、じよもんへ
	札幌市教育委員会
5	丘珠縄文遺跡年報5 Annual Report of Oladama Jomon Site No.5 丘珠縄文遺跡 —2022年度活動報告— OKADAMA JOMON SITE 2022 Activities Report
6	市内遺跡発掘調査報告書16 令和5年度調査報告書
7	札幌市文化財調査報告書111 N434遺跡 第2次調査
	公益財団法人北海道文学館
8	生誕120年・没後60年 OZU YASUJIRO 小津安二郎 世界が愛した映像詩人
9	令和4年度 年報
	札幌市豊平館（一般財団法人北海道歴史文化財団）
10	国重要文化財豊平館 情報誌 ウルトラムリンブルー豊平館 VOL.7
11	国重要文化財豊平館 情報誌 ウルトラムリンブルー豊平館 VOL.8
	公益財団法人北海道新聞野生生物基金
12	モーリー通信 No.3 2024 July
	北海道大学総合博物館
13	北海道大学総合博物館ニュース 第48号
14	北海道大学総合博物館ニュース 第49号
15	北海道大学総合博物館研究報告第9号 オホーツク文化の研究5 目梨泊遺跡(2)
	北海道大学社会共創部広報課
16	LITTERAE POPULI Vol.72/2024
17	LITTERAE POPULI Vol.73/2024
	札幌国際大学縄文世界遺産研究室
18	縄文 年報8
	株式会社イベント工学研究所 森川朋明
19	カーピアセロム 2024 6+7 新緑号
20	カーピアセロム 2024 8+9 盛夏号
	苫小牧市教育委員会 埋蔵文化財調査センター
21	北海道苫小牧市 市内遺跡発掘調査等事業報告書3
	江別市郷土資料館
22	江別市文化財調査報告書130 高砂遺跡(26) 元江別9遺跡(2) 江別市内遺跡分布調査(6)
23	江別市文化財調査報告書131 町村農場4遺跡
	三笠市立博物館
24	三笠市立博物館年報 第41号 2022(令和4)年度
25	三笠市立博物館紀要 第27号 No.27 BULLETIN of the MIKASA CITY MUSEUM
	今金町教育委員会
26	今金町文化財調査報告7 町内遺跡詳細分布調査報告書
	美幌博物館
27	美幌町埋蔵文化財各種開発確認調査報告書
	湧別町教育委員会
28	北海道指定史跡 シブノツナイ竪穴住居跡 発掘調査概要報告書(2023年度) 史跡内容確認のための調査
	国立アイヌ民族博物館
29	国立アイヌ民族博物館ニュースレター アヌアヌ ANUANU Vol.015
30	国立アイヌ民族博物館 プンカラ協働展示 アイヌの建築と工芸の世界 —チセ、マキリ、アットウシー—
31	令和6年度プンカラ協働展示パンフレット 三重から北海道へ—アイヌ文化と出会った人々
	むかわ町郷土史研究会
32	鶴川盛土墳墓群
	平取町立二風谷アイヌ文化博物館
33	2022年度 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 年報 Bulletin of the Biratori Municipal Nibutani Ainu Culture Museum
	浦幌町立博物館
34	浦幌町立博物館だより 2024(令和6)年4月号
35	浦幌町立博物館 紀要 第24号
	[青森]
	弘前大学人文社会科学部 北日本考古学研究センター
36	国史跡山王囲遺跡の研究V 土器編3(西区VI層・VII層出土土器編)
	[岩手]
	盛岡市遺跡の学び館
37	下永林遺跡I 第2～7次発掘調査・盛岡広域都市計画事業 都南中央第三地区土地区画整理事業に伴う平成27～30年度発掘調査報告書
	[秋田]
	秋田県立博物館
38	秋田県立博物館ニュース MUSEUM NEWS No.178
39	秋田県立博物館ニュース MUSEUM NEWS No.179
40	秋田県立博物館研究報告 第49号
41	秋田県立博物館 年報 令和6年度
	[福島]
	会津若松市教育委員会
42	会津若松市文化財調査報告書第174号 高野地区発掘調査報告書III 平沢遺跡 上高野C遺跡 上高野村前南遺跡 上高野村内遺跡
43	会津若松市文化財調査報告書第175号 庁舎整備発掘調査事業報告書 若松城郭内武家屋敷跡

44	会津若松市文化財調査報告書第176号 若松城郭内武家屋敷跡 筒井善太夫邸跡II —都市計画道路藤室鍛冶屋敷線整備に伴う発掘調査—
45	会津若松市文化財調査報告書第177号 平沢地区試掘調査報告書1 横道B遺跡 石上遺跡(仮) 平沢B遺跡(仮) 湯川東遺跡
	[東京]
	岩波書店
46	列島の東西・南北 つながりあう地域 明治大学文学部共同研究室 駿台史学会
47	駿台史学 第181号
48	駿台史学 第182号
	緑書房
49	ゲノムでたどる古代の日本列島 株式会社共同通信社
50	発掘された日本列島 2024 株式会社四門 文化財事業部
51	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告102 [TM223] 増上寺子院群-天陽院遺跡 発掘調査報告書 新泉社
52	つながるアイヌ考古学
53	つながるアイヌ考古学(第2版) 東京大学総合研究博物館
54	東京大学総合研究博物館ニュース Ouroboros Jul. 25,2024 第80号
55	東京大学総合研究博物館ニュース Ouroboros Jan. 31,2025 第81号 国際文化財株式会社
56	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告103 [TM121/163] 芝田町四丁目屋跡遺跡 豊後森藩久留島家・丹波亀山藩松平家屋敷跡遺跡 発掘調査報告書 大田区立郷土博物館
57	特別展 矢を放て! —関東の弓矢、一万年— [神奈川]
	神奈川県教育委員会教育局
58	神奈川県埋蔵文化財センター 年報 35 2022 (令和4年度)
59	神奈川県埋蔵文化財調査報告69 令和4年度神奈川県内埋蔵文化財発掘調査一覽
60	令和5年度かながわの遺跡展 華ひらく律令の世界 The Blooming World of RITSURYO 公益財団法人かながわ考古学財団
61	かながわ考古学財団調査報告336 田谷町相ノ田谷遺跡 高速横浜環状南線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
62	かながわ考古学財団調査報告340 八沢漆久保遺跡 新東名高速道路(秦野市八沢地区)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
63	かながわ考古学財団調査報告337 汲沢町吹上ヶ遺跡 高速横浜環状南線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
64	かながわ考古学財団調査報告339 御伊勢森遺跡 第2次調査 上粕屋・黒岩遺跡 上粕屋・北久保遺跡 —新東名高速道路(伊勢原市上粕屋地区)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査— 第1分冊
65	かながわ考古学財団調査報告339 御伊勢森遺跡 第2次調査 上粕屋・黒岩遺跡 上粕屋・北久保遺跡 —新東名高速道路(伊勢原市上粕屋地区)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査— 第2分冊
66	かながわ考古学財団調査報告341 寺山大仙寺遺跡 —新東名高速道路(秦野市大仙寺地区)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—
67	かながわ考古学財団調査報告342 田谷町堤遺跡 国道468号(高速横浜環状南線 横浜市田谷地区)建設事業に伴う発掘調査 第1分冊
68	かながわ考古学財団調査報告342 田谷町堤遺跡 国道468号(高速横浜環状南線 横浜市田谷地区)建設事業に伴う発掘調査 第2分冊
69	年報 30 令和4年度
70	研究紀要29 かながわの考古学 一財団設立30周年記念号—
71	かながわ考古学財団調査報告343 原宿町東谷遺跡 国道468号(高速横浜環状南線 横浜市戸塚地区)建設事業に伴う発掘調査
72	足元に眠る神奈川の歴史 写真とイラストでわかる遺跡・史跡 横浜市歴史博物館
73	横浜市歴史博物館 News No.57 2024.8 玉川文化財研究所
74	神奈川を掘るV 玉川文化財研究所 研究論集 2024 戸田哲也 追悼号
75	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書102 三田林根遺跡第5地点 県道42号(藤沢座間厚木)道路改良工事に伴う発掘調査
76	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書103 河原口坊中遺跡第13次調査 —級河川相模川河川改修工事に伴う発掘調査— 株式会社イビソク
77	鎌倉市 陣出遺跡 —鎌倉市寺分字上陣出393番の11外地点— 大成エンジニアリング株式会社
78	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書101 諏訪前A遺跡第18地点 七ノ域遺跡第15地点 都市計画道路3・3・6号湘南新道街路整備事業に伴う発掘調査
	[新潟]
	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 新潟市文化財センター
79	道正遺跡 第2・3・4次調査 岡崎遺跡 第4・5次調査 —主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う道正遺跡第2・3・4次、 岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書— 本文編
80	道正遺跡 第2・3・4次調査 岡崎遺跡 第4・5次調査 —主要地方道新潟中央環状線嘉瀬・割野工区道路改良工事事業に伴う道正遺跡第2・3・4次、 岡崎遺跡第3・4次発掘調査報告書— 図面図版・写真図版編
81	新潟市文化財センター年報 第11号 —令和4(2022)年度版—
82	寺裏遺跡 第3次調査 —経営体育成基盤整備事業(馬堀地区)に伴う寺裏遺跡第3次発掘調査報告書—
83	茶院A遺跡 第6次調査 —経営体育成基盤整備事業(打越地区)に伴う茶院A遺跡第4次発掘調査報告書—

	[山梨]
	山梨県立考古博物館
84	山梨県立考古博物館だより No.97
85	山梨県立考古博物館だより NO.98
86	縄文時代の不思議な道具
	南アルプス市教育委員会
87	2023年南アルプス市ふるさと文化伝承館テーマ展 かつて牧場があった！南アルプス山麓の古代牧
88	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第56集 山梨県南アルプス市 反田第1遺跡 住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
89	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第73集 山梨県南アルプス市 令和4年度埋蔵文化財試掘調査報告書 各種開発工事に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書
	[長野]
	大泰司 統
90	伊那 2024.9月号
	[愛知]
	安城市教育委員会
91	安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集 史跡 本證寺境内II
92	安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集 令和2年度市内遺跡調査報告 保科正直邸跡 北加美遺跡II
93	安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第52集 安城市西鹿乗地区の遺跡III 東上条遺跡 菱田遺跡 根崎遺跡 一県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書一
	[三重]
	三重県埋蔵文化財センター
94	三重県埋蔵文化財調査報告420 大蓮寺遺跡（第3次）発掘調査報告 ～松坂市櫛田町所在～
95	三重県埋蔵文化財調査報告417 石谷遺跡・石谷1号墳発掘調査報告 一伊賀市中村一
96	三重県埋蔵文化財調査報告186-12 東海環状自動車道建設事業に伴う 下平大野A遺跡発掘調査報告 一いなべ市北勢町一
97	三重県埋蔵文化財調査報告421 多気北畠氏遺跡（第39次）小田地区（第6次）発掘調査報告 ～三重県津市美杉町下多気～
98	三重県埋蔵文化財調査報告418 岡遺跡（第1・2次）発掘調査報告 ～三重県津市白山町二本木～
99	三重県埋蔵文化財調査報告419 津城跡（第5次）発掘調査報告 ～津市中央～
100	令和5年度 三重県埋蔵文化財年報
	[滋賀県]
	滋賀県文化スポーツ部文化財保護課
101	滋賀県内遺跡発掘調査報告書 令和3・4年度埋蔵文化財緊急調査費国庫補助事業（県内遺跡発掘調査等） 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
102	滋賀県文化財保護協会調査報告第1集 野洲市 西河原宮ノ内遺跡 比留田法田遺跡 湯ノ部遺跡
103	滋賀県文化財保護協会調査報告第2集 大津市 大野遺跡・普門南遺跡 守山市教育委員会事務局
104	下之郷遺跡確認調査報告書XIV 一第102次調査報告書一 公益財団法人栗東市スポーツ協会
105	栗東市埋蔵文化財調査報告 2022（令和4）年度 年報
106	はっくつ 2023 一栗東市話題の発掘調査一
	[京都]
	京都府教育委員会
107	京都府埋蔵文化財調査報告書
108	青山1号墳発掘調査報告書
109	京都府歴史の道調査報告書第三冊 奈良街道・大和街道 京都府立山城郷土資料館
110	令和六年度 特別展 南山城の戦国時代 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
111	京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和5年度
112	京都市内遺跡発掘調査報告 令和5年度
113	京都市内遺跡試掘調査報告 令和5年度
	[大阪]
	公益財団法人大阪府文化財センター
114	大阪文化財研究 第57号
115	年報 令和4年度
116	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第331集 寝屋川市 讃良郡条里遺跡11 寝屋川流域下水道四條畷増幹線立抗築造工事（R4-1）に伴う発掘調査報告書
117	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第332集 寝屋川市 梨木元遺跡 京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
118	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第334集 柏原市 大泉郡条里遺跡11・山ノ井遺跡5 寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
119	松原市文化財報告第19冊 公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第333集 松原市 三宅西遺跡 南部大阪都市計画事業 松原市三宅西土地区画整理事業に伴う三宅西遺跡（D2-1-2）発掘調査報告書
120	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第335集 枚方市 伊加賀遺跡2・伊加賀古墳群2 京阪本線（寝屋川市・枚方市）連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
121	大阪市中央区 大坂城下町跡（仮称）エクイニクス・ジャパンOS6計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 堺市文化観光局歴史遺産活用部文化財課
122	堺市文化財調査報告 第56冊 堺環濠都市遺跡第1310地点発掘調査報告
123	堺市文化財調査報告 第57冊 堺環濠都市遺跡第1338地点発掘調査報告
124	堺市文化財調査報告 第58冊 日置壮北町遺跡第7次発掘調査報告
125	堺市指定有形文化財石津太神社拝殿保存修理工事報告書 岸和田市教育委員会
126	岸和田城庭園（八陣の庭） 景石補修報告書
127	岸和田城庭園（八陣の庭） 整備計画
128	岸和田市・高石市文化財調査概要2 令和5年度 発掘調査概要
	[和歌山]
	公益財団法人和歌山県文化財センター
129	東郷遺跡 一江川小松原線通学路緊急対策事業に伴う発掘調査報告書一
130	里野中山城跡、結城城跡、浦屋敷跡 一すさみ串本道路建設事業に伴う発掘調査報告書一

131	吉原遺跡、松原経塚 一柏御坊線交通安全施設等整備事業に伴う発掘調査報告書一
132	岩橋千塚古墳群寺内地区 一和歌山平野農地防災事業新溝支線水路工事に伴う発掘調査報告書一
133	公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2023
	[鳥取]
	智頭町教育委員会
134	智頭町埋蔵文化財調査報告書13 鳥取県八頭郡智頭町 令和4年度 町内遺跡発掘調査報告書 一志戸坂峠防災事業及び坂原地区復旧治山事業に伴う試掘調査一
135	智頭町埋蔵文化財調査報告書14 鳥取県八頭郡智頭町 坂原アセ高遺跡 一坂原地区復旧治山工事に伴う発掘調査報告書一
	三朝町教育委員会
136	町内遺跡発掘調査報告書 県道鳥取鹿野倉吉線坂本バイパス工事に伴う 坂本地区発掘調査三朝町水道事業に伴う本泉地区発掘調査
	江府町教育委員会
137	江府町文化財報告書第10集 江美城跡公園緑化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鳥取県日野郡江府町 江美城跡
138	江府町文化財報告書第11集 江府町内遺跡発掘調査報告書 吉ヶ谷たたら跡
	[広島]
	公益財団法人広島県教育事業団
139	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第91集 地頭分津ノ尾遺跡・地頭分津ノ尾第2～5号古墳 一般国道2号改築(福山道路)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2
140	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第92集 亀居城関連遺跡(2) 一般国道2号改築事業(岩国・大竹道路)に伴う発掘調査報告一
141	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第93集 城ノ本遺跡 一般国道432号(竹原バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
142	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第94集 中山城跡 福山沼隈線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
143	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第98集 二才原遺跡(第2次調査) 一新山府中線単車道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一
	広島県立歴史博物館
144	ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館)ニュース 第139号
145	草戸千軒町遺跡調査研究報告14 草戸千軒町遺跡の出土銭
146	草戸千軒町遺跡調査研究報告15 草戸千軒町遺跡出土の石塔類
	[山口]
	山口市教育委員会
147	山口市文化財年報17 一令和4(2022)年度一
148	山口市埋蔵文化財調査報告第129集 凌雲寺跡3
149	史跡周防銭司跡保存活用計画
	美祢市教育委員会
150	美祢市文化財調査報告第2集 長登銅山跡V 一平成8年度から10年度調査報告書一
	[福岡]
	筑紫野市教育委員会
151	筑紫野市文化財調査報告書第123集 常松遺跡 第6・7・8次発掘調査
152	筑紫野市文化財調査報告書第124集 柚ノ木遺跡第2・3次発掘調査
	[佐賀]
	伊万里市教育委員会
153	伊万里市文化財調査報告書第55集 見向遺跡 特別高圧送電線路220kv西九州武雄線大規模改修工事に伴う文化財調査報告書
154	伊万里市文化財調査報告書第57集 粟木谷窯跡 伊万里市松浦町所在の近世窯跡調査報告書
155	伊万里市文化財調査報告書第58集 伊万里市内遺跡発掘調査報告書 平成30年度・令和元年度・令和2年度
156	伊万里市文化財調査報告書第60集 日峯社下窯跡 3～12次調査報告書 伊万里市大川内町所在の近世窯跡調査報告書
	[鹿児島]
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
157	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第92号
158	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第93号
159	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(222) 県内遺跡発掘調査等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(7) 黒川洞穴(日置市吹上町永吉坊野)
160	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(223) 主要地方道鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 廣牧遺跡(鹿屋市吾平町)
161	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(224) 主要地方道鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 久保田牧遺跡2(鹿屋市吾平町)縄文時代早期・前期前葉編 立塚遺跡1(鹿屋市吾平町)縄文時代早期編
162	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(225) 「廃寺は語る!よみがえる鹿児島島の仏教文化」事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 光台寺跡(指宿市岩本) 照信院跡(曾於郡大崎町神領) 大願寺跡(薩摩郡さつま町柏原)
163	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(226) 県内遺跡発掘等事業に伴う河口コレクション発掘調査報告書(8) 高橋貝塚1(発掘調査記録写真集)(南さつま市金峰町高橋)
164	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(54) 薩摩川内市街部改修(天辰第二地区引堤)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 平佐焼窯跡群(松山・柚木崎窯跡)(薩摩川内市天辰町)
165	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(55) 南九州西回り自動車道(芦北出水道路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 六反ヶ丸遺跡4-E地点(出水市六月田町)
166	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(56) 一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(V) 萩ヶ峰遺跡 白水B遺跡(鹿屋市白水町) 山ノ上A遺跡(鹿屋市小野原町)
	[大韓民国]
	石壮里博物館(Seokjang-ri Museum)
167	Ice Age, Great Discoveries

IV 普及・啓発事業

1 展示公開

(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」

遺物を素材別にまとめ、その変遷や特徴が分かるようにした「石の道具」「木の道具」「金属の道具」「土の道具」のほか、「遺跡調査と保護活用」「装いところ」「動物とひと」「キウスの縄文ムラ」の8つのテーマを常設展示としていたが、昨年度「世界文化遺産北海道・北東北の縄文遺跡」をテーマとしたパネル・ジオラマ展示を10月以降に加え、さらに今年度は「体験展示 さわってみよう！・縄文人になろう！」を4月から開始した。全体で10のテーマでの構成である。また「世界文化遺産北海道・北東北の縄文遺跡」の展示は、昨年度からジオラマ1点を新たに製作し追加した。

展示にあたっては、国（文化庁）・函館市・七飯町・北斗市・今金町・木古内町・余市町・夕張市・長沼町・遠軽町・福島町・厚真町・江別市・根室市・苫前町の各教育委員会に、展示品借用についての協力を得た。また、企画展示との関係から、展示室とホールを併用して展示を行っている。

【千歳市ママチ遺跡出土土面展示】

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は、縄文時代晩期終末のもので、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した。土面としては最も北方から出土したものである。

【遺跡調査と保護活用】

北海道の遺跡分布、遺跡の調査や整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについて展示・解説している。

【石の道具】

石は人類が最も古い時代から利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、石刃技法、細石刃技法などの一次剥離技術が卓越することが大きな特徴で、高度な技術で製作されたことが明らかになっている。人々は氷期の厳しい環境を生き抜くため、移動・遊動生活の中で石器の効率的な生産と消費の形態を発達させたが、その具体的な方法の一つが定型的石器製作である。本テーマでは遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器・接合資料などを展示しており、具体的な製作技術を観察することができる。



▲常設展示（「石の道具」展示（旧石器・縄文））

縄文時代の石の道具は、海洋と森林環境の豊富な資源を利用するため多用途に石器が発達していく。刺突・切断の剥片石器類、木材加工の石斧、製粉や錘（おもり）の礫石器など用途に応じて適した石材を選び、様々な形の石器が作られた。石器製作技術では押圧剥離、研磨、敲打整形が石材特性に応じて選択された。本テーマでは千歳市周辺で出土した縄文時代の石器を中心に展示し、環境利用のためどのような石器が使われたのかをパネルと実物でわかりやすく解説している。

また、縄文人がどのような食べ物を、四季折々を通じて獲得していたかを示す「縄文たべものカレンダー」をパネル展示し、シールで縄文の食を楽しく学べる、ワークシートも提供している。

【木の道具】

木の道具は人間が生活する上で必需品であったと思われるが、通常の遺跡では殆どの場合腐ってしまい残らない。そのため、腐食しにくい低温性遺跡で出土した木の道具は、当事の人々の生活の様子を考える上で大変貴重な資料である。

本コーナーでは千歳市美々8遺跡低温部の擦文文化期・アイヌ文化期の遺物を主体に、ユカンボシC15遺跡の板綴舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の木槌などを展示している。資料は保存処理を経たうえで展示している。中でも千歳市美々8遺跡低温部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定されており、資料を定期的に入れ替えながら常設展示している。

【金属の道具】

金属製品は人工的に抽出された材料によって作られた、人類史上最も新しい道具の一つである。北海道においては刀・刀子・鍋等の金属製品は道外からの移入品で、これら鉄を主とした道具を手

常設展示点数一覧

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー		遺物点数	パネル・レプリカなど	合計点数	
ホール・展示回廊		17	125	142	
常設展示室	受付・導入部分	8	23	31	
	「遺跡調査と保護活用」	遺跡調査	5	118	123
		遺物の保存と分析	3	118	121
	「石の道具」	旧石器時代の石器	140	19	159
		縄文時代の石器	90	11	101
	「木の道具」	縄文時代の木製品	8	14	22
		擦文・アイヌ文化期の木製品	6	32	38
	「金属の道具」		12	2	14
	「骨の道具」		2	3	5
	「土の道具」		311	65	376
	「こころの道具」	装いとこころ	486	5	491
		動物とひと	13	9	22
	「キウスの縄文ムラ」		60	7	67
	「遺跡から見たアイヌ文化」		0	3	3
「世界文化遺産北海道・北東北の縄文遺跡群」		0	37	37	
「体験展示 さわってみよう、縄文人になろう」		530	39	569	
「新しい時代へ」		17	2	19	
屋 外	エントランスひろば	0	1	1	
	中庭	0	1820	1820	
合 計		1708	2453	4161	

に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。金属製品は腐食しやすい材質であり、資料はすべて保存処理を行って展示をしている。昨年度に引き続きアイヌ文化期の資料である千歳市キウス5遺跡の鋏先や祝梅川上田遺跡の鋏、美々8遺跡の袋状鉄斧などを展示している。

【土の道具】

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に化学変化を利用して作り上げた道具である。水に強く火にかけられる土器は革命的な調理具であり、食材の利用範囲が大きく拡大し縄文時代の生活に安定をもたらしたと考えられている。土器は人々の生活に深く関わることから、集団のアイ



▲常設展示 「土の道具」展示（晩期・続縄文土器）

デンティティが反映されたとみられ、時代や地域によって器形や施文が様々に変化する。中には機能を超越した形態や美しさが造形されたものもみられ、精神世界の一端も垣間見ることが出来る。

本コーナーでは縄文時代早期から擦文文化期までの土器を深鉢・甕を主体として通時的に展示し、北海道内の土器の移り変わりが理解できるよう努めている。さらに、道指定重要文化財赤彩注口土器（縄文時代後期八雲町野田生1遺跡）の複製品や長沼町12区B遺跡出土赤彩異形環状土器（長沼町教育委員会所蔵）を展示し、精緻な縄文の工芸技術を紹介している。また、擦文文化期の紡錘車・土錘など、土器以外の土製生活用具についても解説し、土の道具の多様さを紹介している。

本コーナーでは土器の特徴を柔らかく表現した子供向けの解説パネルや、土器を型式別に擬人化したキャラクターなどを点在させ、親しみやすい展示も目指している。

【こころの道具】

「装いとこころ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製勾玉などの石製の玉類、垂飾、玦状耳飾、粘土を焼いて作られた土玉、土製耳飾などがあり、当時の人々のおしゃれごころを知ることができるほか、社会的な身分を示した威信的性格もみることができる。

また、墓の副葬品は当時の人々の死者に向けられた「こころ」や「評価」が窺える。前者では子供の足形を取った足形付き土版（縄文時代早期）、



▲常設展示 「こころの道具」 展示（足形付き土版）

死者の再生を願って供えられた妊婦の土偶（縄文時代後期）、重要な儀式に用いられたであろう石棒（縄文時代後期）などがあげられる。後者は特定の墓に供えられたヒスイ玉や琥珀玉などの希少品である（縄文時代後期・続縄文文化期）。本コーナーでは千歳市美々4遺跡、キウス4遺跡の資料を中心に、多数の資料を展示した。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現された動物たちに、何を感じ、何を求めていたのか、当時の人々の自然と向き合う生活の一端を考えさせられる。本コーナーでは江別市対雁2遺跡の動物形土製品（縄文時代晩期）や北斗市茂別遺跡のクマ意匠付き土器（続縄文文化期）の実物資料のほか、国指定重要文化財である千歳市美々4遺跡動物形土製品（縄文時代後期）、羅臼町松法川北岸遺跡のクマ形木製容器（オホーツク文化期）などの複製品も展示している。

【キウスの縄文ムラ】

千歳市キウス4遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマで復元した。盛土遺構については土層断面の剥ぎ取りや、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器や土製品、玉類、土偶などの出土資料を展示した。

【遺跡からみたアイヌ文化】

小テーマ「コタンについて」では美々8遺跡のアイヌ文化期の様子を復元したジオラマ「美々ムラ」により遺跡が水上交通の要衝であったことを、小テーマ「チャシについて」では平取町ポロモイチャシとユオイチャシのジオラマによりチャシの立地や景観について、小テーマ「チセについて」では千歳市オリカ2遺跡で採取したチセの



▲常設展示 体験展示「縄文人になろう！」

柱穴や炉跡の剥ぎ取りを活用して住居構造などについて、解説した。

【世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」】

「世界遺産とは？」及び「北海道・北東北の縄文遺跡群」の二つのテーマに分けてパネルを展示し、前者では世界遺産の種類、世界遺産の意義、登録の基準について、後者では縄文遺跡群の顕著な普遍的価値の内容、シリアル・プロパティの遺産であること、定住の6つのステージの内容について解説を行っている。また定住の6ステージのジオラマにより各ステージの集落の内容と発展の様子が一目で分かる様にした展示、北海道・北東北の縄文遺跡群の土地利用と自然資源利用そして津軽海峡を挟んだ交流を示したジオラマ展示なども行っている。

本展示は、世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の顕著な普遍的価値を、常時、体感的に、広い世代に、分かりやすい言葉と分かりやすい構成で伝える、展示空間としている。こうした展示による発信は道内では他に行われていないため、今後の増加を期待したい。

【体験展示 さわってみよう！・縄文人になろう！】

「さわってみよう！」は実物資料に触れる体験、「縄文人になろう！」は復元製作した装身具を身に付ける体験である。前者は美々4遺跡呑口地区出土の土器破片資料、石斧・すり石・敲石などを展示し、自由にさわること、質感や重さを実感し、観察、付着物や使用痕跡などへの気付きをねらいとしている。後者は実験考古学で復元した資料（漆塗櫛、ベンケイガイ製貝輪）を身に付けることで、先史古代人の気分を味わってもらい、さらにもものづくりへの興味関心を高めること

をねらいとしている。

【体験コーナー】

火起し体験コーナー：ひもぎり式、弓ぎり式、まいぎり式による火起こし体験ができる。

土の道具コーナー：ミニチュア土器・土製耳飾り・土偶つくりの他、土器拓本体験ができる。

石の道具コーナー：滑石を使った石製品つくりができる。

その他：土器のペーパークラフト、砂絵、塗り絵パタパタ絵本つくりができる。

【ビデオコーナー】

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

(2) 企画展示

ア、「遺跡と関わる世界遺産『百舌鳥・古市古墳群』パネル展

展示期間：令和6年7月6日（土）～令和6年9月29日（日）

会場：常設展示室

目的：北海道では、青森県、岩手県、秋田県及び関係市町とともに、世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の保存・活用に関する取組を進めている。北海道立埋蔵文化財センターはこれに連携して、構成資産及び関連資産である北海道・北東北3県の縄文遺跡群についての展示を行い、道民をはじめ広く情報発信している。

これまでの情報発信に加えて、今年度、遺跡と関わる世界遺産を紹介する展示を開催することにより、日本における遺跡と関わる世界遺産を深く



▲企画展示 百舌鳥・古市古墳群パネル展

学ぶ機会とし、さらに世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」を多くの方に知ってもらうことを目的とした。

展示概要：

I 古墳・古墳時代の概要

- 1 古墳とは
- 2 古墳の形・規模

II 百舌鳥・古市古墳群

- 1 世界遺産登録までの道のりと現在
- 2 百舌鳥・古市古墳群

III おしえて！もずふる

- 1 世界遺産ってなに・世界遺産の種類・日本の世界遺産
- 2 古墳ってなに・造られたころの古墳・日本全国の古墳
- 3 百舌鳥・古市古墳群ってなに・百舌鳥エリアと古市エリア・百舌鳥・古市古墳群のくちょう

展示関連パネルおよび写真借用依頼先

百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議
堺市 文化観光局 歴史遺産活用部 世界遺産課
羽曳野市教育委員会
藤井寺市教育委員会

データベース等システム借用依頼先

関西大学総合情報学部堀研究室

【展示企画】普及活用課長 倉橋 直孝

イ、北海道・北東北の縄文遺跡群3－縄文遺跡群とストーンサークル もっともっと驚ノ木遺跡－展

期間：令和6年12月7日（土）～令和7年2月22日（土）

会場：常設展示室

内容：展示構成として大きく2つのテーマを設けた。テーマ1は「世界遺産ってなに？」と「北海道・北東北の縄文遺跡群の価値」で、世界遺産の定義や意義、縄文遺跡群の顕著な普遍的価値について主に解説した。テーマ2は「縄文遺跡群とストーンサークル」で、ストーンサークル（環状列石）の定義、北海道・北東北におけるストーンサークルの時代・種類・機能・造営の労力・造営集団の集落・天体との関係などを解説し、北海道最大の環状列石が確認された関連資産驚ノ木遺跡



▲企画展示 北海道・北東北の縄文遺跡群3展



▲令和5年度調査成果展

の様相について詳しく紹介した。

対象は主に中学生以上とし、小学生以下にも要点が伝わる様に努めた。また分かりやすく記憶に残る展示を目指し、イラストやジオラマなどビジュアルによる伝達を多く取り入れた。配布物としては北海道・北東北の縄文遺跡群のストーンサークルの様相と鷲ノ木遺跡について紹介した解説冊子を作成した。

【展示小テーマ】

- (1) 世界遺産とは？
- (2) 北海道・北東北の縄文遺跡群の価値
- (3) 長さ実感！縄文遺跡群リアルスケール年表
- (4) 縄文遺跡群とストーンサークルの謎①～③
- (5) もっともっと鷲ノ木遺跡！①・②

【展示資料】

総展示点数83点

- 森町鷲ノ木遺跡出土資料（土器・石製品・土製品 17点）
- 森町鷲ノ木4遺跡出土資料（土器・石器・石製品・土製品 61点）
- 八雲町浜松5遺跡出土資料（土製品 1点）
- 八雲町コタン温泉遺跡出土資料（土製品 4点）

【展示企画】普及活用課主査 坂本 尚史

ウ、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター令和5年度調査成果展

期 間：令和6年3月23日（土）～5月26日（日）

会 場：常設展示室

目 的：公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和5年度に行った調査成果を紹介する。

内 容：出土遺物・説明パネル・写真パネル等で発掘調査成果の展示を行う。

- 1 発掘調査成果（パネル展示+遺物展示）

- 千歳市 美々4遺跡
（縄文時代後・晩期の土器・石器等）

2 発掘調査成果（パネル展示のみ）

- 興部町 興部豊野竪穴群（B）
- 松前町 福山城下町遺跡
- 長万部町 豊野3遺跡
- 苫小牧市 有珠川7遺跡

【展示企画】普及活用課主査 芝田 直人

エ、北の縄文 世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡群展

会 期：通年

（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

目 的：令和3年7月に世界文化遺産に登録された「北東北・北海道の縄文遺跡群」の内容について、主に写真を用いて紹介する。

展示場所：ホール

【展示遺跡】

北海道：キウス周堤墓群、北黄金貝塚、入江・高砂遺跡、鷲ノ木遺跡（関連資産）、大船遺跡、垣ノ島遺跡

青森県：三内丸山遺跡、小牧野遺跡、是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚、二ッ森貝塚、大平山元Ⅰ遺跡、大森勝山遺跡

岩手県：御所野遺跡

秋田県：大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡など

【展示企画】普及活用課長 倉橋 直孝



▲北の縄文 世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡
群展

2 資料の特別利用等

(1) 特別利用

番号	利用者	利用目的	利用期間	使用方法	利用資料名
1	三内丸山遺跡センター文化財保護主幹 最上 法聖、文化財保護主事 木村 恵理	令和6年度特別展示「海がむすぶ縄文」に係る資料借用の事前調査のため	令和6年 5月14日	閲覧・撮影	千歳市キウス4遺跡土器・土製品・動植物遺存体 20点（北埋調報134・152・157・180掲載資料）、千歳市キウス9遺跡石器6点（北埋調報252掲載資料）、千歳市トブシナイ2遺跡石器4点（北埋調報348掲載資料）、千歳市ママチ遺跡黒曜石原石1点（北埋調報36掲載資料）、千歳市美々4遺跡動物意匠付土器1点（北埋調報113掲載資料）
2	石狩市教育委員会生涯学習部文化財課学芸員 荒山 千絵	石狩市紅葉山33号遺跡出土「漆塗弓」との比較調査のため	令和6年 5月16日	閲覧・撮影	千歳市キウス4遺跡出土弓1点（北埋調報124 図V-6-71）、千歳市ユカンボシC15遺跡出土弓3点（北埋調報159 図VI-36-141・142、図VI-37-143）
3	駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻 望月 千裕	卒業論文作成のため	令和6年 5月25日	閲覧・撮影	美々4遺跡土坑墓群出土ヒスイ製玉類 50点（北埋調報24）、美々4遺跡土坑墓出土ヒスイ製玉類26点（北埋調報3 図74-1、88-1～23、94-8、159-146～168・182）、美々4遺跡土坑墓出土ヒスイ製玉類3点（北埋調報14 図135-37、145-33・34）、美々4遺跡土坑墓出土ヒスイ製玉類1点（北埋調報17 図98-78）、キウス4遺跡土坑墓出土ヒスイ製玉類1点（北埋調報134 図IV-137-8）、キウス4遺跡土坑墓出土ヒスイ製玉類4点（北埋調報180 図V-201-216・217 図VII-10-53）
4	北海道大学大学院医学研究院助教 中沢 祐一・北海道教育委員会 赤井 文人・千歳市教育委員会 直江 康雄・日本工営株式会社 松井 昭	調査研究のため	令和6年 6月16日	閲覧・撮影	柏台1遺跡出土旧石器資料（北埋調報138『千歳市柏台1遺跡』図V-1～63掲載資料）
5	中央研究院地球科学研究所 飯塚 義之	化学分析による石器石材の変遷・分布域の研究のため	令和6年 7月7日	閲覧・撮影	オサツ2遺跡 管玉（北埋調報96「オサツ2遺跡（1）・オサツ14遺跡」）4点、美々7遺跡 石斧・石製品ほか（北埋調報77「美沢川流域の遺跡群XV」北埋調報83「美沢川流域の遺跡群XVI」）20点、キウス5遺跡 石斧関連資料（北埋調報125「キウス5遺跡（5）」）14点、キウス7遺跡 石斧関連資料（北埋調報127「キウス7遺跡（5）」）7点、キウス9遺跡 石斧関連資料（北埋調報252「キウス9遺跡」）14点、イカベツ2遺跡 石斧関連資料ほか（北埋調報348「トブシナイ2遺跡・イカベツ2遺跡」）3点

番号	利用者	利用目的	利用期間	使用方法	利用資料名
6	東北歴史博物館学芸部学芸班 渡邊 直樹・企画部企画班 山田 凛太郎	令和7年度特別展示「世界遺産 縄文」に係る資料借用の事前調査のため	令和6年 7月12日	閲覧・撮影	千歳市美々4遺跡ヒスイ製玉類（北埋調報24 土坑墓群出土資料（一部文化庁列島展に貸出し中）一式、 竪穴住居跡ジオラマー式
7	恵庭市郷土資料館主査・学芸員 長町 章弘	第44回日本貿易陶磁研究会において報告する資料の撮影のため	令和6年 7月24日	閲覧・撮影	チブニー2遺跡出土青磁碗（「チブニー2遺跡（2）」北埋調報207 図Ⅲ-3-1）1点、ユカンボシC15遺跡出土青磁皿（「ユカンボシC15遺跡」北埋調報159 図Ⅲ-1-7）1点、美々8遺跡出土青磁椀（「美沢川流域の遺跡群XⅧ」北埋調報102 図Ⅳ-18-2）1点、祝梅川上田遺跡出土青磁平皿（「祝梅川上田遺跡（2）」北埋調報300 図Ⅶ-12）1点。
8	同志社大学新町キャンパス考古学研究室 橋本 佳奈	卒業論文作成のため	令和6年 8月9日	閲覧・ 模写・撮影	美々8遺跡出土刻印土器（坏）（北埋調報8 図8-10）1点
9	北海道大学大学院医学研究院 助教 中沢 祐一	調査研究のため	令和6年 8月22日	閲覧・撮影	アンカリトー7遺跡出土旧石器資料 <北埋調報268 図Ⅵ-14-1～36-284（図版36～40）掲載資料>284点
10	岡山大名誉教授 稲田 孝司	私費による学術調査のため	令和6年 9月6日	閲覧・撮影	千歳市柏台1遺跡 蘭越技法細石刃接合資料（接合5・6）北埋調報138集 図Ⅴ-54・55 2点
11	ロシア連邦極東東邦大学付属博物館長北海道大学国際連携研究教育局先住民・文化的多様性グローバルステーション研究員 アリクサンドル・ニカライエヴィチ・ポポフ	新石器時代墓坑副葬品の資料調査	令和7年 2月14日	閲覧・撮影	千歳市美々7遺跡 P-37副葬品（土器・石器・土製品）北埋調報77 図Ⅳ-15・16 6点、P-38副葬品（石器・土製品）北埋調報83 図Ⅱ-10 22点、P-43副葬品（土器・石器）北埋調報83 図Ⅱ-10 5点、祝梅川小野遺跡 VP-59副葬品（土器）北埋調報285 図Ⅳ-2-2 1点、キウス5遺跡 P-19副葬品（石器）北埋調報116 図Ⅳ-22～25 16点

(2) 模写品等の刊行等の承認

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
1	株式会社 敬文舎 代表取締役 柳町 敬直	安斎正人『縄文を訪ねる (仮)』に使用	複写	八雲町野田生1遺跡口絵-2 (上)写真ほか 写真デジタル データ 9点	令和6年 4月19日	令和6年 5月7日
2	三内丸山遺跡センター 所長 岡田 康博	三内丸山遺跡センター5 周年記念特別展第2部 「海がむすぶ縄文」にお ける図録作成・広報等に 使用	撮影・ 複写	千歳市キウス4遺跡出土中茶路 式土器ほか 写真撮影 13 点、デジタルデータ 6点	令和6年 5月21日	令和6年 5月29日
3	(株) イベント工学研究所 森 川 朋明	「カーピアセロム」に使用	複写	千歳市「キウス周堤墓群」第1 号周堤墓写真 写真デジタル データ 1点	令和6年 5月21日	令和6年 5月29日
4	株式会社 朝日新聞出版生活・ 文化編集部 唐沢 俊介	朝日新聞出版刊行の書籍 及び電子書籍に使用	複写	千歳市「キウス周堤墓群」第1 号周堤墓の写真 写真デジタル データ 1点	令和6年 6月4日	令和6年 6月12日
5	恵庭市郷土資料館長 高野 隆 司	第44回日本貿易陶磁研究 会において「恵庭・千歳 出土の貿易陶磁器」報告 に使用	複写	千歳市祝梅川上田遺跡(北埋調 報300) 図版1上「調査状況」 ほか 写真デジタルデータ 14点	令和6年 6月24日	令和6年 7月5日
6	恵庭市郷土資料館長 高野 隆 司	第44回日本貿易陶磁研究 会資料集と研究発表(パ ワーポイント)、会誌『貿 易陶磁研究』に使用	撮影	千歳市チプニー2遺跡出土青磁 碗ほか 写真撮影 4点	令和6年 6月24日	令和6年 7月5日
7	(株) イベント工学研究所 森 川 朋明	「カーピアセロム」に使用	複写	千歳市美々8遺跡低湿部調査状 況写真、周堤墓群(美々4遺跡) 調査写真 写真デジタルデータ 2点	令和6年 7月12日	令和6年 7月18日
8	千歳市教育委員会教育長 佐々 木 智	令和7年4月開設予定の 史跡キウス周堤墓群ガイ ダンス施設における展示 映像の素材に使用	複写	千歳市美々4遺跡周堤墓調査 写真ほか 写真デジタルデータ 7点	令和6年 7月17日	令和6年 8月6日
9	北海道胆振総合振興局長 関 俊一	胆振総合振興局HPパン フレット「胆振管内の主 な縄文遺跡(PDFファイ ル)」に使用	複写	厚真町朝日遺跡遠景ほか 写真 デジタルデータ 4点	令和6年 7月29日	令和6年 8月22日
10	早稲田大学先史考古学研究所 坂口 隆	論文「周堤墓形成期にお ける粘板岩類製細形石棒 の原産地に関する基礎的 研究」に使用	撮影	千歳市キウス4遺跡、千歳市 美々4遺跡の石棒類 写真撮影 18点	令和6年 8月20日	令和6年 8月26日
11	株式会社 岩波書店取締役編集 局部長 山本 賢	書籍『列島の東西・南北』 の本文挿図に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡土壙墓P98 出土遺物写真 写真デジタル データ 1点	令和6年 8月21日	令和6年 8月26日
12	恵庭市郷土資料館長 高野 隆 司	広報えにわ10月号ミニ特 集「国の重要文化財に指 定 西島松5遺跡出土 品」に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡完掘全景写 真ほか 写真デジタルデータ 10点	令和6年 8月26日	令和6年 9月3日
13	北の縄文道民会議(広報) 甲 谷 恵	北の縄文道民会議が発行 する会報「北の縄文」 Vol33(10月1日発行に 使用)	複写	遠軽町上白滝8尖頭器写真 写 真デジタルデータ 1点	令和6年 9月24日	令和6年 10月1日
14	千歳市教育委員会教育長 佐々 木 智	縄文フォーラム2024冬 のポスターに使用	複写	芦別市野花南周堤墓群、斜里町 朱門周堤墓群現場撮影写真 写 真デジタルデータ 3点	令和6年 9月25日	令和6年 10月10日

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
15	一般社団法人日本考古学協会 会長 石川 日出志	日本考古学協会公式サイト 国際交流コンテンツに 使用	複写	千歳市美々4遺跡斜面部遠景写 真ほか 写真デジタルデータ 20点	令和6年 8月30日	令和6年 10月10日
16	伊達市長 堀井 敬太	伊達市が刊行する書籍 (市史)に使用	複写	伊達市西関内3遺跡IV層までの 堆積状況写真 写真デジタル データ 1点	令和6年 10月2日	令和6年 10月10日
17	恵庭市郷土資料館長 高野 隆 司	「西島松5遺跡出土品重要 文化財新指定記念講演 会」ポスターに使用	複写	恵庭市西島松5遺跡P98完掘写 真ほか 写真デジタルデータ 2点	令和6年 10月7日	令和6年 10月15日
18	株式会社ナチュラルサイエンス 取締役北海道支店長 高島 章	「ナチュの森で縄文にて あう」展で展示パネルに 使用	複写	白老町虎杖浜2遺跡貝塚写真 写真デジタルデータ 1点	令和6年 10月24日	令和6年 10月28日
19	千歳市教育委員会教育長 佐々 木 智	令和6年度企画展示「あ なたのそばの遺跡たち ～千歳市内の遺跡紹介 勇舞、桜木、自由ヶ丘、 長都地区編～」展示パネ ルに使用	複写	千歳市オサツ2遺跡鍛冶遺構写 真ほか 写真デジタルデータ 65点	令和6年 11月28日	令和6年 12月5日
20	千歳市教育委員会教育長 佐々 木 智	千歳と恵庭の地域情報誌 『ちゃんと』CMC通信に 使用	複写	千歳市美々4遺跡土器写真 写 真デジタルデータ 1点	令和6年 12月12日	令和6年 12月24日
21	千歳市教育委員会教育長 佐々 木 智	令和6年度千歳市立図書 館出張展示「もっと知り たい千歳の縄文」に使用	複写	千歳市キウス4遺跡土器展開写 真 写真デジタルデータ 1点	令和6年 12月12日	令和6年 12月24日
22	白老町教育委員会 教育長 井 内 宏磨	令和7年3月に発行する 『白老町史〔平成版〕』 の口絵に使用	複写	白老町社台1遺跡出土の朱塗土 器写真ほか 写真デジタルデ ータ 2点	令和6年 12月13日	令和6年 12月24日
23	恵庭市郷土資料館長 高野 隆 司	国立アイヌ民族博物館ブ ンカラ共同研究「13世紀 に至る恵庭市域所在の擦 文土坑墓の考古学的基礎 研究」に使用	複写	恵庭市ユカンボシE7遺跡口絵 1写真ほか 写真デジタルデ ータ 28点	令和6年 12月20日	令和7年 1月7日
24	株式会社かみゆ 代表 滝沢 弘康	『ポプラディアプラス 日 本史 1巻 古代～中世 (仮)』に使用	複写	遠軽町白滝遺跡群全景写真 写 真デジタルデータ 1点	令和6年 12月24日	令和7年 1月7日
25	伊達市教育委員会 教育長 影 山 吉則	伊達市教育委員会が主催 する埋蔵文化財普及事業 の周知チラシ等に使用	複写	函館市桔梗2遺跡出土シャチ形 土製品写真 写真デジタルデ ータ 1点	令和6年 12月26日	令和7年 1月7日
26	北海道大学埋蔵文化財調査セン ター 高倉 純	日本第四紀学会編『図説 日本の自然史』朝倉書店 刊行において黒曜石産地 遺跡での旧石器遺跡の調 査状況を示す挿図に使用	複写	『白滝遺跡群VII』(北埋調報 236)口絵7-2 写真デジタ ルデータ 1点	令和7年 1月7日	令和7年 1月14日
27	株式会社技術評論社 大倉 誠 二	書籍『アンモナイトの美』 (仮題)に使用	複写	千歳市美々4遺跡出土アンモナ イト (<i>Eupachydiscus haradai</i>) 化石写真	令和7年 1月15日	令和7年 1月29日
28	株式会社山川出版社 代表取締 役 野澤 武史	『詳説日本史 改訂版』に 使用	複写	苫小牧市美沢I遺跡出土石棒写 真 写真デジタルデータ 1点	令和7年 1月21日	令和7年 2月4日
29	サイネット株式会社 村田 潤 一郎	帝国書院発行の文部科学 省検定教科書に使用	複写	千歳市キウス9遺跡出土石刃鏃 写真 写真デジタルデータ 1 点	令和7年 1月21日	令和7年 2月4日
30	株式会社ユニフォトプレスイ ンターナショナル 須永 信吾	帝国書院発行の高校生向 け教科書『新詳 日本史探 究』(仮称)に使用	複写	千歳市キウス第1号周堤墓写真 写真デジタルデータ 1点	令和7年 1月29日	令和7年 2月4日

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書
31	いしかり砂丘の風資料館学芸員 荒山 千恵	石狩市文化財保護審議会 資料に使用	撮影	千歳市キウス4遺跡漆塗り弓写 真 写真撮影 1点	令和7年 2月6日	令和7年 2月13日
32	北海道環境生活部文化振興課 縄文世界遺産推進室長 栗原 肇	教育普及用パンフレット 『じょうものトリセ ツ』に使用	複写	木古内町幸連5遺跡空撮写真ほ か 写真デジタルデータ 7点	令和7年 2月21日	令和7年 2月26日
33	株式会社 JR北海道ソリュー ションズ広告事業本部 JR部 JR2グループ『The JR Hokkaido』 編集人 江向 宣生	JR北海道車内広報誌『The JR Hokkaido』3月号に 使用	複写	北海道白滝遺跡群出土尖頭器写 真、白滝遺跡群空撮写真 写真 デジタルデータ 2点	令和7年 2月26日	令和7年 2月28日
34	松前町教育委員会教育長 宮島 武司	松前町郷土資料館展示パ ネル作成に使用	複写	松前町福山城下町遺跡調査区全 景写真ほか 写真デジタルデー タ 26点	令和7年 3月5日	令和7年 3月11日
35	千歳市埋蔵文化財センターセン ター長 平野 崇徳	千歳市遺跡調査報告会広 報ポスター製作に使用	複写	千歳市美々4遺跡出土ヒスイ勾 玉写真 写真デジタルデータ 1点	令和7年 3月4日	令和7年 3月11日
36	北海道胆振総合振興局長 関 俊一	「北の縄文パネル展」の 展示パネル及び振興局 HPに掲載するパンフ レット（ファイル形式： PDF）に使用	複写	厚真町朝日遺跡遠景写真 写真 デジタルデータ 7点	令和7年 2月27日	令和7年 3月17日
37	同志社大学新町学舎考古学資料 室 橋本 佳奈	第71回考古学研究会総会 ポスター発表に使用	撮影	千歳市美々8遺跡出土土器 写 真撮影 2点	令和7年 3月18日	令和7年 3月25日

(3) 資料の貸出

番号	申請者	利用目的	利用期間	利用資料名・点数	申請書	承認書
1	せんだいメディアテーク 館長 鷺田 清一	令和6年度せんだい メディアテーク 自主企画展覧会 「椎名勇仁可塑 圏：ねん土的思 考」に展示のため	令和6年10月16日か ら令和7年1月24日 まで（101日間）	椎名勇仁作品《巨人》（2001年） 1点、有舌尖頭器レプリカ1点（北 埋調報169『白滝遺跡群Ⅲ』図Ⅲ -322-3 50Q28-1）	令和6年 5月4日	令和6年 5月9日
2	株式会社ナチュラルサイ エンス 取締役北海 道支店長 高島 章	「ナチュの森で縄 文にであう」展で 展示のため	令和6年8月29日か ら令和6年9月4日ま で（7日間）	函館市著保内野遺跡出土中空土偶 複製 1点	令和6年 5月20日	令和6年 5月27日
3	北海道環境生活部文化 局文化振興課 縄文世 界遺産推進室長	「北の縄文リレー 展2024 in 釧路」 展示のため	令和6年6月11日か ら令和6年6月16日 まで（6日間）	ママチ遺跡出土土器（北埋調報 36 図Ⅲ-51-12）1点、キウス 5遺跡出土土器（北埋調報121 図Ⅳ-44-701）1点	令和6年 5月23日	令和6年 5月27日
4	北海道環境生活部文化 局文化振興課 縄文世 界遺産推進室長	「北の縄文リレー 展2024 in 釧路」 展示のため	令和6年6月16日か ら令和7年3月21日 まで（286日間）	ママチ遺跡出土土器（北埋調報 36 図Ⅲ-51-12）1点、キウス 5遺跡出土土器（北埋調報121 図Ⅳ-44-701）1点	令和6年 5月23日	令和6年 5月27日
5	三内丸山遺跡センター 所長 岡田 康博	三内丸山遺跡セン ター5周年記念特 別展第2部「海が 結ぶ縄文」展に使 用	令和6年7月6日か ら令和6年10月31日 まで（118日間）	千歳市キウス4遺跡出土中茶路式 土器ほか20点	令和6年 6月20日	令和6年 6月25日

番号	申請者	利用目的	利用期間	利用資料名・点数	申請書	承認書
6	株式会社ナチュラルサイエンス 取締役北海道支店長 高嶋 章	「ナチュの森で縄文にであう」展で展示のため	令和6年9月5日から令和6年10月25日まで(51日間)	函館市著保内野遺跡出土中空土偶複製 1点	令和6年8月27日	令和6年8月29日
7	株式会社ナチュラルサイエンス 取締役北海道支店長 高嶋 章	「ナチュの森で縄文にであう」展で展示のため	令和6年10月1日から令和6年10月25日まで(25日間)	世界遺産定住のステージ模型ほか8点	令和6年9月11日	令和6年9月24日
8	株式会社ナチュラルサイエンス 取締役北海道支店長 高嶋 章	「ナチュの森で冬の縄文にであう」展に展示のため	令和6年12月26日から令和7年3月2日まで(67日間)	函館市著保内野遺跡出土中空土偶複製 1点	令和6年11月21日	令和6年11月27日
9	千歳市教育委員会教育長 佐々木 智	千歳市埋蔵文化財センター令和6年度展示のため	令和6年12月23日から令和7年4月17日まで(116日間)	千歳市オサツ2遺跡出土資料 ほか192点	令和6年12月5日	令和6年12月13日
10	国立歴史民俗博物館館長 西谷 大	総合展示第1展示室(先史・古代)において展示するため	令和7年4月1日から令和8年3月31日(365日間)	千歳市オサツ16遺跡出土資料ほか25点	令和7年1月21日	令和7年1月31日
11	北海道環境生活部文化局文化振興課 縄文世界遺産推進室長 栗原 肇	「縄文回廊」展示のため	令和7年3月31日から令和8年3月31日まで(366日間)	千歳市キウス4遺跡出土土器1点、石棒2点、計3点	令和7年3月3日	令和7年3月6日
12	独立行政法人国立科学博物館 館長 篠田 謙一	国立科学博物館の常設展示に展示するため	令和7年4月1日から令和8年3月31日(365日間)	千歳市柏台1遺跡出土顔料 ほか3点、千歳市オルイカ2遺跡出土細石刃核 ほか6点、計9点	令和7年2月27日	令和7年3月6日
13	北海道環境生活部文化局文化振興課 縄文世界遺産推進室長 栗原 肇	「北の縄文リレー展2025 in 釧路」展示のため	令和7年3月21日から令和8年7月25日まで(126日間)	千歳市ママチ遺跡出土土器1点、千歳市キウス5遺跡出土土器1点、計2点	令和7年3月6日	令和7年3月11日
14	千歳市教育委員会 教育長 佐々木 智	千歳市教育委員会埋蔵文化財センター常設展示のため	令和7年4月1日から令和8年3月31日(365日間)	北埋調報86 千歳市ユカンボシC2遺跡土器[図版48(H3-13)]、土器[図版49(H4-22)]、土器[図版50(H4-23)]、計3点	令和7年3月14日	令和7年3月17日
15	東北放送株式会社 代表取締役社長 一力 敦彦 東北歴史博物館 館長 阿子島 香	特別展「世界遺産縄文」にて展示公開のため	令和7年6月1日から令和8年3月31日(304日間)	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品複製1点、函館市著保内野遺跡出土中空土偶複製1点、千歳市美々4遺跡出土土偶1点、千歳市美々4遺跡出土ヒスイ玉6点、岩手県御所野遺跡竪穴住居模型1点、計10点	令和7年3月3日	令和7年3月24日
16	国立アイヌ民族博物館 館長 佐々木 史郎	国立アイヌ民族博物館基本展示に出品するため	令和7年4月1日から令和8年3月31日(365日間)	千歳市キウス4遺跡出土土器ほか16点	令和7年3月22日	令和7年3月25日

3 講座等の開催

(1) 一般道民対象の講座

ア、「遺跡と関わる世界遺産」「世界遺産 百舌鳥・古市古墳群」

日時：令和6年7月27日(土) 13:30～15:30

講師：藤井寺市教育委員会文化財保護課文化財調査員 福田 英人 氏

参加者：70名

内容：「北海道・北東北の縄文遺跡群」とともに、遺跡が関わる日本の世界遺産として有名な「百舌鳥・古市古墳群」。早くから世界遺産候補となりながら、世界文化遺産に登録されたのは、文化庁に提案をした平成19（2007）年から12年経った令和元年（2019）だった。長年、大阪府世界遺産登録担当者として活動を行った講師から、登録までの軌跡、百舌鳥・古市古墳群の価値を語っていただいた。



▲「世界遺産 百舌鳥・古市古墳群」 福田講師

イ、「はっけん・体験 古墳人の装い」

日時：令和6年8月3日(土) 13:30～15:30

講師：藤井寺市教育委員会文化財保護課主査 山田 幸弘 氏

参加者：13名

内容：企画展示「遺跡と関わる世界遺産 百舌鳥・古市古墳群 パネル展」に関連し、大人向けの講座として、北海道にはみられない古墳時代の甲冑などの解説を聞き、復元品を着用することにより、古墳時代の人々の装いについて、体感した。

ウ、「古墳の始まりから終焉まで2」「関東の古墳」

日時：令和6年9月21日(土) 13:30～15:30

講師：群馬県文化財保護課文化財専門官 深澤 敦仁 氏

参加者：77名

内容：関東の古墳時代において、群馬県は、榛名山や浅間山の噴火に見舞われ、当該期の集落が



▲「はっけん・体験 古墳人の装い」 山田講師



▲「関東の古墳」 深澤講師



▲「東北・北海道の古墳」 藤澤講師

火山灰下に埋没しているものが多く調査されている。他の地域では、古墳とその古墳を営んだ人たちの集落との関係があまりはっきりしないなか、貴重な調査成果となっている。群馬県下で長年古墳調査と研究を行ってきた講師により、これまでの調査と研究からわかったことを解説していただいた。

エ、「古墳の始まりから終焉まで3」「東北・北海道の古墳」

日 時：令和6年10月26日(土) 13:30~15:30

講 師：東北大学総合学術博物館教授
藤澤 敦 氏

参加者：75名

内 容：東北北部と北海道は、古墳時代終末期から、奈良・平安時代になり、はじめて古墳を造営するようになることが地域の大きな特色となっている。なぜ、倭国の周縁にある東北北部と北海道では、古墳時代に古墳を造らず、のちの時代に造営するようになるのか。この地域の当該期の研究を続けてきた講師に近年の研究状況をお話していただいた。

オ、「比べてわかる道内の竪穴群3」「縄文・続縄文時代の集落遺跡と北海道東部の竪穴住居跡群」

日 時：令和7年3月15日(土) 13:30~15:30

講 師：室蘭市都市建設部土木課管理係主査
元室蘭市教育委員会 松田 宏介 氏

参加者：80名

内 容：道立センター5期目の要求水準書に、年1度以上「北海道内の竪穴群」の講座・講演会を行うよう指示があり、それに合わせて、「比べて

わかる道内の竪穴群」のシリーズを開始した。3回目は、縄文時代には、多くの竪穴住居跡がみつかるが、なぜ、縄文時代晩期以降、続縄文時代になると、竪穴住居跡がほとんどみつからなくなるのか。縄文時代・続縄文時代の集落遺跡と北海道東部の竪穴住居跡群について、造詣の深い講師から話をいただいた。

(2) 児童生徒学生対象の体験型講座

ア、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊 (第1次)

はっけん・体験 古墳人の装い

日 時：令和6年8月4日(日) 13:30~15:30

講 師：藤井寺市教育委員会文化財保護課主査
山田 幸弘

参加者：21名

内 容：企画展示「遺跡と関わる世界遺産 百舌鳥・古市古墳群 パネル展」に関連し、こども向けの講座として、北海道にはみられない古墳時代の甲冑などの解説を聞き、復元品を着用することにより、古墳時代の人々の装いについて、体感した。

イ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊 (第2次)

縄文土器のヒミツをさぐれ!

復元に挑戦しよう!

日 時：令和6年8月10日(土)

講 師：普及活用課主査 芝田 直人

参加者：19名

内 容：主に土器の接合・復元をテーマにした体験学習を通じて、埋蔵文化財への関心を高めることを目的としている。



▲「比べてわかる道内の竪穴群3」 松田講師



▲まいぶん遺跡探検隊 (第1次) 山田講師



▲まいぶん遺跡探検隊（第2次）

前半は、縄文土器について解説した後、実際に縄文時代早期～晩期、続縄文時代、擦文文化期の復元土器を観察し、触れてみるという体験を行った。

後半は接合・復元の概要・方法について、パワーポイントの画像や担当者の実技により、初心者にも理解しやすい説明を試みた。その後、参加者は予め割れた状態の縄文土器・続縄文土器の同一個体破片（7個体）について接合・復元体験を行った。体験に使用した土器は、江別土器の会から提供された、焼成などの際に破損した模造品である。このほか探検手帳も配布し、接合状況や復元土器の写真を貼付して、それぞれが復元した土器のオリジナルについて、時期や型式名などを記入できるようにした。

参加者は、土器の文様の変遷や遺物の整理・記録方法について意欲的に学習し、接合や復元の作業にかかる根気や労力に理解を示していた。

ウ、「こども考古学教室」

親子ガラス玉づくり教室

日時：令和6年11月9日(土) 13:30～15:30

講師：遠軽町教育委員会 瀬下 直人

参加者：15名

内容：巻付け法によるガラス玉づくり教室を実施した。内容は①製作方法・注意事項に関する座学、②講師実演、③ガラス玉づくり体験、④製作体験の振り返り、⑤ガラス玉模様付け体験（トンボ玉）、⑥ガラス玉の歴史講座、⑦徐冷したガラス玉の回収であった。ガラス玉づくりでは子供一人につきガスバーナーを一つ設置し、保護者には子供のサポートをお願いした。2時間ほどの間で、一人につき5～7個程度のガラス玉と1つ程



▲親子ガラス玉づくり

度のトンボ玉を製作した。参加した子供達は普段扱うことがないガスバーナーの使用や、製作難易度の高いガラス玉づくりに緊張しながらも真剣に取り組んでいた。特に④の製作体験の振り返りでは、失敗や成功の理由を考えることで参加者各々が次の製作へ向けて改善点を見つけ出しており、自分で考え実践する効果的な学習が行われていた。

エ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第3次）

火おこし

日時：令和7年1月11日(土) 13:30～15:30

講師：普及活用課主査 坂本 尚史

参加者：18名

内容：教室は座学と体験学習の二部構成とし、親子での参加をお願いした。

第一部は謎解き型式の座学「人と火の歴史を探れ」で、①火と人類の歴史、②火がもたらした恩恵、③火おこしの方法について学習した。また謎解きだけではなく、人間が火を使った証拠にはどんなものが考えられるか、火が起きるメカニズム、についても問いかけ、考察してもらい、解説につなげた。さらに収蔵資料である千歳市ユカンボシC15遺跡出土の火おこし具（アイヌ文化期）を観察し、資料の形状や焼け焦げの状態について参加者に発言して貰った。

第二部は体験学習の「火おこしに挑戦」で、回転摩擦式の①きりもみ式、②弓ぎり式、③ひもぎり式、④舞いぎり式と、⑤火花式の火おこしを親子で協力して行った。参加者は火おこしの効率の良い操作方法を考えながら取組み、きりもみ式をのぞく、4つの方法の火おこしに成功していた。



▲まいぶん遺跡探検隊（第3次）



▲まいぶん遺跡探検隊（第4次）

先史古代の人びとも家族を中心に構成された地域コミュニティで、知識や技術、しきたりなどを伝達していたと考えられる。本講座の様に、親子で会話し協力して行う体験は、子供への細やかなサポートを担保し、家庭での日常的な学習振り返りにつながることが期待される。考古学を通じた体験が生きた知識として参加者児童に定着すると考えられる。

オ、「こども考古学教室」

まいぶん遺跡探検隊（第4次）

雪の中で発掘調査にちょうせん！

日 時：令和7年1月18日（土）

講 師：普及活用課主査 芝田 直人

参加者：8名

内 容：雪を掘り込み、埋め戻した模擬的な土坑の発掘調査体験を実施した。

第1部「発掘調査のヒミツをさぐれ！」では埋蔵文化財や発掘調査について基本的な説明を行った。第2部「どうしてお墓だとわかったの？」では土坑の種類や墓の認定について解説した。第3部の「発掘調査にちょうせん！」では、まず発掘調査の道具・手順などを説明した。その後、屋外で雪に埋もれた墓坑を模した穴を検出することから始まり、半截、断面観察、出土遺物の記録、完掘といった一連の発掘体験を行った。最後は、掘り出したミニチュア（模造品）のママチ遺跡の土面、美々4遺跡の土偶・動物形土製品について解説した。このほか探検手帳も配布し、体験中にスマートフォンで撮影した調査写真を貼り付けられるようにした。

参加者は普段体験することのできない発掘調査の工程に興味・関心を示すとともに、模擬的では

あるが「発見」する感動を味わったようである。

(3) 児童生徒対象の出前講座

ア、事業目的

完全学校週5日制に対応して、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にする心を養い、体験学習を通して豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自の事業実施の契機となるよう努めている。

イ、事業内容

(ア) 地域の遺跡を学ぶ

—実物に触れてみよう—

地元市町村出土の遺物や北海道立埋蔵文化財センター保管の土器・石器類に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。また、埋蔵文化財センター紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

(イ) 体験学習

子供たちの歴史・文化に対する関心を高めるために、縄文時代等にアクセサリーとして使用されていた「勾玉」を、滑石を材料にして、製作する。

体験メニューとして、このほか「ミニ土器づくり」、「ミニチュア土偶づくり」も行っている。

49ページの表のとおり7か所で実施した。

(4) 教育連携講座

小学校、中学校、大学等を対象とする体験型教

育連携講座を、50ページの表の通り26回実施した。火おこし・勾玉作り・ミニチュア土器づくり・拓本体験学習、収蔵庫・展示収蔵庫・展示室などの見学、展示室探検クイズラリーなどを内容とする。

また、北海道教育委員会からの依頼により、平成25年度から「道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修」（夏・冬季休業期間分、教職員対象）を実施している。令和6年度に関しては、夏季2名、冬季2名の参加があった。

(5) 一般道民対象の講演会

ア、春季講演会「古墳の始まりから終焉まで1」 「コシの古墳時代」

日 時：令和6年5月25日(土) 13:30～15:30
講 師：公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
参事 伊藤 雅文 氏

参加者：65名

内 容：長年、北陸地域の古墳研究を続けてきた講師から、「コシ」の国の弥生時代末期から古墳の終焉までの変遷を通して、地域における古墳時代の変遷と北陸地方の特色について、近年の研究成果を踏まえて、解説していただいた。

イ、冬季講演会「キーワードで読み解く北海道・北東北の縄文遺跡群3」「北海道・北東北の縄文集落－円筒土器文化から大規模環状列石へ－」

日 時：令和7年1月25日(土) 13:30～15:30
講 師：いちのへ文化・芸術NPO代表理事 前
御所野縄文博物館長 高田 和徳 氏

参加者：88名

内 容：「北海道・北東北の縄文遺跡群」構成資



▲冬季講演会 高田講師

産、岩手県一戸町御所野遺跡を長年調査し、竪穴住居における「土屋根」の構造を解明し、史跡整備にも生かしている。さらに、周辺に縄文里山の復元をめざし、20年以上、地元根差して活動している。講師のこれまでの成果をお話いただいた。

(6) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター令和5年度調査報告会

日 時：令和6年4月20日(土)

会 場：常設展示室

内 容：公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和5年度に行った調査成果を報告した。報告遺跡と報告者は以下のとおりである。

- 1 千歳市 美々4遺跡
(第1調査部第2調査課主査 福井淳一)
- 2 興部町 興部豊野竪穴群(B)
(第1調査部第1調査課主査 立田 理)



▲春季講演会 伊藤講師



▲令和5年度調査報告会

- 3 松前町 福山城下町遺跡
(第2調査部第2調査課主査 山中文雄)
- 4 長万部町 豊野3遺跡
(第2調査部第1調査課主査 吉田裕吏洋)
- 5 苫小牧市 有珠川7遺跡
(同上)

4 協力

(1) 職場体験

江別市教育委員会による中学生の「職場体験」事業は、キャリア教育の一環として、「働く人々の喜びや苦労を実感し、望ましい職業観・勤労観を身につけること」を目的として、平成17年度から実施されている。新型コロナウイルス蔓延の影響による中断を経て、令和5年度より再開された。

今年度は50ページの表のとおり、依頼のあった江別市内の5つの中学校、計10名を受け入れた。内容は、無料体験メニュー「縄文工房」の準備作業、展示室の受付業務、遺物整理作業（接合・拓本）などである。

(2) 博物館実習

大学の依頼により博物館実習の学生を49ページの表のとおり6名受け入れた。

5 周辺施設・大学・諸機関との連携

江別市から札幌市北東部に所在する各文化施設や大学と、以下の連携を行っている。各連携参加状況等については47ページの表のとおり。

(1) 文京台地区道立教育3施設連携

江別市文京台地区にある北海道立図書館、北海道立教育研究所、北海道立埋蔵文化財センターが、今後さらに地域に根ざし、開かれた「施設」を目指すため、平成15年から連携事業を行っている。今年度も、7月以降に実施する事業を紹介するリーフレットを合同で作成し、回覧した。

(2) かるちやるnet

新札幌から江別市南西には社会教育的文化施設が集中し、地域に暮らす人たちにとって恵まれた環境にある。各文化施設は地域文化の向上や知的財産の継承など重要な役目を担っているが、財政の悪化により運営・事業の見直しを迫られ、取り巻く情勢は厳しさを増している。このような状況

を踏まえ、各施設が協力・連携を強化し、意見交換・連携事業・広報事業などの実施を協議する場として結成された。

平成21年に北海道がイオン北海道(株)との包括的連携協定を締結する際に北海道開拓記念館が企業側に提案した「道の教育・文化施設の広報活動への協力・協働事業」を基礎とする。

ア、秋のイベント「発見・体験 文化の秋 ～遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつ～」

日 時：令和6年9月8日(日) 10:00-20:00

場 所：サンピアザ光の広場

内 容：各施設を紹介するパネル展と参加可能な施設担当者によるワークショップの実施、クイズ冊子の配布を行った。また、今年度は触れる展示の常設コーナーをコロナ禍後、はじめて設置した。

イ、施設紹介パネル展

日 時：令和6年11月10日(日)・令和7年3月22日(土)

場 所：サンピアザ光の広場

内 容：各施設の紹介パネルを展示して、広報資料を配布した。

ウ、特別企画「てくてく、べったん！かるちやるスタンプラリー」

日 時：令和7年3月15日(土)～令和7年4月6日(日)

※時間は各施設の開館時間内

スタンプ設置場所：かるちやるnet加盟施設

記念品交換場所：3施設

- ・札幌市青少年科学館（新さっぽろエリア）
景品数300
- ・北海道立埋蔵文化財センター（野幌森林公園エリア）
景品数180
- ・江別市郷土資料館（江別エリア）
景品数180

内 容：かるちやるnet（文化施設連絡協議会）加盟館で連携し、GW期間を見据えた春休み期間を中心に、施設の周知を図り、併せて集客の相乗効果を図るイベント。10施設中、5館のスタンプを押したら記念品を1つ贈呈、8施設のスタンプを押したら、さらに記念品を1つ贈呈するルール。春休み期間に実施したため、多くの家族連れが各施設へ来館した。当センターも同時期通常の3倍程度の入館者があった。

(3) のっぽろ11ネット

今年度は活動していない。

**(4) 北海道生涯学習協会
まなびの広場パネル展**

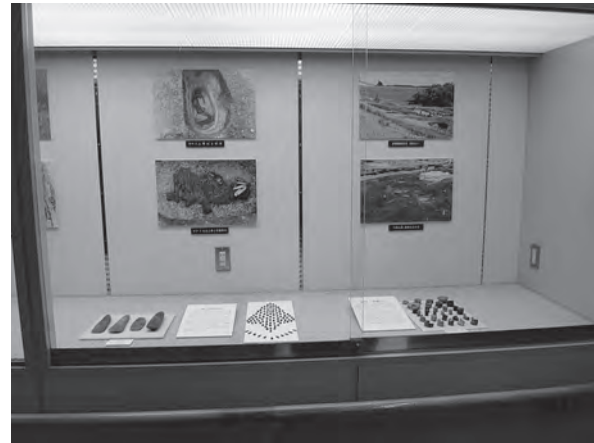
会 期：令和6年8月1日(木)～8月30日(金)

会 場：かでの2・7ビル9階 情報交流広場

「まなびの広場」

内 容：北海道民への学習情報の提供を体系的に行う「まなびの広場」を活用して、生涯学習の普及啓発に関する情報や北海道立埋蔵文化財センターおよび公益財団法人北海道埋蔵文化財センターの生涯学習の取り組みやその成果などを展示・発表することを主眼とする。今年度は、北海道立埋蔵文化財センターおよび公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和5年度に実施した重要遺跡確認調査と発掘調査の成果を紹介した。

内容は、千歳市美々4遺跡について、解説パネル、写真パネル、図パネルのほか出土遺物を豊富に展示した。美々4遺跡は縄文時代後・晩期の遺



▲まなびの広場パネル展

物が主体で、注目ポイントやわかりにくい用語などを解説したパネルを併設して、見学者の興味関心を高めるための工夫を施した。そのほか、興部豊野竪穴群（B）、苫小牧市有珠川7遺跡、長万部町豊野3遺跡、松前町福山城下町遺跡について、解説パネルと写真パネルを展示した。

周辺施設との連携参加一覧

名 称	文京台地区道立教育3施設連携	かるちやるnet	のっぽろ11ネット
江別市郷土資料館		○	
江別市スポーツ振興財団			○
野幌自治会			○
北海道情報大学			○
野幌中学校			○
江別市セラミックアートセンター		○	○
野幌総合運動公園事務所			○
酪農学園大学			○
北海道立図書館	○	○	
北海道立教育研究所	○		
北海道立文書館		○	
札幌学院大学			○
北翔大学			○
北海道立埋蔵文化財センター	○	○	○
自然ふれあい交流館		○	
道立自然公園野幌森林公園			
北海道博物館		○	
北海道開拓の村		○	○
サンビアザ水族館		○	
札幌市青少年科学館		○	

6 利用状況

(1) 入館者数一覧

ア、月別入館者数

	開館日数			大人(男性)			大人(女性)			子供			合計		
	5年度	6年度	前年度比(%)	5年度	6年度	前年度比(%)	5年度	6年度	前年度比(%)	5年度	6年度	前年度比(%)	5年度	6年度	前年度比(%)
4月	26	25	96.2%	285	285	100.0%	242	265	109.5%	156	302	193.6%	683	852	124.7%
5月	24	26	108.3%	278	276	99.3%	212	226	106.6%	222	185	83.3%	712	687	96.5%
6月	26	26	100.0%	231	288	124.7%	235	180	76.6%	252	189	75.0%	718	657	91.5%
7月	26	27	103.8%	342	290	84.8%	310	223	71.9%	257	250	97.3%	909	763	83.9%
8月	27	27	100.0%	276	244	88.4%	331	334	100.9%	377	430	114.1%	984	1008	102.4%
9月	25	25	100.0%	316	226	71.5%	295	228	77.3%	181	136	75.1%	792	590	74.5%
10月	25	28	112.0%	259	339	130.9%	235	290	123.4%	215	268	124.7%	709	897	126.5%
11月	25	24	96.0%	298	299	100.3%	191	297	155.5%	151	262	173.5%	640	858	134.1%
12月	24	24	100.0%	176	181	102.8%	130	165	126.9%	118	137	116.1%	424	483	113.9%
1月	23	23	100.0%	167	232	138.9%	137	199	145.3%	183	199	108.7%	487	630	129.4%
2月	23	22	95.7%	130	165	126.9%	103	143	138.8%	47	146	310.6%	280	454	162.1%
3月	23	22	95.7%	243	312	128.4%	201	289	143.8%	193	370	191.7%	637	971	152.4%
合計	297	299	100.7%	3001	3137	104.5%	2622	2839	108.3%	2352	2874	122.2%	7975	8850	111.0%

イ、平成11年から令和6年度までの月別入館者数

(ア)【平成11年から17年度までの月別入館者数】

	11	12	13	14	15	16	17	①計
4月		758	656	545	538	831	595	3923
5月		709	453	656	1081	964	716	4579
6月		652	621	808	1299	1054	858	5292
7月		527	303	633	922	828	1124	4337
8月		673	388	662	789	747	851	4110
9月		544	374	631	762	1020	727	4058
10月		650	302	649	991	1027	773	4392
11月	1988	467	659	445	836	669	618	5682
12月	687	286	326	669	505	330	318	3121
1月	593	218	411	287	229	189	240	2167
2月	366	129	240	212	270	187	189	1593
3月	469	221	362	297	331	296	366	2342
合計	4103	5834	5095	6494	8553	8142	7375	45596

(イ)【平成18年から令和6年度までの月別入館者数】

	指定管理者1期				指定管理者2期				指定管理者3期			
	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
4月	830	669	904	1192	799	920	1244	1201	1150	969	1103	1143
5月	1440	1228	1403	1978	1755	1223	1127	1359	967	991	1330	1405
6月	768	1099	1150	934	1597	1277	1143	1360	1207	1345	1527	1555
7月	1138	1425	1126	1537	1117	1278	1243	1590	1296	1100	1689	1165
8月	1238	1517	1267	1370	982	1230	1727	1809	1291	1709	1257	1511
9月	790	907	768	1169	995	1110	1018	1242	825	1178	988	1113
10月	945	939	1267	1120	1214	839	1019	1382	903	910	758	819
11月	669	627	653	745	794	539	736	714	686	911	720	748
12月	232	536	488	577	370	423	426	411	344	513	431	433
1月	462	633	488	516	344	379	551	603	413	685	763	683
2月	226	329	450	374	268	286	405	524	283	542	361	466
3月	329	528	549	472	511	696	654	622	381	706	866	843
合計	9067	10437	10513	11984	10746	10200	11293	12817	9746	11559	11793	11884
期合計		42001				45056				44982		

	指定管理者4期				指定管理者5期			②合計	①②合計
	30	31・元	2	3	4	5	6		
4月	1005	920	250	636	670	683	852	17140	21063
5月	1485	1476	100	311	887	712	687	21864	26443
6月	1554	1314	342	123	739	718	657	20409	25701
7月	1107	1042	589	755	749	909	763	21618	25955
8月	1518	1121	600	369	789	984	1008	23297	27407
9月	726	1050	740	0	723	792	590	16724	20782
10月	912	745	771	966	798	709	897	17913	22305
11月	944	760	476	421	627	640	858	13268	18950
12月	616	591	238	237	382	424	483	8155	11276
1月	724	789	253	239	318	487	630	9960	12127
2月	480	459	388	163	285	280	454	7023	8616
3月	939	0	392	396	480	637	971	10972	13314
合計	12010	10267	5139	4616	7447	7975	8850	188343	233939
期合計		32032				24272			

ウ、企画展示期間中の入館者数

展示タイトル	期 間	入館者数
(公財)北海道埋蔵文化財センター令和5年度調査成果展	3月23日(土)～5月26日(日)	1,784
「遺跡と関わる世界遺産 百舌鳥・古市古墳群パネル」展	7月6日(土)～9月29日(日)	2,227
「北海道・北東北の縄文遺跡群 3」展	12月7日(土)～令和7年2月22日(土)	1,460
特別展示期間中の入館者数合計		5,471
北の縄文 世界遺産 北海道・北東北の縄文遺跡群展	4月1日(月)～令和7年3月31日(月)	8,850

エ、一般道民対象の講座

事 業 名	実 施 日	参加人数
「遺跡と関わる世界遺産」「世界遺産 百舌鳥・古市古墳群」	7月27日(土)	70
「はっけん・体験 古墳人の装い」	8月3日(土)	13
「古墳の始まりから終焉まで 2」「関東の古墳」	9月21日(土)	77
「古墳の始まりから終焉まで 3」「東北・北海道の古墳」	10月26日(土)	75
「比べてわかる道内の竪穴群 3」「縄文・続縄文時代の集落遺跡と北海道東部の竪穴住居跡群」	3月15日(土)	80
計		315

オ、児童生徒学生対象の体験型講座

年	月	日	曜	事 業 名	参加人数
令和6年	8	4	日	まいぶん遺跡探検隊(第1次) はっけん・体験 古墳人の装い	21
	8	10	土	まいぶん遺跡探検隊(第2次) 縄文土器のヒミツを探れ!	19
	11	9	土	親子ガラス玉づくり教室	15
令和7年	1	11	土	まいぶん遺跡探検隊(第3次) 火おこしに関する体験	18
	1	18	土	まいぶん遺跡探検隊(第4次) 雪中発掘体験	8
計					81

カ、児童生徒対象の出前講座

	市町村	実 施 場 所	実施日	担当	備 考	参加人数
1	東神楽町	東神楽町立東神楽小学校理科室	6月14日(金)	坂本・芝田	小学校授業として実施	33
2	興部町	興部町中央公民館1階展示室	6月15日(土)	芝田・坂本	興部町中央公民館講座として実施	14
3	蘭越町	蘭越町民センター	8月6日(火)	坂本	小学生向け夏休み体験講座として実施	21
4	雨竜町	雨竜町公民館2階大ホール	9月28日(土)	芝田	雨竜町公民館講座として実施	20
5	厚岸町	厚岸町立真龍小学校	10月12日(土)	坂本	考古学講座ミニチュア土器作り教室として実施	19
6	木古内町	木古内町郷土資料館	11月16日(土)	坂本	木古内無名塾として実施	28
7	上ノ国町	上ノ国町総合福祉センター ジョイじょぐら	11月17日(日)	坂本	上ノ国式土器製作講座として実施	31
計						166

キ、講演会

年	月	日	曜	事 業 名	参加人数
令和6年	5	25	土	春季講演会「古墳の始まりから終焉まで 1」「コシの古墳時代」	65
令和7年	1	25	土	冬季講演会「キーワードで読み解く北海道・北東北の縄文遺跡群 3」「北海道・北東北の縄文集落」	88
計					153

ク、報告会

年	月	日	曜	事 業 名	参加人数
令和6年	4	20	土	1 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター令和5年度調査報告会	51
計					51

ケ、博物館実習

	学 校 名	受 入 期 間	備 考	受入人数
1	札幌学院大学・札幌大学・北海道大学	7月16日(火)～19日(金)、 7月23日(火)～26日(金)	受付・展示・図書に関する作業、 体験学習での教材づくり	6
計				6

コ、講師派遣

	市町村	実施場所	実施日	担当	備考	参加人数
1	長沼町	北海道長沼高等学校	4月23日(火)	倉橋・芝田	令和6年度 3年生 縄文文化に関わる講演会 講師	37
2	余市町	余市町立旭中学校	7月19日(金)	坂本	考古学教室1年生A組22名、B組19名	41
3	余市町	余市町図書館	7月20日(土)	坂本	体験講座「余市式土器をつくろう」講師	26
4	江別市	江別市野幌公民館	8月1日(木)	倉橋	江別市蒼樹大学専攻講座 「ふるさと学 体験学習から学ぶ縄文時代の暮らし〜勾玉づくり」講師	25
5	長沼町	長沼町役場	8月24日(土)	倉橋	長沼町教育委員会土曜日の学習支援活動 「縄文文化を学ぼう!」講師	14
6	千歳市	千歳市埋蔵文化財センター	9月28日(土)	坂本	千歳市埋蔵文化財センター文化財普及啓発 事業「縄文まつり」講師	30
7	白老町	(株)ナチュラルサイエンス ナチュの森「森の工舎」	2月22日(土)	坂本	「ナチュの森で冬の縄文にであう展」 クロージングトークショー 講師	30
計						203

サ、職場体験

	学校名	受入期間	備考	受入人数
1	江別市立江陽中学校	令和6年9月10日、11日(火、水)	実習の内容は、無料体験学習「縄文工房」 の準備作業。ホール、展示室受付作業など。	2
2	江別市立野幌中学校	令和6年9月10日、11日(火、水)		2
3	江別市立中央中学校	令和6年9月12日、13日(木、金)		2
4	江別市立大麻中学校	令和6年10月22日、23日(火、水)		2
5	江別市立大麻東中学校	令和6年10月24日、25日(木、金)		2
計				10

シ、教育連携講座

(ア) 小学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	令和6年	5	9	木	江別市立上江別小学校施設見学体験学習(男性1名、女性2名、子ども98名、計101名)	101
2		6	19	水	札幌市立小野幌小学校施設見学体験学習(男性1名、女性1名、子ども32名、計34名)	34
3		6	21	金	札幌市立小野幌小学校施設見学体験学習(男性1名、女性1名、子ども33名、計35名)	35
4		6	26	水	札幌市立小野幌小学校施設見学体験学習(女性2名、子ども33名、計35名)	35
5		7	2	火	江別市立文京台小学校施設見学(男性1名、女性3名、子ども49名、計53名)	53
6		7	11	木	三笠市立岡山小学校施設見学体験学習(男性2名、子ども6名、計8名)	8
計						266

(イ) 中学校

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	令和6年	10	1	火	由仁町立由仁中学校施設見学体験学習(男性1名、女性2名、子ども32名、合計35名)	35
計						35

(ウ) 大学

	年	月	日	曜	団体名・見学・体験等	人数
1	令和6年	4	26	金	札幌学院大学大塚先生地域文化演習A講義利用(男性13名、女性12名、計25名)	25
2		5	8	水	札幌学院大学大塚先生考古学A①(男性12名、女性6名、計18名)	18
3		5	16	木	札幌学院大学大塚先生博物館資料論①(男性7名、女性7名、計14名)	14
4		5	17	金	札幌学院大学国際交流課タイチェンマイ大学留学生施設見学体験学習(男性6名、女性10名、計16名)	16
5		5	22	水	札幌学院大学応用英語C 高橋先生展示見学(男性2名、女性6名、計8名)	8
6		5	26	日	北翔大学短期大学部 菊地先生選択社会(男性1名、女性4名、計5名)	5
7		6	4	火	北翔大学教育文化学部 入江先生講義縄文工房利用(男性5名、女性3名、計8名)	8
8		7	3	水	札幌学院大学大塚先生考古学A講義利用(男性10名、女性4名、計14名)	14
9		7	4	木	札幌学院大学大塚先生博物館資料論(男性6名、女性8名、計14名)	14
10		10	8	火	札幌学院大学大塚先生博物館経営論①(男性8名、女性7名、計15名)	15
11		10	15	火	札幌学院大学大塚先生博物館経営論②(男性10名、女性7名、計17名)	17
12		11	6	水	北翔大学小杉先生情報メディア論①(男性8名、女性12名、計20名)	20
13		11	13	水	北翔大学小杉先生情報メディア論②(男性7名、女性13名、計20名)	20
14		11	15	金	札幌学院大学菊地先生人文地理学概説(男性38名、女性5名、計43名)	43
15		11	20	水	北翔大学小杉先生情報メディア論③(男性6名、女性14名、計20名)	20
16		11	26	火	北翔大学小杉先生教員養成演習専門演習Ⅱ(男性2名、女性3名、計5名)	5
17		11	27	水	北翔大学小杉先生博物館情報メディア論④(男性8名、女性13名)、計21名	21
18		12	10	火	北翔大学小杉先生教員養成演習専門演習Ⅱ講義利用(男性3名、女性3名)、計6名	6
19	令和7年	2	5	水	札幌学院大学国際交流課留学生施設見学体験学習(男性10名、女性12名、計22名)	22
計						311

(2) 団体利用者対応

ア、児童団体関連

	年	月	日	曜	団 体 名	人 数
1	令和6年	4	2	火	児童ディサービス「ひだまり」縄文工房利用（男性1名、女性3名、こども8名、計12名）	12
2		4	2	火	児童ディサービス「Harmonia」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども10名、計13名）	13
3		4	3	水	放課後等ディサービス「リーフ白石」縄文工房利用（男性3名、女性2名、こども9名、計14名）	14
4		4	4	木	児童ディサービス「ボレボレ」縄文工房利用（女性3名、こども5名、計8名）	8
5		4	5	金	児童ディサービス「アロハ」縄文工房利用（男性2名、女性3名、こども6名、計11名）	11
6		4	5	金	放課後等ディサービス「アミティエ米里」縄文工房利用（男性2名、女性2名、こども7名、計11名）	11
7		4	13	土	放課後等ディサービス「げんきまるきたごう」縄文工房利用（男性2名、女性5名、こども17名、計24名）	24
8		4	20	土	放課後等ディサービス「たくあいアクティビティむう」縄文工房利用（男性3名、女性4名、こども9名、計16名）	16
9		5	11	土	放課後等ディサービス「あそまな北23条」縄文工房利用（男性2名、女性1名、こども4名、計7名）	7
10		6	15	土	放課後等ディサービス「あんあんクラスおおあさルーム」縄文工房利用（男性2名、女性3名、こども7名、計12名）	12
11		6	22	土	放課後等ディサービス「あんあん菊水クラス」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども4名、計7名）	7
12		7	13	土	児童ディサービス「アトリをつばさ」縄文工房利用（男性3名、女性1名、こども3名、計7名）	7
13		7	26	金	児童ディサービス「ここみクラブ」縄文工房利用（男性1名、女性4名、こども7名、計12名）	12
14		7	27	土	児童ディサービス「ぬくもりの森」縄文工房利用（女性4名、こども13名、計17名）	17
15		7	27	土	児童ディサービス「ぶる一む7丁目」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども3名、計6名）	6
16		7	31	水	放課後等ディサービス「ぐりんカレッジ白石」縄文工房利用（女性3名、こども6名、計9名）	9
17		8	1	木	児童ディサービス「あんあんclass行啓upルーム」縄文工房利用（女性6名、こども11名、計17名）	17
18		8	1	木	児童ディサービス「ぶらぼーとんでん」縄文工房利用（男性2名、女性3名、こども3名、計8名）	8
19		8	2	金	放課後等ディサービス「リーフ白石」縄文工房利用（男性2名、女性2名、こども11名、計15名）	15
20		8	2	金	児童ディサービス「ここみクラブ」縄文工房利用（女性3名、こども5名、計8名）	8
21		8	6	火	児童ディサービス「ごーるでんえっぐ」縄文工房利用（女性4名、こども7名、計11名）	11
22		8	7	水	児童ディサービス「ごーるでんえっぐ野幌」縄文工房利用（女性4名、こども4名、計8名）	8
23		8	7	水	放課後児童支援「森の子児童センター」施設見学・縄文工房利用（女性2名、こども6名、計8名）	8
24		8	8	木	児童ディサービス「moreぷらす」縄文工房利用（男性2名、こども6名、計8名）	8
25		8	8	木	児童ディサービス「クオレ月寒」縄文工房利用（女性5名、こども7名、計12名）	12
26		8	9	金	児童ディサービス「なないろclub」縄文工房利用（女性5名、こども13名、計18名）	18
27		8	16	金	児童ディサービス「ごーるでんえっぐ野幌Ⅱ」縄文工房利用（女性2名、こども2名、計4名）	4
28		8	17	土	児童ディサービス「あんあんclass栄通ルーム」縄文工房利用（男性3名、女性3名、こども9名、計15名）	15
29		8	17	土	児童ディサービス「みらくる」縄文工房利用（男性1名、こども4名、計5名）	5
30		8	20	火	児童ディサービス「サニーケア白石」縄文工房利用（女性5名、こども12名、計17名）	17
31		8	20	火	児童発達支援放課後ディサービス「サニーケア」縄文工房利用（男性2名、女性2名、こども8名、計12名）	12

32	令和6年	8	22	木	児童ディサービス「こんばす」縄文工房利用（女性2名、こども5名、計7名）	7	
33		9	27	金	放課後等ディサービス「ぶらぼーたくほく」縄文工房利用（女性2名、こども3名、計5名）	5	
34		10	1	火	児童ディサービス「チポリーノ児童育成会」縄文工房利用（女性2名、こども4名、計6名）	6	
35		10	2	水	児童ディサービス「チポリーノ児童育成会」縄文工房利用（女性2名、こども5名、計7名）	7	
36		10	19	土	児童ディサービス「ぶらぼーとんでん」縄文工房利用（男性2名、女性2名、こども7名、計11名）	11	
37		11	1	金	共同学童保育所「つくしの子児童育成会」縄文工房利用（男性2名、こども5名、計7名）	7	
38		11	1	金	児童ディサービス「ポッポHUG東川下」縄文工房利用（女性2名、こども3名、計5名）	5	
39		11	2	土	ディサービス「なないろ」縄文工房利用（男性2名、女性1名、こども6名、計9名）	9	
40		11	8	金	児童ディサービス「moreプラス」縄文工房利用（男性2名、こども3名、計5名）	5	
41		11	9	土	児童ディサービス「めばえ」縄文工房利用（女性4名、こども5名、計9名）	9	
42		11	13	水	保育園「結いの家」縄文工房利用（女性2名、こども3名、計5名）	5	
43		11	16	土	児童ディサービス「リーフ白石」縄文工房利用（男性2名、女性2名、こども12名、計16名）	16	
44		11	30	土	児童ディサービス「あんあんclass栄通ルーム」縄文工房利用（男性3名、女性1名、こども10名、計14名）	14	
45		11	30	土	児童ディサービス「子どもの森アウルジョイ」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども6名、計9名）	9	
46		11	30	土	放課後等ディサービス「アミティエ米里」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども5名、計8名）	8	
47		12	7	土	児童発達支援事業所「めばえ」縄文工房利用（女性6名、こども7名、計13名）	13	
48		12	7	土	児童発達支援・放課後等ディサービス「pivo北郷」縄文工房利用（男性1名、女性3名、こども9名、計13名）	13	
49		12	7	土	児童発達・放課後ディサービス「パブリカ」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども10名、計13名）	13	
50		12	25	水	児童ディサービス「輝 ACE」縄文工房利用（男性2名、女性1名、こども5名、計8名）	8	
51		12	26	木	児童ディサービス「ぶるーむ7丁目」縄文工房利用（女性3名、こども7名、計10名）	10	
52		令和7年	1	7	火	放課後等ディサービス「わくわくキッズ 笑」縄文工房利用（男性2名、女性1名、こども4名、計7名）	7
53			1	8	水	児童ディサービス「輝 厚別西」縄文工房利用（男性1名、女性3名、こども5名、計9名）	9
54			1	9	木	児童ディサービス「そらいろネクスト」縄文工房利用（女性4名、こども9名、計13名）	13
55			1	9	木	児童ディサービス「ひまり」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども4名、計7名）	7
56			1	10	金	児童発達支援・放課後等ディサービス「ポッポHUG東川下」縄文工房利用（男性1名、女性1名、こども2名、計4名）	4
57			1	11	土	児童ディサービス「アミティエ福住」縄文工房利用（男性4名、女性1名、こども7名、計12名）	12
58	1		25	土	放課後等ディサービス「そらいろネクスト」縄文工房利用（女性3名、こども5名、計8名）	8	
59	1		29	水	児童通所支援センター「クオレ文京台」縄文工房利用（男性1名、女性5名、こども5名、計11名）	11	
60	2		15	土	児童ディサービス「そらいろひばりが丘」縄文工房利用（男性1名、女性3名、子供11名、計15名）	15	
61	2		15	土	児童ディサービス「てらこやキッズ」縄文工房利用（女性4名、こども11名、計15名）	15	
62	2		22	土	児童ディサービス「なないろ」縄文工房利用（男性1名、女性2名、こども7名、計10名）	10	
63	2		22	土	児童発達支援「てらこやキッズクラブ」縄文工房利用（女性2名、こども6名、計8名）	8	
64	3		15	土	児童発達支援放課後等ディサービス「糸いろは」縄文工房利用（男性1名、こども3名、計4名）	4	

65	令和7年	3	22	土	児童ディサービス「てらこやジュニアクラブ」縄文工房利用(男性1名、女性1名、こども5名、計7名)	7
66		3	22	土	放課後ディサービス「スマイルナイン」縄文工房利用(女性3名、こども11名、計14名)	14
67		3	22	土	児童発達支援センター「たくあいアクティビティむう」縄文工房利用(男性1名、女性2名、こども15名、計18名)	18
68		3	25	火	児童ディサービス「ポッポHUG東川下」縄文工房利用(男性1名、女性1名、こども2名、計4名)	4
69		3	26	水	児童ディサービス「こんばすmy」縄文工房利用(女性4名、こども5名、計9名)	9
70		3	27	木	行動援護事業所「ライフサポートあんりー」縄文工房利用(男性1名、女性2名、計3名)	3
71		3	27	木	児童ディサービス「てらこやキッズクラブ」縄文工房利用(男性1名、女性2名、こども15名、計18名)	18
72		3	28	金	児童ディサービス「きずな見晴台」縄文工房利用(男性1名、女性5名、こども11名、計17名)	17
73		3	28	金	児童ディサービス「わくわくキッズ笑」縄文工房利用(男性3名、女性1名、こども5名、計9名)	9
74		3	28	金	児童ディサービス「クオレ文京台」縄文工房利用(女性5名、こども6名、計11名)	11
計						760

イ、そのほかの団体

	年	月	日	曜	団 体 名	人 数
1	令和6年	4	9	火	「ランディ」縄文工房利用(男性2名、女性7名、計9名)	9
2		4	9	火	就労継続支援B型事務所「すたーりす」縄文工房利用(男性10名、女性4名、計14名)	14
3		6	23	日	苫小牧縄文会施設見学・縄文工房利用(男性3名、女性7名、こども5名、計15名)	15
4		6	23	日	大麻沢町16丁目自治会歩こう会施設利用(男性14名、女性10名、計24名)	24
5		8	31	土	江別市郷土資料館こども学芸員カレッジ施設見学・体験学習(女性2名、こども14名、計16名)	16
6		9	10	火	江別市国際交流協会展示解説・縄文工房利用(男性1名、女性11名、計12名)	12
7		9	19	木	札幌国際大学越田先生道新文化教室施設見学(男性4名、女性9名、計13名)	13
8		10	26	土	ディサービス結いの家縄文工房利用(男性6名、女性4名、計10名)	10
9		11	15	金	江別市聚楽学園幹事施設見学(男性10名、女性12名、計22名)	22
10		12	10	火	ちえりあボランティアガイド施設見学(男性1名、女性7名、計8名)	8
11		12	28	土	由仁町グループホームいろり町内会 縄文工房利用(男性1名、女性3名、こども5名、計9名)	9
12	令和7年	1	8	水	行動援護事務所「ライフサポートあんりー」縄文工房利用(男性2名、女性1名、計3名)	3
13		2	6	木	行動援護事務所「ライフサポートあんりー」縄文工房利用(男性1名、女性2名、計3名)	3
14		2	12	水	行動援護事務所「ライフサポートあんりー」縄文工房利用(男性1名、女性2名、計3名)	3
15		2	25	火	行動援護事務所「ライフサポートあんりー」縄文工房利用(男性3名)	3
計						164

7 講演会要旨

(1) 春季講演会「古墳の始まりから終焉まで1」「コシの古墳時代」

講師：伊藤 雅文 氏

(公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
参事)

<はじめに>

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました、石川県から参りました伊藤と申します。

実は私、北海道に来るのは初めてで、非常に楽しみにしておりました。なぜ初めてなのかといいますと、私は学生時代から古墳が大好きで古墳がある都府県には必ず行き、古墳に着いたらまず墳頂部に登って見晴らしを確認するというのを一番にしていました。

北海道では、いわゆる北海道式古墳がありますが、なかなかそこまで足を伸ばすことができなくて、今回お話をいただいて、これはほんとにいい機会だということを楽しみにしてまいりました。

今回、北海道を制覇すると残るは沖縄県となり、沖縄は死ぬまでに一回行きたいなと思っています。

今回の演題は、「コシの古墳時代」です。北陸、コシともいいますが、北海道との関わりは、実は地震が起きると私どももよくわかります。北海道沖の地震があったときにも能登半島に津波が来ます。そういうところからも日本海というのはほんとはつながっているのだなと思います。

また、私たちが日ごろ食べている昆布は、江戸時代の北前船で、北陸にももたらされたものです。本日は、コシと北海道のつながりということ、改めて感じていただきたいと思っています。

<カタカナ表記のコシ>

カタカナで「コシ」と今回は表記しました。みなさまは、コシというとおそらくこの「越」の漢字を思いうかべるのではないのでしょうか。

例えば福井県の北は越前、富山県は越中、新潟県は越後。みんな「越」を使っています。漢字で書かれたコシというのは、『古事記』の記述や飛鳥地域から出土した木簡などにみられ、木簡には「高志」と書いてあります。『出雲国風土記』では「古志」と記され、出雲の方には古志郡という郡名も残っています。この古志の用例は、『日本書紀』、『続日本紀』等にもみられます。

現在に至るまでコシというのは、「越」の漢字



▲図1 旧国別に見た最大規模の前方後円墳（新納1989）

を使っていましたが、漢字を使い始めた頃は「高志」という言葉を使っていたようです。

考古学において漢字に置き換えるときに、用字の選択は、歴史的な解釈が発生し、文献史的な検証が必要となります。そのため、考古学で地名を考えるときにはカタカナで書くということが一般的な方法です。

今回は、「コシ」の古墳時代ということで、前方後円墳が非常に重要な存在です。図1は、律令制の国別に見た古墳の大きさを示し、一番大きいものを分布図にまとめたものです。東北地方、福島県に所在する会津大塚山古墳という、100m級の前方後円墳があります。一番大きい古墳はやはり中心部にありますが、前方後円墳の大きさはある程度古墳に葬られた人のいろいろな社会的な地位や他の集団との関係性を示し、その重要なメルクマールになっています。近畿中心部には、多数の前方後円墳がありますが、各地域で大小が混じり存在することがお分かりになるかと思います。古墳時代の中心地である近畿、現在の奈良県、大阪府、昔の国の名前ですと、大和、河内、和泉、この近辺の中心部には巨大な前方後円墳が多数存在しますが、必ずしも同心円状に、大きい古墳が地方に行くにしたがって小さい古墳になっているというわけではありません。

私は、前方後円墳が自然発生的に作られたものではなく、いろいろな人の関わりの中、社会の関係の中で作られていったということを示していると考えています。

＜古墳とは＞

ここで、「古墳」というものについて、もう一度考えてみたいと思います。

小林行雄という我々の大先輩の先生がいましたが、『図解考古学辞典』の中で古墳の定義を行っています。古墳とは、「土を高く盛った古代の墓を意味する語である。高塚ともいう。」土を盛り上げたものであるとし、「一般的な意味で古墳と呼ぶる墳墓は、世界各地において国家的統一の初期に作られている。」ということで、古墳としての説明をいわゆる日本でのものではなくて世界各地にあるのだといっています。

したがって、朝鮮半島にも古墳はありますし、世界各地のなかで大きなお墓を古墳と一般的に呼ぶる、呼んでもよいということを示しています。斎藤忠先生は、同じ時期に、古墳の定義は、「意識的に盛り上げた高塚である」としています。

従って、1960年代ぐらいまでは、古墳というのは墳丘をもった、高い盛り上げた塚であり、それは意識的に盛り上げた塚で大きいものだというのが一般的な認識でした。

そして近藤義郎先生のような反論がでてきました。「古墳は自然発生的に作られるものではなくて、社会的な人の関係性の中で出来上がってくる」、「古墳とは民衆墓、一般のお墓とは隔絶した位置・規模・形態・内容をそなえた首長墓として発生」するものですと。

いわゆる古墳とは、もともと支配者のお墓であるというのは、小林先生、斎藤先生の頃は、それはもう自明のものである、当然のことなのだ、ということでそのような説明を省き、その上で高塚であるといっています。

それに対して、近藤先生は、古墳は支配者としてのお墓なのだ、それがそもそも始まりなのだ、より明確にいっています。それが時代が下るにつれて、被支配者層、つまり今まで支配されていた人たちも含めて、いろいろな階層の人たちのお墓全体を古墳というのだ、というように定義づけられました。

古墳とは何かといいながら、古墳時代に作られたお墓を古墳という。なかなか理解するのが難しい。では古墳とはなんなのだ、古墳時代のお墓なのだ、では古墳時代とはなんなのだ。古墳が作られた時代なのだ、という、鶏が先か、卵が先かのような話になってしまいます。

近藤先生の重要なところは、古墳というのはそれまでその地域を治めていた人たちがばかりではな

くて、時代が変わっていく中で支配されていた人たちも、いろいろな社会的な条件の中で古墳を作り始めていく、という部分です。

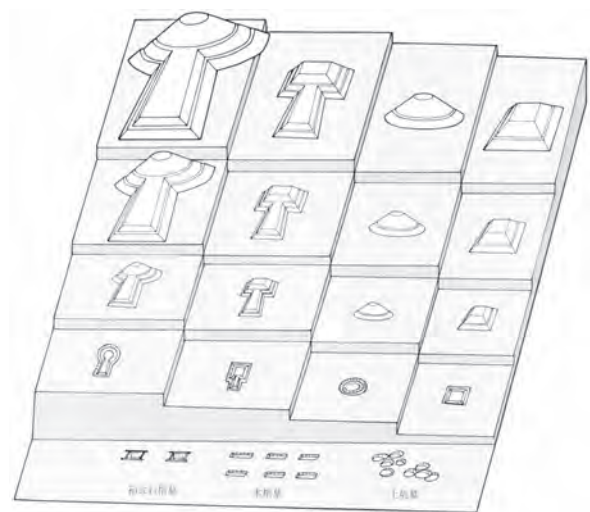
現在、白石太一郎先生のように、明確にこれを古墳だというようない方はあまりしていません。どちらかというと、「弥生時代終末期の墳丘墓のあと、格段の規模の差をもって出現する定型的な大型前方後円墳の造営される3世紀中葉から顕著な墳丘を持った古墳の造営がほぼ終息する7世紀末葉までの時代を古墳時代ととらえる。」という、オブラートに包んだような説明になっています。

初期の典型的な大型前方後円墳としては、箸墓古墳が考えられています。我々古墳の研究者の中では、箸墓古墳の出現を非常に重要視しており、箸墓古墳の出現をもって古墳時代が始まるのだと考えている研究者も多いようです。

＜前方後円墳と国家＞

このように古墳は、社会的な支配者のお墓だけではなくて、それにつながるような人たちとの社会関係の中で作られています。

都出比呂志先生によりその関係性をもう少しわかりやすく説明したものがこの古墳の階層模式図（図2）になります。最上位にあるのが前方後円墳で、鍵穴の形をした古墳です。前方後円墳が円形に四角の突出があるのに対して、前方後方墳は四角の方形のところ突出部がつくということで前方後円墳とよく似た形をしています。それから丸い古墳である円墳、四角い古墳である方墳、それ以外にも、石で囲った棺の箱式石棺墓、そのよ



▲図2 古墳の階層的モード図（都出1989）

うな小さいもの、あるいは穴を掘っただけのものがみられます。

このように、いろいろな階層の墳墓も古墳時代の古墳をとらえて、それぞれの関係性の中で社会を考えていこうとしているのです。

都出先生の理論の非常に重要なところは、弥生時代にも確かにリーダーはいたが、絶対的な権力というものではなく、ある一定の力を持ちながらその集団の中でのリーダーでしかない。いわゆる首長といういい方をしますが、都出比呂志先生は、目にみえる形で古墳がそれぞれの関係性を明示しているとしたことです。それは国家段階といえるのでしょうか。当時、まだ「日本」はないので、「倭国」としての初期国家の段階になったのだとしました。それを証明するものが前方後円墳を頂点とする社会体制、これを政治的な秩序という言い方で説明しています。つまり、3世紀から6世紀後葉まで、前方後円墳が作られた時代を前方後円墳体制という言い方をしました。この前方後円墳を中心とする秩序が次の奈良時代に引き継がれて、律令体制として当時の国家の体制を作ったのだ、という論です。

最近では広瀬和雄先生がさらに一歩進めて、前方後円墳の時代、という言い方をしています。

初期国家とどこが違うのでしょうか。広瀬先生は、「倭の五王」に象徴されるような外交権を持っている、中国の王朝ともそれなりに交渉する、そういう国家なのだという言い方をされています。そのように唱えています。広瀬先生は非常に中央史観で、「中央の歴史が一番日本の歴史を考えるうえで重要なのだ。地方の存在よりも中央の政治体制がいかに変わっていったかを考えることが一番大切なのだ」、ということを考えています。広瀬先生は、地方はどちらかという、いかに中央の政権のために地方があるか、ということを考えており、地方で研究している私にとっては、ちょっとついていけない考え方と捉えています。

広瀬先生の前方後円墳国家という考え方を、実は古墳の研究者の中にもかなり支持している方が多いので、ちょっと紹介させていただきました。

このように前方後円墳は、一番規模も大きくて中に入っている副葬品もたくさん入っています。それから前方後方墳もあります。このようないろいろな階層性を持っているということを、前提として考えていかなければいけません。

ただし、前方後円墳があるから、これが一番なのだということではなく、それぞれの古墳と古墳

との関係性をよく見ていくことが重要です。また、時代的な変化というものもあります。纏向型の前方向後円墳が最初に作られ、そのあと、前方後円墳や前方後方墳が作られ、そのうち前方後円墳が作られなくなって、円墳ばかりになっていきます。

地域で古墳がどのように変化していくかということを見ていくことが、古墳時代を研究する上では非常に重要なことになっていると思います。

< 1. コシという地域 >

律令制下の国の範囲は、奈良時代の国家が、どのように地域を区分していたかを示しています。都のあったところは畿内。畿というのは都という意味で、都で生活する場所が畿内で、大和・山城・摂津・和泉・河内の五つの国です。それ以外の地域を南海道、西海道、山陽道、山陰道、東海道、東山道ということで、当時はまだ北海道についての認識はありません。

認識がないということと交流がないということは違います。律令政府にとって北海道という地の認識、認知が希薄なのです。

コシは、北陸道にあたります。コシの地域をさらによくみると、若狭・越前・加賀・能登・越中・佐渡・越後と、七つの国がたっており、旧国郡単位のエリアが非常に重要です(図3)。

当時の郡のエリアがどれぐらいの大きさになるのでしょうか。その郡の中の遺跡を検討するのが、地域を検討するうえで非常に重要なところになります。



▲図3 北陸道7国の位置関係

北陸全体を、縄文時代、弥生時代、古墳時代の土器の形をよくみていくと、能登・越中・佐渡・越後は、よく似た土器が多く、特に中世になると、能登と佐渡は本当によく似た土器が出土します。

一方、加賀・越前は、割とよく似た土器があります。ちょっと異質なのが若狭。若狭は今でも京都弁を使います。言葉も違うということで、同じコシといいながら、若狭から越後の広い範囲を大きく分けようと思うところら辺で大きく分かれそうです。

<中央から見たコシ>

この旧国を考えてみます。そこに住んでいた人々が自分の住んでいるところを何々の国にしてくれとってできたわけではありません。あくまでも中央の律令国家が、地域支配をしていくときに、このエリアまでを1つの地域としていこう、ということでそれぞれ地域が設定されています。

したがって、先ほどあったように、北陸の中でも七つの国があったのですが、それは北陸の人間がこのように地域を分けてくれといったわけではなく、反対に中央の方からここまでだというように線引きをしたということになります。

中央の政体が、どのようにコシを認識していたのか。文献からみていきます。奈良時代くらいまでの主要な資料を抜き出してみました。

持統天皇までが『日本書紀』に記載されています。それ以前の天皇の崇神、景行、応神、こちら辺まではほとんど神話の世界に近い。本当に書いてあることが真実とは思えません

次に欽明5年、544年に肅慎人（みしはせのひと）が来着、佐渡に来た、とあります。544年から推古天皇ぐらまでの500年代いわゆる6世紀の後半にまとまって来着しているようにみえます。このころには高句麗からの使者が来着していますので、かなり外に開かれていた地域だと、中央に認識されたということがわかります。

崇峻天皇2年（589）に阿部臣を北陸道に派遣して国の境を定めるとあります。7世紀に入るといって、ようやくこのコシというまとまりが中央から認識されたのでしょうか。

それを前提に地域支配を律令政府が進めていこうとしたときに、皇極天皇の頃には、いろいろな記事がみられるようになります。

特に大化の改新の頃には城柵も作られていました。これから支配の拠点を作っていこうという表れです。そのあと、阿倍比羅夫が北方の蝦夷に攻

めに行く記事が出てきます。それは、北へ攻めに行くときに、コシという地域が認識されてきたということになります。

当時、蝦夷地域への主な侵攻ルートは、日本海側です。文献では、何回か蝦夷征討を続けるうえで、当時の都にあった政治の考え方には、コシを中心にした体制で北に攻めていこうという意図が見て取れます。当然、律令国家が地域の支配、侵略していくときの足掛かりにしていくために、コシの地域支配を進めていこうとしていくこととなります。712年には越前国、越中国、越後国の3国に分割。718年になって能登の国が分立します。その後、また能登国が越中国に併合されて、757年にはまた能登国が分立します。加賀国にいたっては、823年になるまで越前国でした。当時の北陸地方をどう認識するか、どのようにして支配していくかを考え、国の境界がころころ変わっていくということではあるのではないかと思います。

<コシと潟湖>

北陸を考えるとときに、もう1つ重要な視点があり、それが潟湖です。潟湖とは、川が海に出る時に砂丘の形成によってできた内海で、有名なのは八郎潟や宍道湖があります。日本列島で主要な潟湖は日本海側に多くみられます。太平洋側にもそれなりにありますが、日本海側では列になってつながっているということが非常に重要です。

石川県、富山県、福井県のあたりの地形と遺跡の分布をよく見ると、今はもう埋没してしまったと思われる小さな潟湖が点々と分布しているのが見て取れます。当時の船は、例えば出雲から能登まで一気に来たかどうか非常に疑問なところがあります。能登から佐渡まで、実際に肉眼でもみることができますが、船でいっぺんに行けたかどうかというのはまだまだ未確定なところがあります。したがって、沿岸をずっと航海していくには、潟湖の存在が非常に重要になっています。この潟湖の重要性を高橋浩二先生が具体的に整理されました。縄文時代、弥生、古墳、古代、中世、近世と、東シナ海から北海道までのいろいろな流れを整理されています。そこで、縄文時代には南方からの貝の流通があり、北海道立埋蔵文化財センター展示室にもイモガイの蓋の部分をもした土製品がありました。そのような縄文時代からのいろいろなつながりが見えています。

弥生時代には、いわゆる鉄の流れがあり、北陸



▲図4 石川の潟湖 (伊藤2016)

からは玉の石材が西方への流れがあります。それぞれの時代で潟湖をめぐる物が動いているということがお分かりになるのではないのでしょうか。

重要なのは、それがいつもずっとあるわけではなく、それぞれの時代的な特徴の中で流れが違うのだということをおぼえてもらえたらと思います。特に弥生時代、古墳時代を見ると、潟湖と遺跡の関係を、砂丘とともに潟湖があって、潟湖は川の流れのあたりに、潟湖のほとりには中核的な集落ができて集落を中心として周りのムラとは川でつながっています。

潟湖の面白いところは、冬の季節風によって砂丘の砂で出口が埋まってしまうことがあります。そして春になると雪解け水で水がどんどんあふれてきますが、出口がないため、出口で氾濫します。海との近くに港を設けようとする、氾濫する部分を制御しなくてははいけません。

つまり、一つのムラだけではなくて、潟湖を中心とした川でつながり、経済的につながる社会が、潟湖の出口の土砂をさらって出口を確保する作業するという、一つの大きな有機的なまとまりをもって活動しているということが分かってきます。

したがって、この潟湖の存在が、コシだけでなくおそらく山陰の方、九州の方もそうだったと思うのですが、社会を考えていくときに非常に重要になってきます。

<コシの古墳築造>

古墳時代前期の政治の中核は、奈良盆地の東南部、今の桜井市や天理市のあたりにあったと考えられています。

古墳時代中期になると、大阪府の堺市や藤井寺市、羽曳野市にまたがる百舌鳥・古市古墳群になります。5年前に世界文化遺産に登録されました。百舌鳥・古市の政権後、6世紀には継体天皇など、中期とは違う政権の主体がおこりました。その後、7世紀には飛鳥に宮がおかれます。

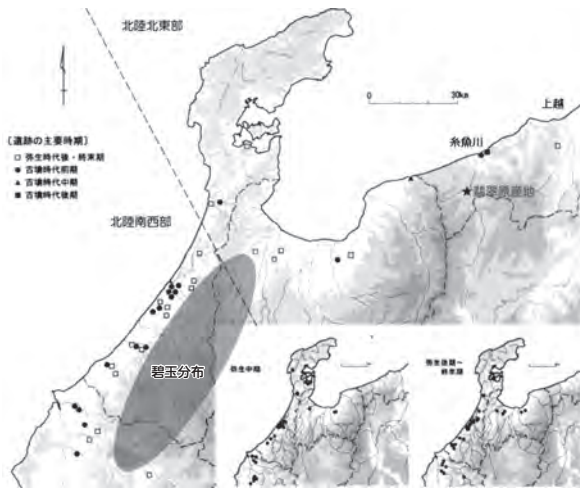
このように、古墳時代の中央の政治体といってもそれぞれその中核が違うのだという考え方があります。こういう考え方をもって地方の古墳とはどのようなものか、考えていくのが私たちの研究の基礎となっています。

特に前期については、北陸というのは実は東海、山陰、近畿などのいろいろな地域の土器がたくさん入ってきます。北陸の北東部の人たちが東北の南の方に移住していくということがわかっていますが、主に加賀・能登を中心に話を取り上げていきたいと思っています。

<2. コシの地場産業、玉作りと古墳>

古墳前期は、加賀・越前で玉作りが盛んになっています。古墳時代中期には越前・加賀を中心に非常に卓越した武器が出ています。後期では横穴式石室が北部九州から伝播しています。そのように地域の中で核となる活動や構築物が、他の地域とのかかわりの中で理解されるということを順次見ていきます。

玉作りでは管玉をもちろん作っていますが、勾玉も作っています。ほかにも玉の種類があり、棗のような形をした棗玉や、平らな平玉とか、いろいろな玉があるのですけれども、勾玉・管玉を主に作っていたのが越前の北の方から加賀、能登の南の一部です。それから現在の糸魚川市にもあり



▲図5 玉作遺跡の分布

まず、先ほど北陸を2つに分けると北東部と南西部に分かれると申し上げましたが、北陸の玉作りは南西部の方が主流になっています。北東部に位置する糸魚川の方でも作っていますが、ヒスイではなくて蛇紋岩で作ったものですので、ちょっと違います。

玉を作っていた期間と、古墳と重ね合わせていくと、玉を作っていた地域には、あまり大きな古墳がありません。そのため、この古墳づくりというものと玉の生産とがどれだけ関連があるのかよくわからないのが実情です。

古墳時代に玉を作るということは、腕輪形石製品という碧玉などのような特殊な石・鉱物でいろいろな宝物を作ることでもあります。つまり玉を作っているイコール石・鉱物でできた宝物も作っていることです。

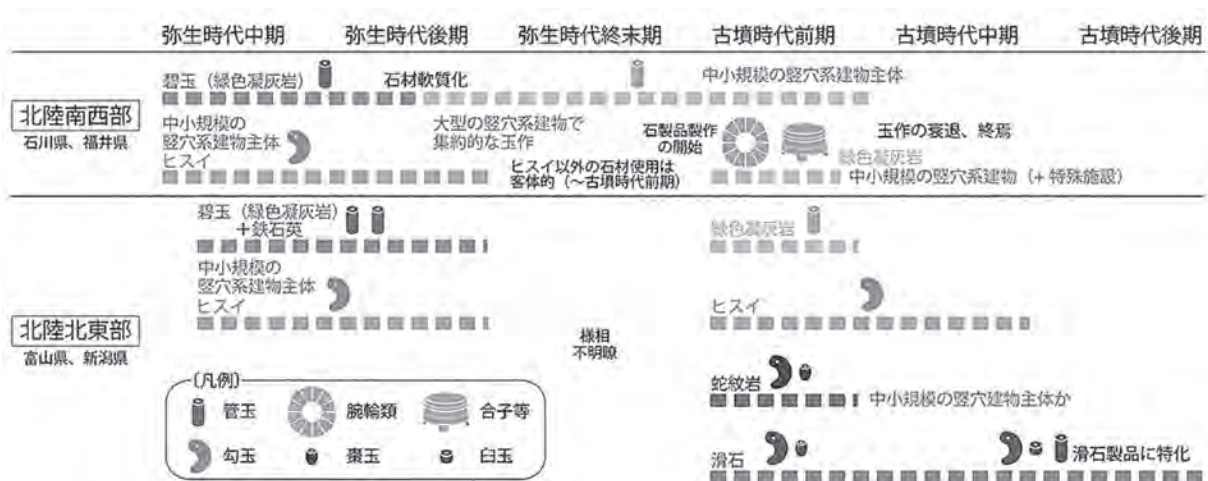
この特殊な石・鉱物で作られた宝物は各地域の

豪族の前方後円墳に入っているため、当然古墳の研究者は、そういう宝物を中央からコシに発注して、そこで作ったものを自分たちで配っている、各地域の有力者に配っているのだということを考えています。実際に作っている地域の遺跡の状況を見ると、大きな古墳がないので、一体どうやって物が流れていたのだろう、ということがいろいろ問題です。私はどちらかというと、地域の作ったこのような宝物は、当時の中央の王権から直接作ってくれというような指示があったのではなくて、いろいろな経済的な活動の中で作ったものが、どんどん中央に流れていっているのではないかと考えています。

＜玉作り遺跡の様相＞

実際の玉作り遺跡を見てみます。石川県の地図に玉作りの遺跡のマークを落としています。管玉は、最初はこのような四角い石を鉄の工具で割っていき、それをひたすら磨いて、四角から角を取って四角柱にし、またその角を取ってどんどん丸くして管玉に仕上げます。

糸魚川で採れたヒスイで作られた北陸で特徴的な勾玉があります。1つ覚えて帰っていただけたら嬉しいなと思うことがあります。形がちょっと変わった勾玉ですが、反対側にもう一個あったらちょうど円になります。合わさるとドーナツの形、このドーナツを半分に切ったような形をした勾玉は、北陸で作られたものです。遺跡からの出土品では、こういう形の途中まで作られたものも出ており、北陸で作られたという特徴のある勾玉であることが証明されています。今後、遺跡の展示会などに行かれて、こういう形の勾玉があった



▲図6 玉生産の変遷

ら、これは北陸で作ったのだな、と書いていただければ間違いありません。

北陸地域一帯では、弥生時代からずっと玉を作っています。弥生時代中期には多くの集落で管玉が作られており、弥生時代後期になっても依然としてたくさん作られています。しかし古墳時代に入ると、加賀から越前平野の方に玉作り集落が集中していきます。

この玉作り集落で作られたモノの流れを少し整理します。北陸南西部は、弥生時代中期のころは管玉と勾玉を作っており、弥生時代終末期になっても続きます。古墳時代前期になって、それにプラスして先ほど申し上げた碧玉等で作られた宝物を作り出すこととなります。

北陸北東部も、弥生時代後期までは勾玉、管玉を作っています。古墳前期になっても作りますが量的には多くない。しかも碧玉等の宝物を作っていない。ということで、宝物を作っているかどうかというのは非常に大きな問題です。この宝物を作ってそれをどういう体制でどのようなルートで地方の豪族たちの手元に行ったかということが非常に問題です。鏡などと同じように中央の政治体が地方に配ったのだという考え方があります。また別の考えでは、北陸で作ったものをいろいろな経済的な流通の中で利用しているのではないかと論じている研究者もいます。私は後者の立場になって研究しています。

<北加賀の玉作りと古墳>

こうして見てみると、玉作り遺跡は金沢平野に数多く点在していますが、よくよく見ると遺跡の中でいろいろなタイプに分かれます。私は、A・

B・C・Dと4つに分けています。A類としたものは、集落で最初の原石段階から製品まで作っています。B類は完成品に近いものしか出ない、C類は石製品の残余物再加が出土するもの、D類は完成品しか出土しないものです。ということは、各集落の間で分業する体制で生産がおこなわれているということがわかります。

この分業体制ですが、玉作り遺跡がたくさんあるのに、その近くに古墳がほとんどない状態です。古墳があってもぼつぼつ。ということは、この玉作りをやっている人たちと古墳との関係性がなかなか見出しにくいのです。

平野から東部の丘陵にある小坂1号墳から、小さな先の平たいへら状の鉄器が出土しています。こういうものは武器ではなく、よく似た形で漁具である銚やヤスなどがありますが、刃としての逆利がない。つまり刺さったら抜けてしまうのです。玉作りをしていくときには鉄の工具を使っており、よく見ると割る時に鉄の工具が当たった痕跡が残っています。これを刺突具とする研究者が多いのですが、この先端のところを石に押し当てるタガネとしての石を割っていく工具ではないかと私は考えています。

そのように考えていくと、玉を作っていた低地の人たちの古墳が平野の北東部の丘陵にもとめられるでしょう。それがこういう特殊な鉄工具、それから特殊な形の鉄鏝を持っている、つまり自分たちで作っているということなので、前期における鉄生産をかなり掌握している人たちということになります。しかしながらこの地域の古墳は直径が10数mしかありません。前方後円墳でもなく、大きな円墳でもない、ということで、玉を作って



▲図7 北加賀の玉作り遺跡



▲図8 南加賀の玉作遺跡



▲図9 能登の玉作り遺跡と古墳

いた集団は、大きなものと考えられません。

<南加賀の玉作りと古墳>

南加賀の玉作りでは、この地域にも前方後円墳はありますが、纏向型の前方後円墳のようにちょっと形が違います。どちらかという、定型なものではなくて形式的に古いタイプのものがあります。

そして、玉作りの活動が終わる頃になって、ようやく能美市秋常山1号墳という全長120mという大きな前方後円墳が作られます。玉を作っていたときには大きな前方後円墳を作っていません。そういうことから北加賀と同じように、玉作りと大きな古墳を作ることがどうも結びつかないようです。

<能登の玉作りと古墳>

能登にも宝物としての石製品の製作拠点があります。北側の製作拠点に七尾市国分尼塚1号墳という全長54mの前方後方墳があります。この前方後方墳は、木棺の形式が一般的な棺の形式ではなく木槨のような木組があり、非常に地方的な形をしています。そこから出土した勾玉は、背中を合わせているような、非常に変わった形をしています。

中能登町雨の宮1号墳は、どうも玉作りが終わってからの古墳のようです。このように、大きな古墳を作り始めるという点で南加賀と同じ展開になっています。玉作りと大きな古墳を作るといのはあまり結びつかないようです。

<玉作りしない地域—越中—>

玉作りをしていない地域を見てみます。氷見市阿尾島田1号墳は、全長50mクラスの非常にき

れいな前方後円墳を作っています。これは錫でできた玉で、おそらく東北か北方から来たのではないかと思うのですが、ガラスでできたつながった玉というのは九州の方に多く出土しています。

<玉作りしない地域—越後阿賀北地域—>

越後の阿賀野川の北の地域で、もうちょっと行ったら山形県というところに胎内市城の山古墳があります。

このように、玉作りと古墳作りが連動しないということから、玉を作らない行為と古墳を作らせる中央の意志というものがリンクしないのはどうということなのか、というのが大きな課題になるのではないかと思います。

<3. 甲冑が集中>

中期の政権中枢を示すものとして百舌鳥・古市古墳群があります。百舌鳥・古市古墳群の何がすごいかという、卓越した武器と武具があるということです。中国の史書に書かれた倭の王が、遣使を派遣しています。中国皇帝への上表文で、自分から甲冑をはいて山川を歩いて攻めに行ったのだ、と表現しています。それだけこの古墳時代中期という時代は、武器の刷新が非常に大きな時代になります。北陸はその中心に入っているようです。

<古墳時代の甲冑と軍事>

近畿地方が抜きんでて甲冑の出土量が多いことが出土のグラフでお分かりだと思います。しかも近畿地方でも大阪府の百舌鳥・古市古墳群がダントツに多いのです(図11)。

当時の甲冑は次のようになります。短甲は、おなか周りを防御するもの。これは冑で、短甲と一緒に基本的なセットになります。それから当時の武装はこれで完全ではない。草摺(くさずり)という腰回りを保護するもの。頸甲(あかべよろい)といいますが、くびのよろいと書き、甲冑の言葉は難しくてなかなか覚えられないのですが、頸甲という首を守るもの。それから肩甲、肩を防御するもの。剣道と同じ籠手で、腕・手をガードするもの。これらが全部そろって1つの武装になります。これだけ全部そろって持っている古墳というのはそうはない。最低限、頭とお腹から腰を防御するものを持つ古墳が、中でも優秀な武器を持っていることになります。

日本では、当然近畿地方がダントツに多いので

すが、あとは九州。こういう状況で北陸、東海、中部もかなりの数が出土しています。関東地方、四国に至っては、ほんのわずかしこ出土していません。北陸は非常にたくさん出ているのがわかります。

百舌鳥・古市古墳群の造営時期である中期は、武器が刷新されていく、どんどん革新されていく時代です。これを甲冑で見ていくと、どんどんモデルチェンジしています。縦板革綴（たてはぎいたかわとじ）短甲、方形板革綴（ほうけいばんかわとじ）短甲、次に長方板革綴（ちょうほうばんかわとじ）短甲、三角板を使う、横板（よこはぎいた）、というふうにどんどん刷新していきます。冑にしても、中国製だが、小札（小さい鉄板）を用いて作った冑から、国産で三角板で作ったり、底を持ったりいろいろなバリエーションをもってどんどん変わっていきます。それが後期になっていくとだいたい1つの形に収斂していきます。すなわち、古墳時代中期は武器がどんどん新しいものに変化していく技術革新の行われた時代だということになります。

<甲冑が集中>

そういう時代を前提としてコシを見ていきます。加賀から越前において武器が集中していることがわかります。

前期には玉を作っていた社会が、次の百舌鳥・古市古墳群の中期に政治の中心が変わった段階で、その地域が玉作りからたくさんの武器を持つような地域に変わっていったのです。しかも、いろいろな甲冑があります。つまり1つの形式が大量に入っているわけではなくて、いろいろな形のもので、いろいろな古墳に入っているのです。能美市和田山5号墳では2つの短甲が出ており、和田山2号墳では1つ、能美市下開発茶白山9号墳では冑のセットがあります。

このように多種類の甲冑が集中して入っています。甲冑だけではなくて、鉄鏃や刀なども、それなりに集中するような地域に変わっていています。

この当時の越中や越後では、甲冑類がほとんど出でおらず、そのため、このコシという中で考えていくなれば、武器が集中するところはその一部でしかありません。新潟でも古墳作りはそんなに活発ではなく、百舌鳥・古市の政権の主体は、コシという地域を見た時に、全体を認識していない可能性があります。コシの南西部は、王権に一番



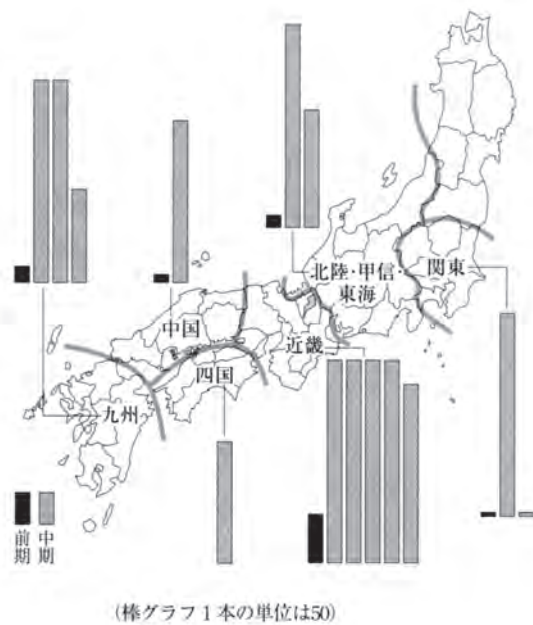
▲図10 天神山7号墳の衝角付冑（伊藤撮影）

近いところで重要性が重要視されるのだと思っています。

応神天皇と福井県の敦賀は深い関係があります。日本書紀に応神天皇が気比の神に参詣に行っており、神と名前を交換したというような記述もあり、応神天皇の出生に関して敦賀という地域は、重要になっていることを考えると、百舌鳥・古市古墳群の政治体と北陸南西部は親縁な関係にあったのだということが類推できます。

特徴ある冑をみます。下開発茶白山9号墳の縦板革綴式衝角付冑（たてはぎいたかわとじしきしょうかくつきかぶと）です。縦板というのは縦板を何枚も横に重ねるもので、革で綴じ合わせていくものです。衝角とは目の前に、ちょうど頭の筋の部分に角が来るような形の冑になる。この冑は古墳時代によくある形なのだが、板の合わせ方が非常に特徴で、日本で出土しているものはこの2例しかありません。これは、福井市天神山7号墳出土品より太い縦板を用いており、技術的に考えればより細い板のものから太い、幅の広い板に変わったのが、考古学でいう型式変化、つまり技術的な進歩と考えます。そういうところから天神山7号墳の方が古いかと思います。

この2つの冑の形を見てみると、本来的には鉾で留めるのが一番いいのですが、革で綴じていくものから鉾で留めていく型式に変わっていく段階のもので、また、この2例しかないということは、この形は作るのが面倒、あるいはあまり効率が良くないということで、数を作られなかった、ということも考えられます。ある意味試作品的な存在です。そういうものを副葬しているということで、当時の武器の配布、入手のあり方に、より政権に近いところにあったのではないかなと考え



▲図11 甲冑地方別出土量 (田中2003)

ます。

ちなみにこの天神山7号墳からは、ガラスの勾玉であるとか、金で作った耳飾が出土しました。この耳飾はおそらく朝鮮半島南部で作られたものではないかと考えられます。ガラスの勾玉も非常に珍しいものです。コシや百舌鳥・古市古墳群といった日本での製作というよりも、どちらかという朝鮮半島の雰囲気があります。

下関発茶白山9号墳もオレンジ色の玉があります。このオレンジ色の玉は朝鮮半島の南に多い石材で、おそらくメノウです。この玉が朝鮮半島のメノウの玉と非常によく似ています。天神山7号墳と同様に、朝鮮半島との結びつきの強い古墳であるということがわかります。

<古墳時代の甲冑と軍事>

このようにどんどん武器を刷新していくような時代にあって、こういう試作品を副葬する。どんどん武器が刷新されていく当時の背景には、それを必要とする社会がありました。現代でもそうですが、戦争が起きて国が新しい武器を開発していきました。それは新しい武器を必要とする社会からの要請があるからどんどん新しい武器が製造されます。同じような考え方で、古墳時代も中期には武器や防御するものが、開発され刷新されていくというのはそれなりの需要があったわけです。需要があったものがたくさんコシの地域に甲冑として副葬されているということになっています。

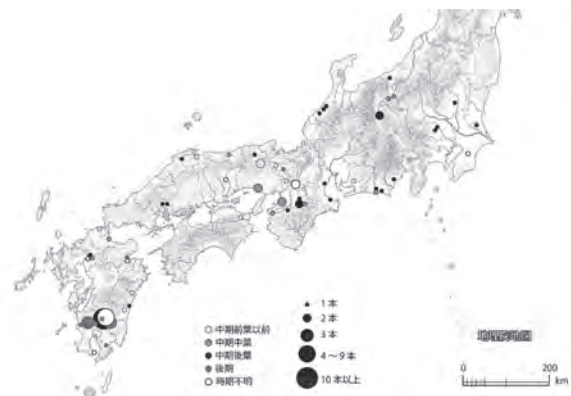
研究者によってはこの甲冑は、王権、古市百舌鳥の政治体が持つ日常的な常備軍、つまり専門の軍隊のために作ったのだという説も考えられています。そのように考えると、コシで甲冑がかなりの数が出ている地域というのは、常備軍として、百舌鳥・古市の軍事力を支えた1つの背景として重要視されていたのではないかといえます。

<古墳時代の特異な武器—蛇行剣—>

これを、蛇行剣で見えます。北陸では、甲冑が多く出ている地域に3本出土しています。令和4年、奈良市富雄丸山古墳が発掘され、日本で一番長い237cmの剣が出た。その剣が曲がっている剣、蛇行しているということで蛇行剣とされています。富雄丸山古墳の蛇行剣は、一番長い蛇行剣という特徴だけではなく一番古いということも非常に重要なことになります。

私は蛇行剣も研究しています。私がカウントしたところ、全国で約90本出土しています。ドットで示した通り主に関東以西で出土していますが、そのうちの約3割が南九州での出土になっています。人吉とか都城とかこのあたりに集中し、中期でも終末から後期初めの古墳からの出土が中心となっています。

この蛇行剣は甲冑と一緒に出ることが非常に多いのです。それから小規模な古墳で、畿内から出てくるのが少ないという特徴がありますが、蛇行剣というものの性格はなかなか説明が難しい遺物です。甲冑と一緒に出土する。それからほかの鉄鏃や刀などと、一緒に出るということから考えると、当時の軍事のなかに蛇行剣を位置付けることができそうです。そうすると軍事編成にも繋がっていくと思いますが、百舌鳥・古市古墳群の人たちが作り上げた軍事編成のなかで蛇行剣が威



▲図12 蛇行剣分布図

力を発揮したのではないか。つまり、私はこの蛇行剣は、隊長クラスに与えられたひとつのレガリアみたいなものではないかと思っています。軍事編成のなかに位置付けられると考えれば、蛇行剣がコシに集中するというのも、非常に親和性があると思います。

中期という時代を考えてみると、軍事でどんどん新しい武器を作っていました。いったいなぜなのだろうと考えてしまいますが、軍事力の矛先として、少なくとも蝦夷地域である東北地方に侵攻したということはないと思います。文献的にもないので、朝鮮半島のいろいろな動きの中で軍事を考えたほうがいいのではないかと捉え方がよいでしょう。いずれにしても、そうではないという考え方も当然ありますが、中期という時代を考えていくと軍事というものを、大量の鉄でできた武器の力といいますか、そういうものの存在が重要になっていくようです。

<和田山5号墳>

実際にどのような武器が出土しているか見てみます。和田山5号墳では、短甲という胸のあたりを保護するもの、頭を保護するもの、刀、こういう中に死んだ人の使ったものを一緒に収めていくものになります。こちらは頸甲、首を守るもの。さらに鉄鏃。このように葬られた人の性格を表すかのように、私はこういう仕事をしていて、というのを表すかのような副葬品というふうにとらえられるのではないかと思います。

<狐山古墳>

加賀市狐山古墳には、短甲とともに、画文帯神獸鏡という非常に優秀なきれいな鏡が出ています。それと同時に、帯金具。銀製品ですが、朝鮮半島南部に類例があり、渡来系のもので、当時

の軍事を示すような遺物は、朝鮮半島と関連のある遺物が一緒に出ることが非常に多いことから、軍事的な動きが朝鮮半島との関係の中で見えてきます。ちなみに実は、蛇行剣は朝鮮半島でも出土しています。

朝鮮半島の研究では、先週私のところに送られてきた論文ですが、そこでは蛇行剣が11本出ているとしています。2年ほど前までは4本ぐらいを把握していましたが、最近とみに確認例が増えています。朝鮮半島で倭国製の短甲もかなりの数が出土しています。それとともに蛇行剣も出てくるということはやはり朝鮮半島における日本の活動という、戦争状態にあったということも考えていかなければいけないと思います。

今はそこまで言っている研究者はなかなかおらず、難しい問題があります。それを証明できるものがないので言葉を選ばなくてはならないと思いますが、これからの研究の中では、朝鮮半島とのいろいろな交流を想定できます。平和的な交流もあり、あるいは物を獲得するために争いもあったのでしょう。それから百済という国が南の方に領土を広げていくときに日本を利用する。そういう中で倭の人たちは軍事力を使ったり、あるいは人間を派遣した、そういう関係性をまた百済の人たちが利用したと考えられます。そういうことがあるので、平和的な見方だけではなくもっと多面的にこれからの研究は進んでいくのではないかなと思います。

<4. 横穴式石室にみるコシ>

横穴式石室という、石でできた部屋を作り、玄室に遺体をおさめていたものです。玄室に繋がる通路として、羨道（せんどう）、あるいは墓道というものがあります。前庭はお墓へのいろいろなお祭りをする場所です。



▲図13 北陸の横穴式石室の系統変化

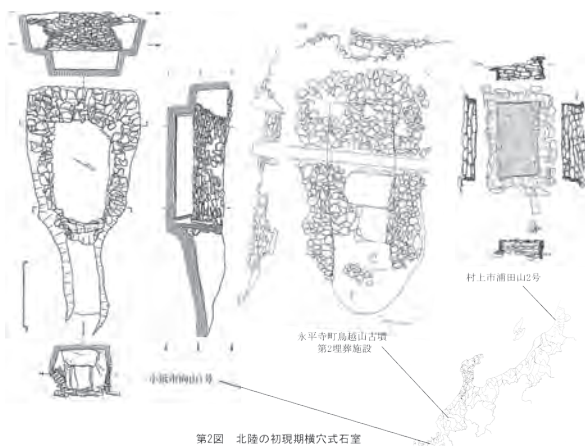
横穴式石室は、もともとは北部九州の方で作られ始めるのですが、北部九州型石室、竊穴系横穴式石室、肥後型石室というように複数の型式があります。畿内でも横穴式石室を作り、畿内系横穴式石室といっています。それぞれ北部九州系と畿内系という大きな2つの石室を作る流れがあります。これをコシで見ると面白いことがわかります。図13の丸印が九州系の横穴式石室、三角印が畿内系の石室、四角印がどちらでもない何か変な石室です。

教科書的には古墳時代の後期になると、朝鮮半島からの技術をもって横穴式石室を作り始めるということですが、その内実は非常にいろいろな要素が入っています。コシではどちらかという、九州系の横穴式石室が多く認められます。畿内で作られた横穴式石室は、中央の王権である政治体がこういうお墓を作りなさい、あるいはこういうお墓で人を葬りましょうということで押し進めていくわけです。

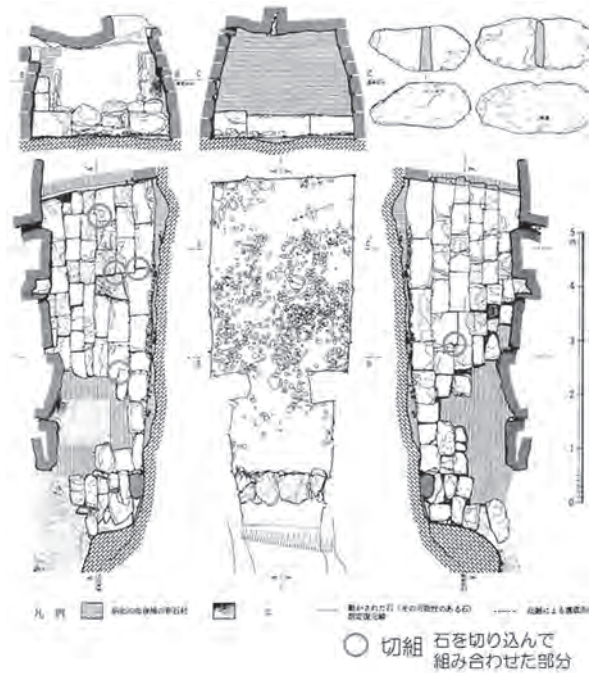
九州系の横穴式石室はそれまでのいろいろな人間関係のなかで、新しいお墓が作られる技術を伝えて作られているもの、というふうに考えています。ですから九州系の石室は民間交流の結果作られたもの、畿内系の石室はどちらかという官製というか、国家の力によって動かされていっているものです。言葉はあまり適切ではないかもしれませんが、民間と国家というかそういう位置づけになっていくのではないかと思います。

<横穴式石室波及>

北陸のごく初期の横穴式石室を見てみると、小浜市向山1号墳や、永平寺町鳥越山古墳、それからもうちょっと行くと山形県ですが、村上市浦田



▲図14 コシの初期横穴式石室



▲図15 神奈備山古墳の切石組

山2号墳、こういう非常に古い石室は、九州系の横穴式石室です。

<横穴式石室の連続性と非連続性>

若狭では、北部九州系石室の若狭町向山1号墳が作られ、それ以降の6世紀の前葉から中葉にかけてずっと同じ北部九州系石室が作られ続けます。それが、6世紀中葉になって作られた若狭町丸山塚古墳が、突然畿内系の石室に全く形が変わってしまいます。丸山塚古墳は当時のこの地域で一番大きな古墳ですが、それ以前ではワンランクちいさな古墳に畿内系の石室が入ってきます。若狭地域では、首長クラスはずっと民間レベルのものを使用していたのですが、小さい古墳には近畿からの国家の圧力かわかりませんが、畿内系の横穴式石室を採用し、最終的には若狭の首長も畿内系のものを採用していきます。このように、畿内系のものがどういったちで入るかということは、非常に地域の歴史を考えるうえで重要になってくるのです。

越前では、基本的に九州系の横穴式石室が続いています。坂井市椀貸山古墳とあわら市神奈備山古墳は、ともに九州系の横穴式石室で、凝灰岩という火山灰が固まってできた石を切って組み上げたものになります。図15の神奈備山古墳の石室図に丸にしてあるところが、きれいに合わせることでできないため、角を取ったりして合わせてい

るところになります。工具で四角く定形に切った石をサイコロのように積み上げていくのではなく、合わないところはその場その場で小さく削ったりして組み合わせています。このような技術は、実はまだ当時の倭の中で見られるのはこの地域だけです。この技術がどこから来たかということを考えていくときに、やはり中期の朝鮮半島との関わりの中で考えるべきでしょう。後ほど、またお話していきたいと思います。

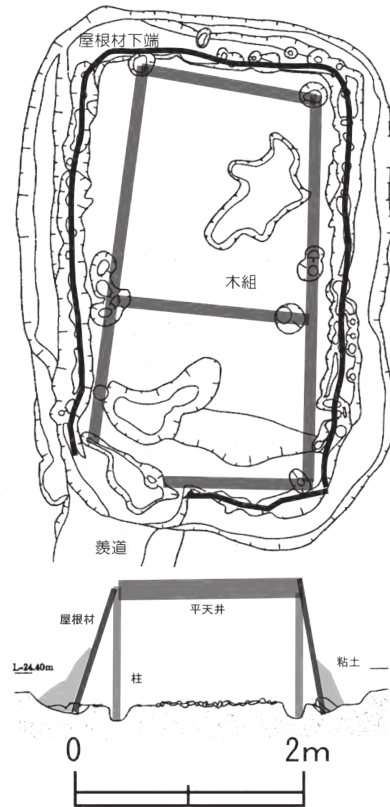
能登では、基本的にずっと九州系の横穴式石室が続いています。それが7世紀に入って畿内系に変わっていきます。それぞれの地域のなかでどういう石室が作られるか、特に畿内系の石室が作られる背景の中では、国家からのいろいろな圧力を考えるべきです。

七尾市三室まどがけ1号墳は九州系の横穴式石室です。七尾湾に面する大型の横穴式石室で、玄室幅が2.5m、玄室長が5mぐらい。非常に大きな古墳なのですが、令和6年能登半島地震で石材が崩落してぐちゃぐちゃに壊れてしまいました。実は天井石がなく、揺れて壁体がもたなかったので壊れました。それ以前にもけっこうイノシシが荒らしており、石材が抜け始めていたので早く埋めなさいと、私達がいろいろ助言していましたが、これを管理していた自治体でなかなか予算がつかなかったのです。それで結果的に地震で壊れてしまいました。文化財を残していくということにやはり待ったはない、やるべき時に、できるときに処置をしないと、残せるものも残せなかったという事例になるのではないかと思います。

同じ能登ですが、羽咋という地域です。ここは非常に面白いところで、畿内系の石室をずっと作り続けていきます。畿内とのつながりをその地域で持ち続けていく集団です。同じ能登という地域でありながら、中央の力は一様に入っていくのではなくて、まばらに入っている、それが古墳時代の権力、国家が地方に入っていく力のあり方なのだということがよくわかる事例ではないかと思います。

<横穴式木室と凝灰岩切石積石室>

小松市ブッシュウジヤマ古墳の構造は特に畿内系でも九州系でもない、特殊な古墳の埋葬施設の事例です。木で空間を作り、そこに粘土を貼り付けて土で盛り上げて部屋を作ります。横穴式ですが、木でできた空間、横穴式木室(よこあなしきもくしつ)といいます。このタイプは近畿地方や、



▲図16 小松市ブッシュウジヤマ古墳の木室構造

東海地方、旧国でいえば遠江国や伊勢国、摂津国、和泉国などにあります。

他地域のものは、おおむね後期でも後半、つまり6世紀後半であるのに対して、コシで作られたものは5世紀の末葉ぐらいから6世紀の前半と、時期的に古いものです。特に、加賀市三木5号墳というのは、木と粘土で部屋を作りながら出入口だけ凝灰岩の切石で作っています。さきほど神奈備山古墳という切石で作った非常に特徴的なものがあると申し上げましたが、この切石技術が一緒にあるわけです。石を切って埋葬施設の構造に使うというヒントは、どこから来たのか。私たちはこれから考えていかなければならないと考えています。

地方のいろいろな技術は、なんでもかんでも近畿中枢からくるわけではありません。近畿中枢では切石技術は7世紀以降にしかありませんが、コシにはそれよりも古くからあるのです。そういった場合に必ずしも地方は中央からくるのではなく、地方同士、あるいは朝鮮半島、いろいろな独自の交流があったということがわかってくる資料であると思います。

＜5. 古墳の終焉—律令国家の境界としてのコシ—＞

最後に、7世紀を見ていきたいと思います。

教科書的に、7世紀になると前方後円墳はもう作られなくなるといいます。コシでは、地域によって前方後円墳の終わり方が違います。終わったあとも7世紀に入って寺院が作られますが、あるところとないところがあります。

北陸の南西部では、7世紀後半に寺院の分布差が顕著に出てきます。近畿のいろいろな文化の受け入れ方がかなり違うということがわかります。

特に越前では、寺院が作られるころには基本的に大きな古墳がありません。少なくとも寺院が作られるところには大きな古墳を作らなくてもいいような地域の支配体制や、地域の中における豪族の存在が考えられます。

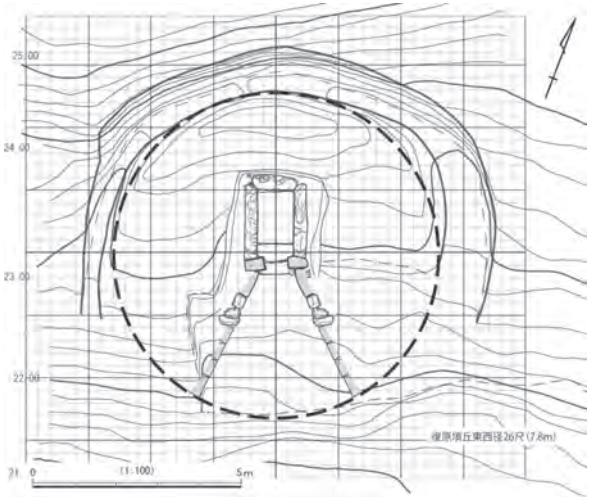
反対に7世紀終末になっても、つまり寺院が作られる時代になっても墓作りをするということは、一体どういう意味を持つのでしょうか。地域を考えるうえで重要な存在なのではないかと思えます。特に北海道を考えていくと、北海道式古墳という、いわゆる東北部の末期古墳と非常によく通じるものがありますが、そういう墳丘を持つような墓を作る、生み出す社会というのは一体どういう社会なのか、ということを考えるうえでも参考になるかなと思います。

＜終末期古墳の展開＞

あわら市水切古墳群や小松市河田山12号墳・33号墳の切石横穴式石室があります。先ほど申し上げたように、切り組みといい、石に合わせるように角を取りながら石を積み上げていっているものです。こちらも7世紀に入っているので、十



▲図17 七尾市須曾蝦夷穴古墳の天井石持ち送り

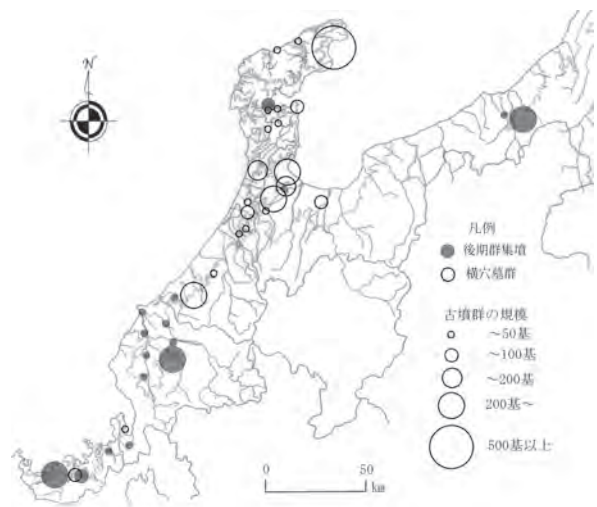


▲図18 金比羅山古墳墳丘復原

分、近畿からの技術的、あるいは形としての思想が入っていると思うのですが、近畿に同じものはほとんど見当たりません。

七尾市須曾蝦夷穴古墳は能登半島の七尾湾に浮かぶ能登島にある終末期古墳。こちらの天井石の組み方が側壁に差し渡すように石材を置いていき、最後に天井石を乗せる。いわゆる隅三角持ち送りという技術になります。これは高句麗の古墳に特徴的なものです。天井石をコーナーに石を差し渡したときに、下から天井を見ればその石の形が三角に見えており、一段一段同様に組上げてどんどん空間を小さくしていく技術です。当然終末期なのでお寺も作られる時代ですが、このような渡来系の技術も入ってきているわけです。

また、珠洲市大島南1号墳では、石室中に畿内



▲図19 後期群集墳と横穴墓の分布

産土師器という赤い土器が出土し、おそらく都である藤原宮で使われたものと同じものがこの土地に入ってきています。考えてみると、この大畠南1号墳、2号墳に葬られた人は都に行っておそらくの仕事をしてお土産に土器を持って帰ってきたと考えるのが一番妥当なところだと思います。

このように終末期古墳を作っている背景というのはいくつかありそうです。小松市那谷金比羅山古墳は奈良県高松塚古墳と同じような横口式石槨という墓室を持ち、中国の尺度で作っています。そこからみると、まさに飛鳥にあるような終末期古墳を作ってもおかしくはないわけです。

<コシの横穴墓>

もう1つ終末期で重要なのは、横穴墓の存在です。北海道にはなく、東北地方北部にもほとんどありません。岩盤をくり抜いて墓を作って墓室としているものです。横穴墓は北陸地方に集中しており、特に能登半島に非常に多くなっています。

(図19)

<北加賀をめぐる人の動態>

そのようにこの地域にどんどん違う地域のものが入ってきています。金沢平野と言いましても東海系のものであったり、九州のものであったり、あるいは渡来系のものであったりと。先ほど一番最初に申し上げたように、潟湖をめぐる交流というものが非常に重要なのです。それが7世紀になって再度復活していきます。古墳時代中期に

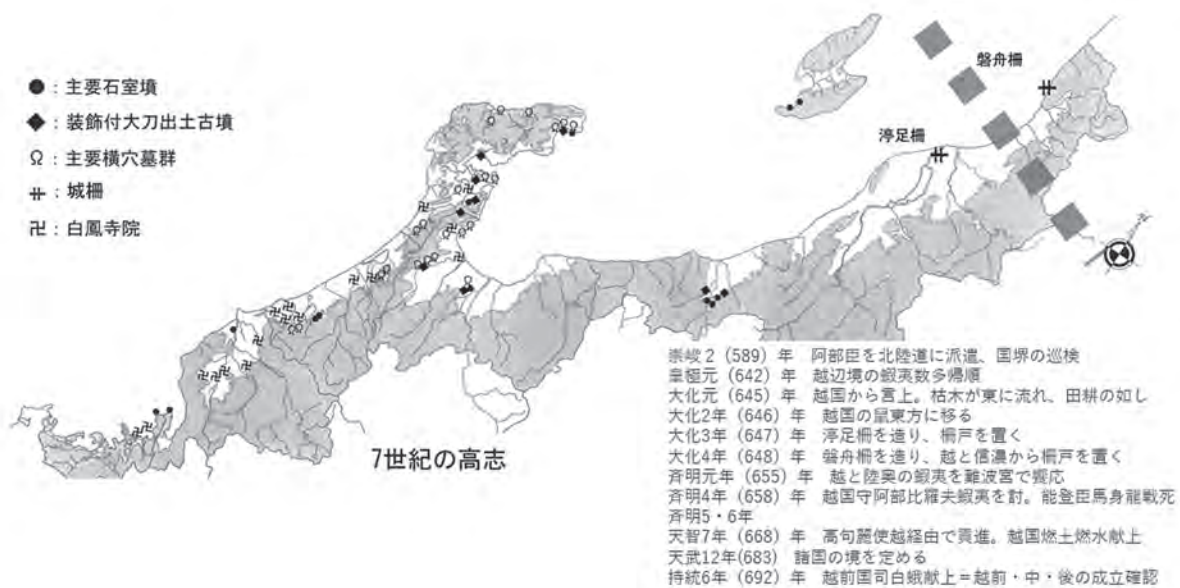
あつては潟湖の存在というものが震んでいたのですが、7世紀になってもう一度重要になってきます。

<能登半島の地政学>

それを北陸全体にして見てみると、能登半島の位置が、非常に重要になってくるのではないのでしょうか。最初に申し上げましたが、7世紀になって淳足柵(ぬたりのさく)や磐舟柵(いわふねのさく)などの、いわゆる地域支配の拠点が作られ、蝦夷地に侵攻する拠点を作っていきます。いわゆる軍事的な面を支えているものです。

その軍事面を見ていきますと、装飾付大刀、これはいわゆる兵力の指揮官として持つべきものですが装飾付の大刀が点々と出土します。そういうものと一緒に横穴墓が存在しています。そういうことで見ていくと、横穴墓の存在、武器の存在、しかも白鳳寺院がほとんどない状態ということは、白鳳寺院の多く作られたところは、もう古墳に対して、それを作る政治的な契機がなくなったといえるのでしょうか。例えば、先ほど申し上げた金比羅山古墳であれば、高松塚古墳と同じような横口式石槨をもっています。それは、壬申の乱やそのような政治的な駆け引きの中で、褒賞的に与えられたものとして考えられます。一方、藤原宮で使われた同じ土器をもらって帰ってくるような人々は、軍事的なものとの関わりも考えられます。

そのように考えていくと、7世紀以降、北方世界に侵攻していく位置、つまり地政学的な重要性



▲図20 能登半島の地政学

というものが、この地域に当時の政権が認めていたと考えられます。その結果、古墳が作られ続けたということになるのかと考えているところです。

<おわりに>

コシという地域は、地理的に畿内の王権に近い距離にありながら古墳が顕著に作られなかった地域です。それはある意味、古墳時代としての境界領域というか、古墳時代としての1つのまとまりのあるような社会の中で、一番縁辺に当たるような地域ではないかと考えられます。

このような地域にあって、古墳を作る契機が、前期においては玉作りであり、中期では軍事的な面が大きいのです。このいろいろな影響の大きさの中で、非常に強いインパクトがあれば、強い結びつきが要求されていけば大きな古墳を作り出す。そのような関係を築くことができなければ、古墳を造営することもないかと思っています。

つまり、古墳時代になって古墳を築造する契機は、中央の政治的連合体との関係で構築されたと思われませんが、強固な関係の下にあったとは想定できません。勾玉や管玉、宝器としての碧玉製器物の生産（玉作り）が大々的に行われながら、小規模な古墳しか作られず、中央の政治体が生産に積極的に関わっていないようです。つまり弥生時代以来の社会的・経済的なつながりの中で古墳時代の社会が営まれていたのです。

前期末ごろに玉作りが終息することによって、より大きな古墳が営まれ始めます。中期に中央の王権が移行したことも関連するのでしょう。武器の刷新が頻繁に行われたこの王権下で甲冑等の武器の副葬が顕著となり、倭の軍事力の一部を担っていたのだと考えられます。

終末期の7世紀には、コシという地域が国家の先兵として東北地方への侵攻を支えたフロンティア、開拓地ではないか、と結論づけられそうです。

最後までご清聴ありがとうございました。

<引用、参考文献>

- 石川県立歴史博物館
2016 『加賀能登王墓の世界』
伊藤雅文
2008 『古墳時代の王権と地域社会』 学生社
2012 「北陸」『古墳時代の考古学』 2 同成社
2016 「加賀・能登の潟湖と古墳」『加賀能登王墓の世界』 石川県立歴史博物館
2021 「北加賀地域における古墳時代後・終末期社会の粗描」『日本考古学協会2021年度大会研究発

- 表要旨』
永平寺町教育委員会
2007 『北陸の横穴式石室集成』
古代歴史文化協議会
2018 『玉—古代を彩る至宝』 ハーベスト出版
小松市教育委員会
2010 『継体大王と江沼の豪族』
末永雅雄
1981 『増補日本上代の甲冑』 木耳社
菅原雄一
2022 『北陸の古墳時代を探る能美古墳群』 新泉社
鈴木一有
2011 「横穴式石室」『古墳時代の考古学』 3 同成社
鈴木敏則
1991 「横穴式木室雑考」『三河考古』 4 三河考古刊行会
新納泉
1989 「王と王の交渉」『古代史復元』 6 講談社
高橋浩二
2003 「潟湖環境と首長墳」『蜃気楼』 富山大学考古学研究室
2004 「日本列島と日本海」『日本海／東アジアの地中海』 桂書房
2023 「日本海沿岸の潟湖と弥生時代拠点集落」『碧の海道』 石川県立歴史博物館
田中晋作
2003 「鉄製甲冑の変遷」『考古資料大観』 7 小学館
都出比呂志
1989 「古墳が造られた時代」『古代史復元』 6 講談社
天神山古墳群研究会
2017 『福井市天神山古墳群再考資料集』
戸根比呂子
2018 『三木古墳群確認調査報告書』
富山大学人文学部考古学研究室
2007 『阿尾島田古墳群の研究』
北陸古瓦研究会
1978 『北陸の古代寺院』 桂書房
能美市教育委員会
2011 『史跡秋常山古墳群保存整備事業報告書』
三浦俊明ほか
2004 『下開発茶白山古墳群』 II 辰口町教育委員会
水沢幸一
2016 『城の山古墳発掘調査報告書』 胎内市教育委員会

(2) 冬季講演会

「キーワードで読み解く北海道・北東北の縄文遺跡群3」

「北海道・北東北の縄文集落

ー円筒土器文化から大規模環状列石へー」

講師：高田 和徳 氏

(岩手県一戸町 いちのへ文化・芸術NPO
代表理事)

<はじめに>

みなさん、こんにちは。寒いときにも関わらずこのようにたくさんおいでいただきまして本当にありがとうございました。

<自己紹介を兼ねて>

私は岩手の県北、青森県寄りの小さな町で生まれました。大学を卒業してから主に岩手県内で発掘調査を実施してきましたが、30歳近くになってから地元に戻らなければならなくなり、その後定年後の十数年を含めた40年近く、地元で発掘調査を継続してきました。

本日は世界遺産となった「北海道・北東北の縄文遺跡群」の縄文集落について、自分が直接関わった遺跡や自分の住んでいる岩手県北の縄文時代の遺跡を中心にお話をさせていただきます。

遺跡についての講演ではどのような視点でお話するかによって、内容がかなり異なってきます。本来であればいろいろな視点から広くお話ができればいいのですが、それはなかなか難しいです。特に何千年も前の古い時代の話になるとわからないことも多いです。本日はあくまでも北東北で調査してきた私の視点でお話をさせていただきます。



▲図1 北海道・北東北の縄文集落

<地元のことから考える>

昨年の10月ごろ、タクシーに乗った時、運転手さんが面白いことを言ってました。「今年はカマキリが高いところに巣を作っているので、たぶん大雪になりそうだ」というのでした。「え？そんなことあるの？」と思ったんですが、間もなく12月になると大雪が降ったんです。それでおそらく北海道はもっと雪が多いだろうと思ってきたところ、意外にも少ないのでビックリしました。皆さんにお聞きしたところ、今年は特別雪が少ないということでした。やはり地域によっていろいろ違うということを改めて痛感させられました。現在はこのような状況ですが、これから2月になると大雪になるかも知れません。

「カマキリが高いところに巣を作ったから今年は雪が降る」と聞いた時にはびっくりしましたし、確かに岩手の方は今年は例年よりすごく多くなりました。だから動物のカンというか、自然の変化を読み解く予知能力というか、そのような何かがあるのだろうと考えた次第です。私たちのように便利な世の中で生活している人たちが失った何らかの能力があるのだろうかという気がしました。

実は縄文時代の遺跡を考えるにはそのような視点も大事ではないかと思っています。縄文時代というと学校で習ったことをイメージして、いつから始まりいつまで続いた時代と一括して考えがちで、どうもそうじゃない。縄文時代は今よりも自然と一体となって、自然に依存して自然と一緒に生きた時代であることは間違いない。そうなると同じ時代でも、場所によって微妙に自然が異なることから、居住した場所によってもその内容は違う。私たちが考えている以上にその内容は複雑だったと考えられます。

もちろん共通することはありますが、それぞれの地域でどのような生活が行われていたのかということを中心に理解することが大事だと思います。

最初に余計なことをお話しましたが、私たちが現在生きている社会の感覚で縄文時代を考えたらだめではないかと思っています。今の家族制度とか生活の形態を基準にして、古い時代のことを考えがちですが、きちんとその時代の背景を把握して考えないと的外れなことになるのではと思っています。

<北海道と岩手県の結びつき>

さきほど道立埋蔵文化財センターの企画展示を見学させていただきました。北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産のうちストーンサークルをテーマにした展示で大変興味深かった。世界遺産に関する展示であるような展示は見たことがない。皆さんは当然ご覧になっていると思いますが、各遺跡の特徴が手に取るようにわかるし、いろいろ手を変え品を変え、遺跡群全体のことを説明しています。このような展示であれば、小さな子供さんから小学生、中学生などにも理解してもらえらると思います。

縄文の展示というと、難しく、堅苦しい内容を考えがちですが、決してそうではない。大事な点をコンパクトにわかりやすく表現すれば、多くのことが見学した人に伝わるのではないかということを感じました。

<縄文時代とは>

縄文時代は1万5000年前から2300年前までの1万3000年以上続きました。そのように説明すると、縄文時代は、変化もなくてのんびんだらりと経過した時代だというようにイメージしがちですが、決してそんなことはありません。最近私たちのまわりでも、大地震があったり、大火災や大津波など、いろいろな自然災害がありました。縄文時代にもそのような災害は頻繁にあったと思います。今年17日は阪神淡路大震災から30年という節目の日で、マスコミでもいろいろな特集をやっていました。その10数年後には東日本大震災が起これ、私たちの住む岩手も大きく被災しました。去年は能登の大地震が発生していますし、だいたい十数年ごとに大きな災害が起きています。

縄文時代にも数えきれないほどの災害があった筈ですし、そのなかでも縄文人は生き抜いてきたと思います。生き抜いてきたからこそ今の私たちに繋がっているのです。災害を乗り切ることには大変なことですが、日本列島で生きていくにはそれは逃れられないことでもあります。ところがそのような災害の記憶は災害が治まると忘れてしまう。そして平穏になるとその日々がそのまま続くと考えてしまう。そのようなことの繰り返しだったのかも知れません。

<縄文人の暮らしを支えた自然>

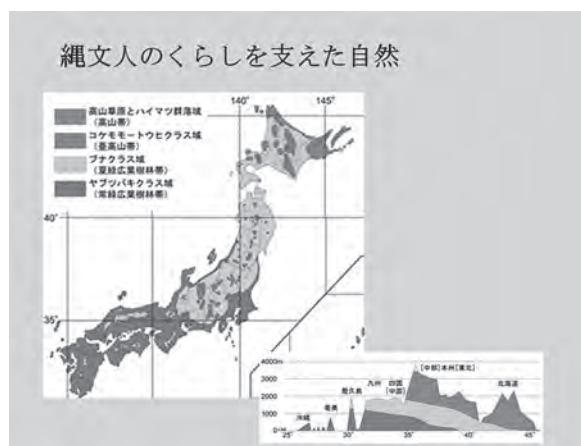
図3は日本列島の現在の植生図ですが、縄文時



▲図2 縄文時代とは

代もそれほど大きくは変わっていないと思います。もともと縄文時代は狩猟採集社会ということで、山野の多くの植物を利用し生活していたと考えられています。利用できる植物が多ければ多いほど人も集まり栄えたと考えられます。この植生図で明らかなように日本列島は、ほぼ中央の岐阜県周辺を境にして東と西で植生が大きく異なります。

岐阜県あたりから北海道にかけての東日本は、ブナ林を中心とした落葉広葉樹林が多く分布しています。このようなところは、食物も豊富で、人間と動物が住みやすい場所となっています。縄文時代の中心地はこの東日本だったのです。この東日本には山もあれば平野もありますが、これを日本列島の断面図にしたのが下の図です。北緯35度から40度、45度までが、落葉広葉樹林の範囲になります。落葉広葉樹は秋になると葉っぱが落ちて、春になるとまた新しい芽が出てきます。そしてそれを繰り返す。そのように1年間で変化を



▲図3 縄文人の暮らしを支えた自然

する植物ですが、そういう地域のほうがすごく暮らしやすい。

長野県では、だいたい高さが1000メートル以上のところ、中部高地と呼ばれていますが、そのようなところに縄文の遺跡が多い。私たちの地域のように身近に遺跡が多いというわけではなく、ほとんどが高いところにあります。それが、だんだん北にいくと寒くなることもあって、そのような山の上でなくても同じような植物が生えている。中部高地のような高いところでも私たちの地域では、日常生活の近くに落葉広葉樹林が分布しています。それが北緯40度周辺から北の地域なのです。

<都道府県ごとの縄文時代の遺跡数>

図4は文化庁が5～6年前に作成したのですが、都道府県ごとの縄文時代の遺跡数をグラフで表したものです。左側が北、右側が南に相当します。このように全国の都道府県で比較してみると、やはり北の方に縄文遺跡は多くなっています。

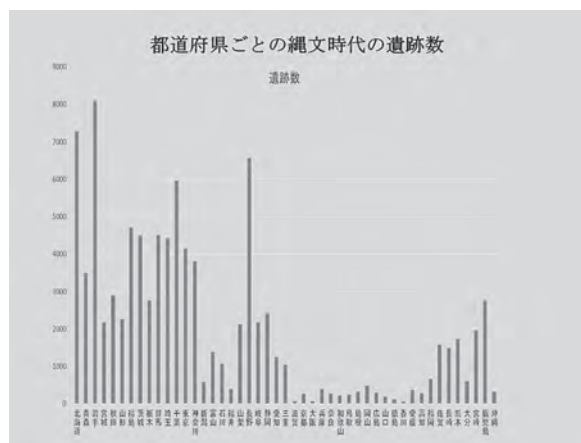
次に多いのが関東地方、つまり東京とその周辺、次いで長野や山梨周辺、このような遺跡数の分布から縄文の人たちがどこに多く住んでいるかということが理解できると思いますが、北の方に多い。その中で一番多いのが実は私の住んでいる岩手県、次は北海道です。

ただし、これはそれぞれの都道府県の面積をもとにした比較ではないので、実は問題があります。岩手県も広いが、北海道はもっと広い。

もうひとつは、現在の遺跡は全部確認されているわけではないということです。まだ確認されていない遺跡が多いのではないかとということです。例えば平地の畑などでは、遺跡は見つけやすいですが、山の上では何らかの痕跡がないかぎりほとんど見つけるのは困難です。また開発が進んでいるところは遺跡数が多くなっています。

北海道も東北も山が多いことからまだ見つかっていない遺跡が多い可能性があります。だからこの数は確定したのではなく、北の方に遺跡は多くなるという程度くらいに考えていただければと思います。

でも、日本の遺跡のなかで北海道も東北もこれだけ多いということも知られていません。縄文の遺跡に関しては北の方が圧倒的に多いです。縄文時代の東日本と西日本で比べると遺跡の広がりや数はだいたい40対1ぐらいなどと、昔は言われていましたが、たぶんそれ以上になると思いま



▲図4 都道府県ごとの縄文時代の遺跡数

す。圧倒的に北の方が多いです。

ではその中で、先ほどもお話したように、縄文時代にもいろいろな災害がありました。その一つを最初に紹介したいと思います。

<十和田火山の大噴火>

図5は十和田湖です。厳密に言えば青森と秋田の境にありますが、青森県・秋田県・岩手県の3県のほぼ真ん中に位置しています。

十和田湖は元々火山でした。火山が爆発した後に周りの水が溜まってできた湖、カルデラ湖です。十和田火山は20万年位前から活発に活動していましたが、おおよそ3万年前ころから、日本列島に人が住み始めたころからも6、7回ぐらい大きな爆発をしています。その中のひとつが、今から5900年前、縄文時代前期の始めに大爆発をしています。有史以降おそらく日本列島のなかで最大の火山の爆発だろうといわれています。おそらくこの爆発は、朝鮮半島にいた人にも伝わったほどの大規模な爆発だったといわれています。爆発により、火砕流が周辺に流れたり、大量の火山灰が降下します。

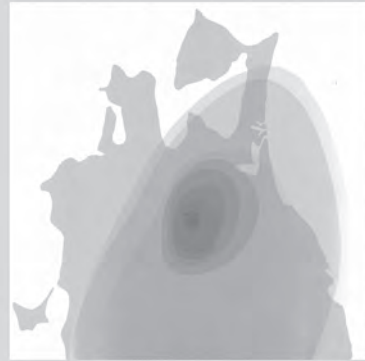
図6は、十和田火山灰が降下した範囲です。青森県、秋田県、岩手県に火山灰が降っています。今でも畑を掘ったりすると火山灰が確認できます。普通火山が爆発するとすごい災害となり人がいなくなるし、焼け野原になってしまいます。ところが時代別に遺跡をチェックしてみたところ、意外なことがわかってきました。

図7のように十和田火山が爆発する前の遺跡は左のような分布でした。もちろん海岸沿いや大きな川沿いに遺跡が点々としていました。それが、十和田火山が爆発して以降、なぜか遺跡がどーん

と増えています。どのようなところに位置するのか調べてみると、多いのはやはり海岸沿いです。それと大きな川沿いです。秋田県には米代川という日本海に注ぐ大きな川があります。このような川沿いに増える理由のひとつは水が豊富であることと食べ物の種類が多いということだと思います。そのようなエリアに遺跡が格段に増えてきます。

なぜ火山が爆発したのに人が増えるのでしょうか。もちろん火山が爆発して、いきなり増えてきたというのではなく、少なくとも50～100年以上経過してからのことだと思いますが、これに面白い説を唱えている人がいます。東京大学名誉教授の辻誠一郎先生です。火山が爆発すると大半の樹木も倒れ、燃えてしまうことから見晴らしが良くなります。見晴らしがよくなるとお陽様がまんべんなく当たるようになります。森ではなくて大平原になってしまうので新しく生えた樹木にお陽様が好きな木がどんどん増えたのではないかと、それがクリだったのです。縄文時代の遺跡でよく出てくるのがクリの木です。縄文時代の焼けた家などを調査すると圧倒的に多いのがクリです。家を建てる時縄文人は7～8割くらいクリを使っています。なぜクリの木を使うのでしょうか。クリは実も多く採れるので重宝されたのではといわれていますが、もうひとつ重要な点は、クリにはタンニンという成分が入っているため土のなかでもなかなか腐りません。もし機会がありましたらクリの木を水にそのまま漬けてみてください。まもなく水は真っ黒になります。それだけクリにはタンニンが多く入っています。縄文時代の住居は基本的には竪穴住居で、土を掘ってそのなかに柱を

十和田火山の噴火（5900年前）と火山灰



▲図6 十和田火山の噴火（5900年前）と火山灰

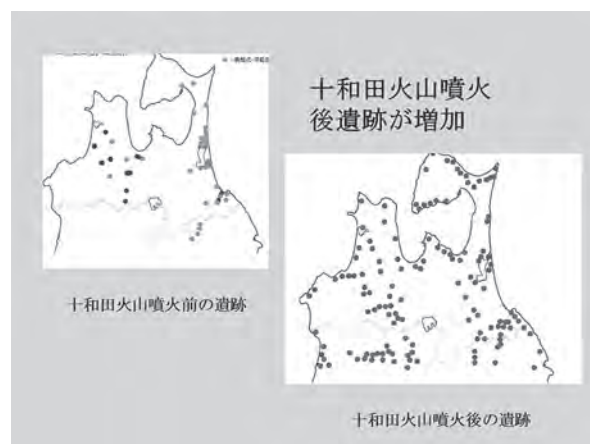
たてます。普通木は土に接するとすぐ腐ってしまいます。ところがクリはなかなか腐りません。もちろん縄文の人たちはそういう特質もわかっていたと思います。だからクリを徹底して使うのです。

暖かくなったらクリの実がなっている木を見てもらいたいと思います。お陽様が当たる方向に実をいっぱいつけています。そして、クリ林の中はあまりついていません。秋になると実やイガグリの落ちた場所を見てください。お陽様が当たる方向に極端に多く落ちています。もともとクリの木は、あっちに曲がったりこっちに曲がったりしていますが、これはお陽さまが照らす方向に枝がどんどん伸びていくからです。それだけクリはお陽様が大好きなのです。

家を作る時にクリの木をたくさん使っていますが、クリの木の枝はそのままでは曲がった節だらけの木が多いです。方向もバラバラで、まっすぐ伸びない材が多いので、住居の建築材としては使えません。クリはたくさん実をつけるし、建築材



▲図5 十和田湖



▲図7 十和田火山噴火後遺跡が増加

としても長持ちするので、広く利用されていますが、実を採るクリ木と建築材として使うクリは全然違う木なのです。それぞれの用途によって育て方が全く異なるからです。

実を採るクリは、できるだけ陽当たりの良い開放的な場所が良く、そのような場所では実が沢山採れます。それに対して建築材は森の中で周辺に同じような木が競って上に伸びやすい場所が適していますし、なおかつ真っすぐで節のない木を育てるには小さい時からその都度枝打ちをしなければいけません。そのようにして育てられた木はほとんど実をつけません。

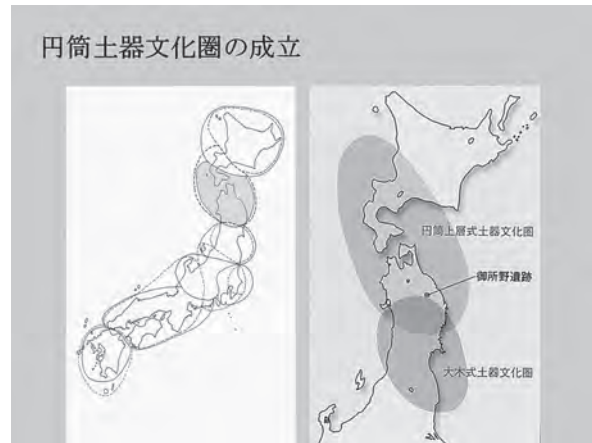
だから火山が爆発して大平原が広がると最初に出てくるのはクリで、それがどんどん伸びて大きくなり火山灰降下後の植物のなかでクリが圧倒的に多くなったのではないのでしょうか。クリは実をたくさんつけ、貴重な食料になるので、それを目指して各地からいろいろな人たちが集まってきたのではないかという説です。

<円筒土器の出現>

その中でバケツみたいな形の土器が作られます。円い筒みたいな土器だということで、円筒土器という名前がつけられました(図8)。円筒土器は、東北だけではなくて北海道でも出てきます。不思議ですが、津軽海峡を越えた対岸の北海道でもこの時期には同じ土器が作られます。北海道の南部、渡島半島から東北の北東北3県、さらにそれだけに収まらなくて、特に日本海側の北陸の方までずっと伸びていきます。こういう土器がたくさん作られる時代の文化と地域を「円筒土器文化圏」といいます。



▲図8 円筒土器の出現



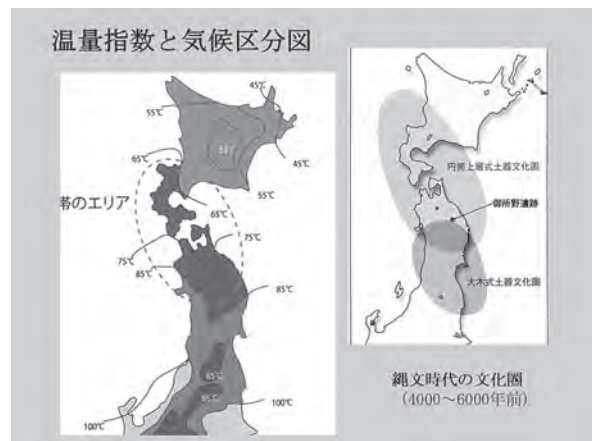
▲図9 円筒土器文化圏の成立

<円筒土器文化圏の成立>

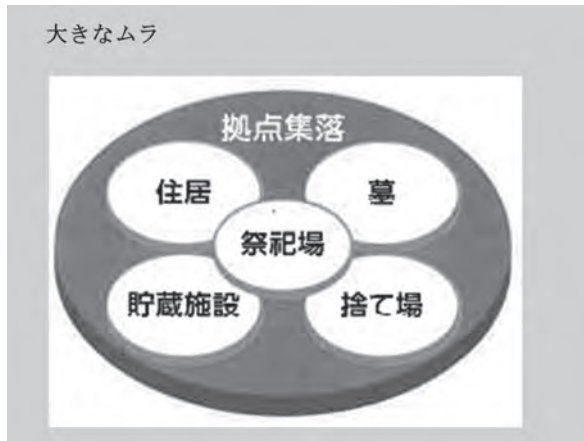
その範囲が図9のようになります。そのころ縄文時代の文化圏は5つか6つくらいわかれています。そのうちのひとつがここに 있습니다。しかもその真ん中に、皆さんがよく知っている津軽海峡があります。津軽海峡をあいだに東北と北海道が交流がさかんになり、同じ文化圏が作られています。このことが、東北の歴史とか北海道の歴史を考えるうえで一番大きなことではないかと思っています。たまたま東北・北海道が一体となって世界遺産になったというのは実はそういう背景があったのです。

<温量指数と気候分布図>

最初に紹介した日本列島の植生図の落葉広葉樹のなかをさらに温湿度などから細かく分析するという試みもされていますが、逆にこの地域はほとんど同じです(図10)。北東北と北海道、みなさんのところと私のところはほとんど同じ環境にな



▲図10 温量指数と気候分布図



▲図11 大きなムラ

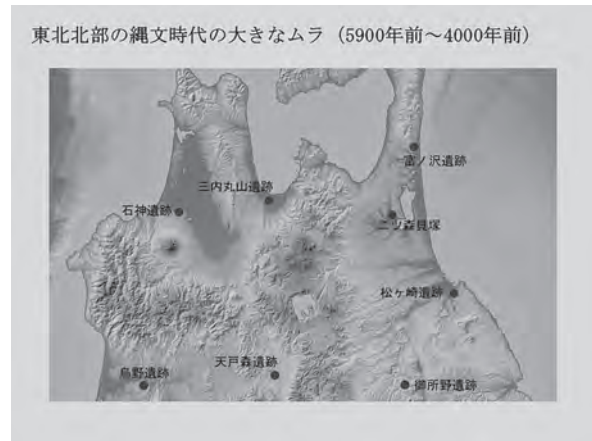
ります。だから同じような土器も作られているのです。やはり自然と一体となって、あるいは自然のなかで生きてきた縄文人だから自然に対する制約というか自然を活かす方法が同じような形、パターンがあるためこういうことになると思います。同じような形でこういう大きな文化圏が作られていった。そういう文化圏のなかで、今度はどんどん遺跡が増えていき、その後大きな遺跡とそれほど大きくない遺跡が出てきます。

<大きなムラ>

世界遺産の資料では、拠点集落と書いていますが、大きな集落、大きなムラと考えれば良いです。大きなムラがあって、その周りに小さなムラがいくつもあるということです。数軒しかなかったムラがどんどんまとまって大きなムラになります。そうすると、住居だけではなくて、祭祀場であるマツリをする場、それから墓もムラの中に作られました。それから物を貯蔵する施設、あるいは捨てる場所、そういうものもあると説明しています(図11)。道立埋蔵文化財センターの企画展示では、このようなことを模型で表現しています。すばらしい模型で、各時代毎のうつりかわりを一つ一つ表現しています。

<東北部の縄文時代の大きなムラ>

今の段階で見つかった大きなムラにはこういう遺跡があり、そのひとつが皆さんご存じの青森県の三内丸山遺跡です。円筒土器という大きな文化圏の中で、いくつかある遺跡の中で中心となった拠点集落です。私どもの御所野遺跡もその一つですが、このような大きな遺跡が北海道だけでなく各地の遺跡でこのような大きなムラのあちらち



▲図12 東北部の縄文時代の大きなムラ (5900年前～4000年前)

らに出てきます(図12)。

今までお話したように、十和田火山が爆発してしばらく経ってから、どんどん人が集まってきて、その中に今度は大きな遺跡ができてきました。

ここでは大きな遺跡の中のひとつとして御所野遺跡のことを説明します。遺跡も、最初からいきなり大きな遺跡が出てくるのではなく、実は集落は徐々に変化していくのです。

<御所野遺跡の縄文ムラの移り変わり>

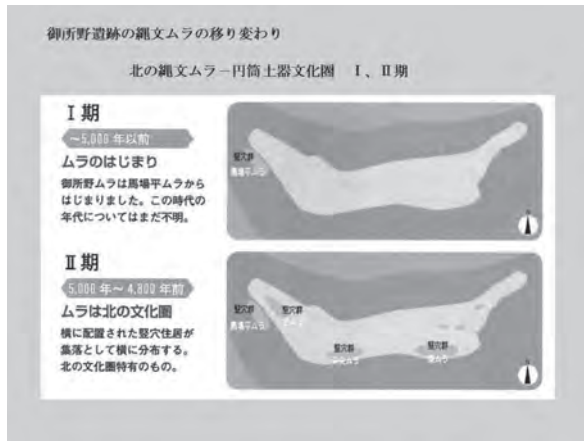
御所野遺跡をIからVまで5段階に分けていません(図13～15)。

最初は御所野遺跡より一段低い段丘面にある馬場平遺跡に集落がつくられます。馬場平遺跡の時期は、大きな輪をつくらず、横に連なるといふか、一か所にまとまってムラがつくられています。縄文時代のムラはほかの地域でもにもいろいろつくられています、大きいムラになると大きい円の環状集落となります。ところが北の人たちは環状にはつくらない。土器も単純だけれども、ムラも細長いムラをつくります。

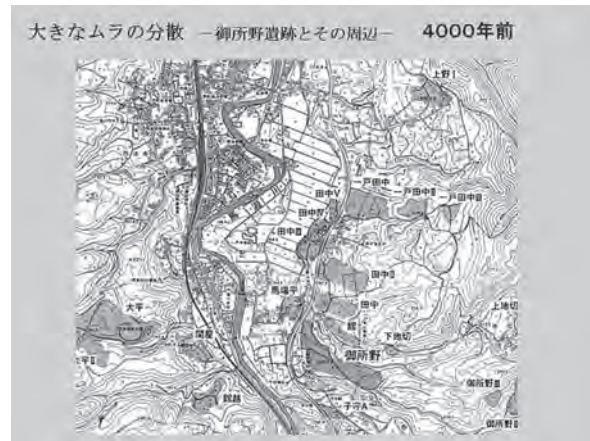
円筒土器の時代には崖下の馬場平に集落があります。

次の段階になると、馬場平遺跡だけでなく一段高い御所野遺跡にも集落がつくられます。この時期には北のムラ、道南など津軽海峡の北や南など、北の円筒土器文化圏と同じようなムラがつくられます。

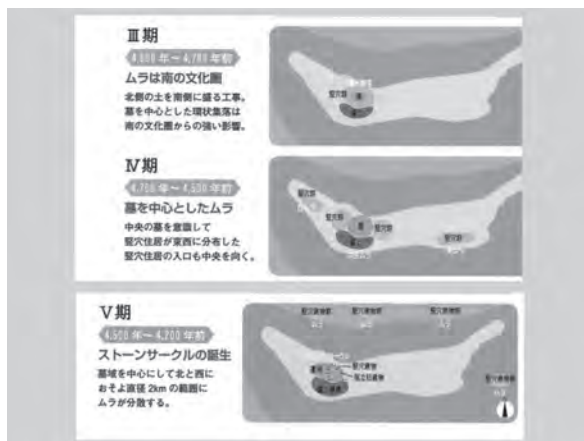
ところが、その後縄文時代中期中頃になるとムラの形が大きく変わります。私たちのところより南の盛岡とか仙台、さらには福島など、より南の文化圏を大木式土器文化圏と呼んでいますが、その影響を大きく受けることとなります。宮城県の



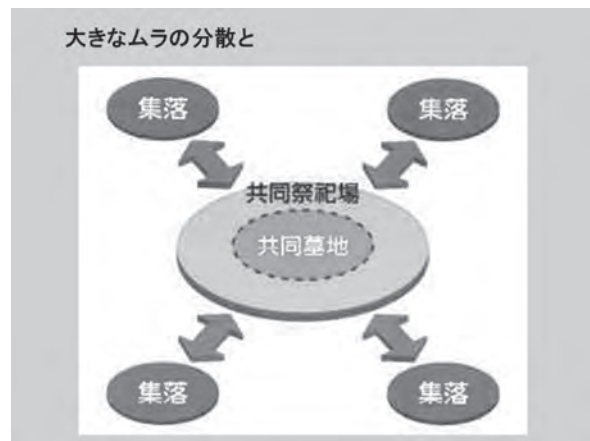
▲図13 北の縄文ムラー円筒土器文化圏 (I、II期) -



▲図15 大きなムラの分散



▲図14 北の縄文ムラー (III、IV、V期) -



▲図16 大きなムラの分散と

七ヶ浜町というところに大木囲貝塚という大きな貝塚があり、そこから出た土器を標識として大木式土器といいます。大木式土器は、おおよそ岩手県南部から宮城県、福島県などから出土しますが、この時期になると御所野遺跡でもその影響を強く受けた土器がつくられるようになります。そうするとムラの形も変わり、丸い環状集落となります。環状の集落の中央には墓がつくられ、墓を中心としたムラがスタートします。このようにムラは墓を中心としてつくられますが、それぞれの建物は北の伝統である横に細長く並ぶようにつくられます。つまり北と南のそれぞれの特徴を取り込んだ、北と南の文化が融合したようなムラがつくられます。このように土器とムラの形が大きく変わることから、もしかしたら南から多くの人々が来ているのではないかと考える考古学者もいます。このような変化は御所野遺跡だけでなく、北海道南部から青森、秋田を含めた地域も一緒に変わっていきます。

次の段階になると大きくなったムラが少しずつ分散し、居住地と墓が分離していきます。このような現象は北海道の南部から北東北地域全体でおこります。

＜大きなムラの分散—御所野遺跡とその周辺—＞

具体的なことは御所野遺跡の例で説明できます。大きなムラを分割するように、ひとつひとつが小さなムラとなって分散します。そのような動きが今から4000年ぐらい前にはじまります。それまでは御所野遺跡以外には近くにはムラはありませんでしたが、御所野の墓を中心として、その周辺にいくつも小さなムラがつけられるようになります。おそらくいつもは小さなムラに住み、何か特別なことがあった時には御所野に集まる、というようなシステムができたのだと思います。つまり、居住地とは別な特別な時に集う共通の場所があるということは、それぞれに関わる人たちのつながりができていたと考えることができます(図16)。

このように大きなムラに集うことで膨張してきたムラが、人々の交流による絆ができることで、分散居住へと社会が大きく変わっていったと思われれます。このような変化は縄文時代全体にとっても大きな変化であったし、変革の時期でした。

<集落の分散とストーンサークルの出現>

ムラの分散に伴ってつくられるようになったのがストーンサークルです。ストーンサークルとはさまざまに組んだ組石を環状に配置したもので、環状配石とか環状列石と呼ばれます。多くは共同墓地と考えられ、それぞれの墓の集合体として環状につくられる場合が多いです。

なぜ共同墓地に石が使われるようになったのか、についてはいろいろな考え方がありますが、ムラが分散し、集落と墓が離れることにより、墓の位置を示す示標が必要になったと私は考えています。

遺跡についての考え方はいろいろあります。数千年前の話なので断定できないことも多くあります。そのことを有名な建築家である藤森照信さんという方、木の上に家を建てたりするとか奇抜な家を建てる建築家として有名ですが、ある雑誌に書いていました。「考古学者は一人一説、それぞれがみんな独自の説を持っている」と。確かにそんな側面もあります。いずれ石を使ったこのような巨大な施設は縄文時代中期の一番最後の段階で、ムラの分散にともない新たに出現してきました(図17)。現在のところその最も古い遺跡が岩手県の御所野遺跡です。御所野遺跡の発掘調査ではそのことが具体的に裏付けられています。



▲図17 集落の分散と環状列石の出現

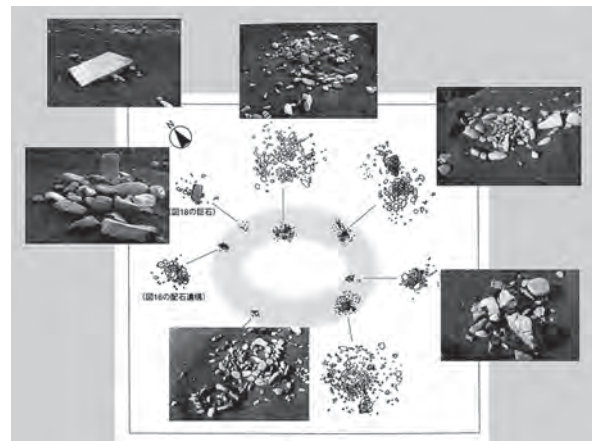
<御所野遺跡の配石遺構>

御所野遺跡の中央にある配石遺構は、全体が環状ですが、ひとつひとつの配石遺構は多様です(図18・19)。ひとつは左上のように扁平な大きな石が使われています。長さ1m20cmくらいですが、あるいはこの石は立っていたのかも知れません。この石は分析の結果、御所野遺跡の対岸の山、茂谷山(もやのやま)の石だということが明らかになっています。茂谷山は山全体が花崗岩できており、いたるところにこのような大きな石がゴロゴロしています。このような石を馬淵川という大きな川を越えて運んできたようです。

ところで「もやのやま」とよばれる同じような山は、ここだけではなく、岩手・秋田・青森の北東北3県の各地にあるし、北海道でも同じような山があり、「もいわやま」と呼ばれています。

<中期の拠点集落と後・晩期の大規模環状列石>

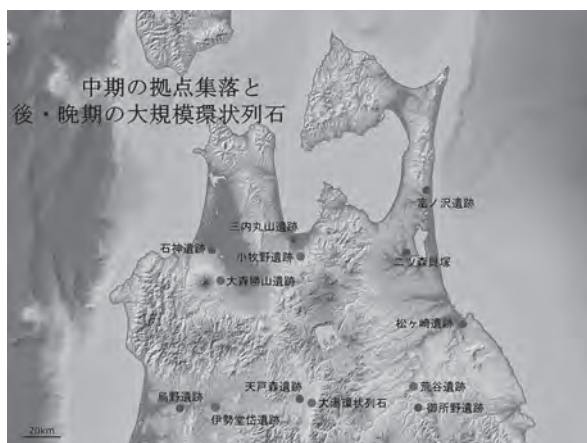
縄文人にとって山は神聖な場所でした。あるいは



▲図18 御所野遺跡の配石



▲図19 御所野遺跡の配石



▲図20 中期の拠点集落と後・晩期の大規模環状列石

はそこにある石を神聖なものと考えていたのかも知れません。そのような神聖な石をわざわざ運んできて墓標としたようです。

ところで、ここでいかに大きなムラがいろんなところまでできてきたと話しましたが、このような大きなムラの近くに大規模な環状列石がつくられていることが多いようです。例えば、三内丸山遺跡の近くには小牧野遺跡、秋田県の日野森遺跡という中期の遺跡の近くには大湯環状列石というように… (図20)。

<環状列石 (岩手県二戸市荒谷遺跡) >

御所野遺跡の近くで、隣の二戸市にあったのが荒谷 (あらかや) 遺跡です。ここでは大きな石を環状に並べた環状列石が出てきました (図21)。その中に人骨の入った甕棺という土器が出土しました。骨は当時札幌医大の先生に分析してもらったところ、女性の人骨だということがわかりました。



▲図21 環状列石 (岩手県二戸市荒谷遺跡)



▲図22 大湯環状列石(秋田県鹿角市)

<大湯環状列石 (秋田県鹿角市) >

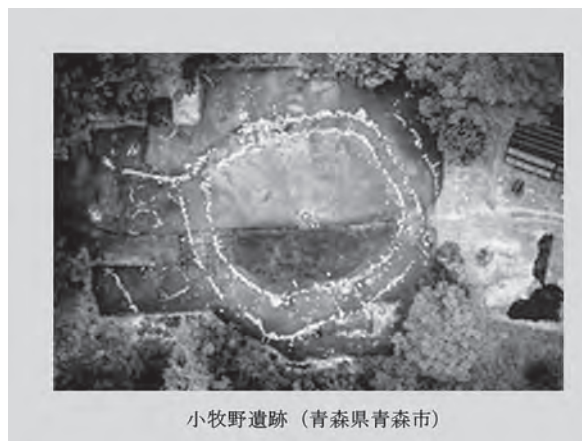
皆さんよくご存じの秋田県鹿角市の大湯環状列石で、発掘調査によってこの下に墓があることがわかっています (図22)。

<小牧野遺跡 (青森県青森市) >

青森県青森市の小牧野遺跡。三内丸山遺跡の南の高台にある遺跡です (図23)。三内丸山遺跡とともに小牧野遺跡もぜひ見学してみてください。遺跡はきちんと整備されており、遺跡の下に展示館があります。展示もいろいろ工夫されており、楽しい資料館となっています。

<大森勝山遺跡 (青森県弘前市) >

津軽平野にある岩木山、津軽の人たちの象徴的な山ですが、その麓に作られたのが大森勝山遺跡です。縄文時代晩期というもっとも新しい時代のストーンサークルですが、ここでは墓は確認されませんでした。ストーンサークルと岩木山との間



▲図23 小牧野遺跡 (青森県青森市)



▲図24 大森勝山遺跡（青森県弘前市）

には直径13mの大きな建物跡が1棟だけ見つかりました（図24）。

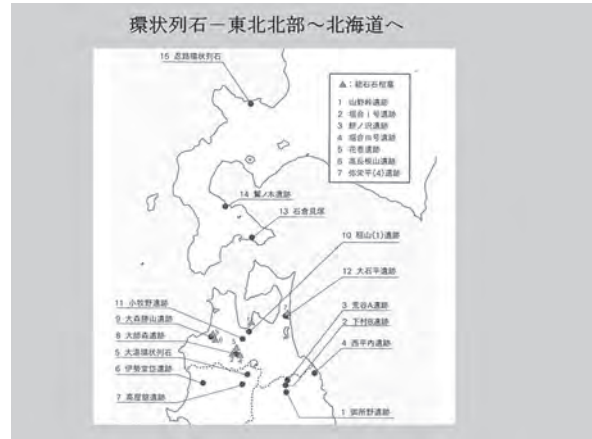
遺跡は昭和30年代に国営の畑作事業という開発にともなって発見されましたが、当時日本一大きな縄文時代の竪穴住居ということで有名になり、つくば万博の日本の古い文化を紹介するコーナーで復元されています。

< 鷺ノ木遺跡（北海道森町） >

東北地方にはいろんな環状列石がいくつも発見されていますが、北海道にもあります。冒頭で紹介した森町の鷺ノ木遺跡です（図25）。残念ながら世界遺産からは外れましたが、その下に高速道路が走っています。それはそれですごい価値があるのです。遺跡を保存するために高速道路の計画を変更し、遺跡の下にトンネルを通して、莫大なお金をかけてその遺跡を残しました。遺跡を保存するという観点から見てもすごい遺跡なのです。



▲図25 鷺ノ木遺跡（北海道森町）



▲図26 環状列石—東北部～北海道へ

< 環状列石—東北部～北海道へ >

私の考えでは、御所野遺跡から始まったストーンサークルが、このような形で北東北から北海道の小樽市の忍路環状列石までずっと続いてきました。時代的には縄文時代後期から晩期まで連続しており、これは環状列石という独特な遺構をもとにしたひとつの大きな文化圏を形成しているといっても過言ではないと思います（図26）。

縄文時代前期から中期にかけてしだいに大きなムラがつかれますが、その後ムラは分割して分散をはじめます。それに伴って独立した墓がつけられ、石を使った環状配石遺構となり、しだいに北东北部から北海道南部まで伝わります。このような移り変わりを道立埋蔵文化財センターの企画展示で展示しています。

< 北海道・北東北の縄文遺跡群 >

環状配石遺構でみきたように北海道・北東北地域は、それ以外の時代でも同じく共通すること



▲図27 北海道・北東北の縄文遺跡群



▲図28 津軽海峡を越えた文化圏

が多いことから津軽海峡を越えて何千年もの長い間相互に交流し、同じ文化圏を形成してきました。しかも詳細に調べてみると、個々の遺跡のつながりもあり、時代を越えて受け継がれており、その変遷もたどれます。そういう意味で北海道・北東北の縄文遺跡群は、日本にある今までの世界遺産以上に日本が世界に誇る遺跡群であると思っています。北海道・北東北はこのような場所だということを自信を持っていただきたいと思えます（図27）。

<津軽海峡を越えた文化圏>

津軽海峡を越えた北海道と北東北の交流を示す証拠の土器が兩岸の岩手県と北海道から出土しています。いずれも注ぎ口のついた土器ですが、中央の2点が岩手県の二戸市と軽米町からの出土品、両側のうち左側は千歳市のキウス4遺跡、右側は八雲町の野田生1遺跡から出土しています（図28）。土器の形も文様もほぼ同じですし、こ

のような土器は頻繁に交流していないとできないと考えます。この時期は北東北と北海道は一体だったのかも知れません。

<内陸の大河川沿いの縄文ムラ 御所野遺跡>

最後に、御所野遺跡について説明します。

御所野縄文博物館は、博物館の屋根も土屋根にしているため草が生えています。近くに東西の谷があり、対岸の駐車場から吊り橋を渡って博物館に入ります。もともと山に囲まれた山だけの場所ですが、この山の中にあるということで豊かな食糧が得られます。川があり、山の多いという自然に囲まれた場所だからこそこに縄文人が住んだと思っただいて良いでしょう（図29）。

先ほど御所野遺跡のⅠ期からⅤ期までの移り変わりを紹介しましたが、簡単に集約するとこのようになります。

遺跡の中央に墓があります。墓の南側はあらかじめ大きな土木工事をしており、北側を大きく削って、その土を南側に高く持っています。このような土木工事は少なくとも大きく2回行われており、北側の削られた場所には墓がつくられています。土が高く盛られた南側では祭祀的なまつりでも行われたのか、火を焚いた場所がいくつも見つかっています。そのほか砕かれた動物の骨や、そのままのかたちで炭になったクルミとかクリ、トチがたくさん出てきます。

この中央部の両側が居住地、このような場所に竪穴住居をつくり住んでいました。このように御所野ムラは墓を中心としてその周辺に居住地のある東西に長いムラでした（図30）。



▲図29 内陸の大河川沿いの縄文ムラ 御所野遺跡



▲図30 御所野遺跡



▲図31 縄文ムラの四季

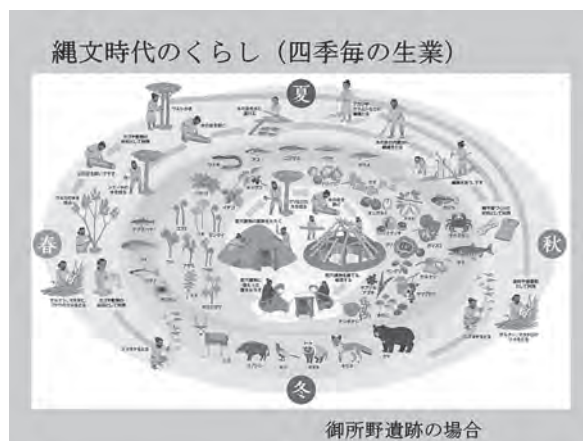
<縄文ムラの四季>

縄文人にとって春夏秋冬という四季が最も重要です。縄文時代になぜ北東北・北海道が栄えたかといいますと、四季の区別がはっきりしていたからです。春になると雪が融け、木々は一斉に芽吹いて花が咲きます。夏になると蒸し暑くなるが、この暑さを好む生き物が生き生きと活動します。秋になると落葉するとともにキノコが出たり、多くの木の実が採れます。この四季の変化が激しく、はっきりしていることが動物や人間が生活をする上で最も条件がよかったのです。冬になれば雪も降るので北は嫌だといって沖縄へ移住した友人がいましたが、沖縄に移住後「沖縄には四季がないんだ」とぼやいていましたが、当然のことです。私たちが大変だと思っていた四季の変化は実は縄文人にとっては大事な宝だったのです（図31）。

<縄文時代の暮らし（四季毎の生業）>

御所野遺跡ではこのようなカレンダーを作っています。これは適当に作ったのではなく、御所野遺跡からの出土遺物を中心として、確認できたものは形であらわし、わからないことは推定として表現しています。あくまでも遺跡の発掘調査で出土したものを中心として、今の段階でわかっていることを中心として、春夏秋冬のそれぞれの暮らしぶりを表現しています。発掘調査などで新しいものが出てきたら順次内容を変えらるということ、カレンダーは当初から内容を変更することを前提としています（図32）。

これは御所野遺跡のカレンダーですが、実はほかの遺跡についても独自のカレンダーができる筈です。伊達市の北黄金貝塚でも良いですし、函館市の大船遺跡でも良いのです。いろんな縄文遺跡



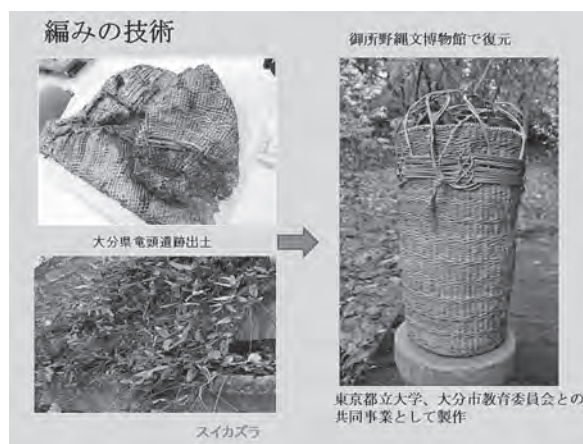
▲図32 縄文時代の暮らし（四季毎の生業）

でそれぞれのカレンダーを作れば良い。それぞれのカレンダーを通して遺跡が説明できるのです。

<編みの技術>

発掘調査で明らかになった縄文時代の内容についていくつか紹介します。ひとつは編み物です。これは大分県の遺跡から出てきたツルで作った編み物です。一戸には鳥越（とりごえ）という竹細工の産地があり、職人さんもいるので、東京都立大学と大分市教育委員会と御所野縄文博物館と共同で復元することにしました（図33）。

大分ではツヅラフジというツルがたくさん採れます。御所野ではツヅラフジがないので、スイカズラという、崖にぶらさがっている蔓で作ったところ、驚くようなことがありました。植物のツルは毎年1年物から2年物、3年物というように少しずつ太くなっていきます。編み物は秋に収穫したドングリを虫殺しのための一時的な水漬け用の大きなカゴですが、あまり負荷がかからないとこ



▲図33 編みの技術

ろに1年物、それをつなぐところに2年物、そして水からの引き上げ時に最も負荷のかかる部分には3年物の蔓を使っていたのです。

大分県などの西日本は、東北や北海道とちがって堅果類が、クリやトチではなく、イチイガシなどのドングリを利用する地域です。九州・中国・四国地方から朝鮮半島までが同じドングリの世界なのです。ドングリは収穫したらまず水に漬けて虫殺しをします。そのためにドングリを入れる大きなカゴが必要だったのです。遺跡のなかにはこのようなドングリを入れたカゴが土をかぶりそのまま出土する場合があります。

<縄文ウルシ>

ご存じだと思いますが、ウルシが出土した遺跡としては、函館市垣ノ島B遺跡が今のところ日本でもっとも古い。日本で一番古いということは、世界でも一番古いことになり、最も古いウルシ製品の出土例となります(図34)。出土品は土每切り取って、室内で徹底的に調べていたところ、ご存じのように作業施設が火事になり、燃えて無くなってしまいました。世界一古いウルシ製品が、火事になって無くなってしまったのです。それで焼失した漆製品をそれまでの調査成果を踏まえて内容を再確認しようということになりプロジェクトチームを作ることになりました。御所野遺跡にも声がかかり、植物繊維での木地づくりを担当することになったのです。

<世界最古の漆製品の復元>

墓ですから、亡くなった人にこのような形でウルシの製品をつけていただろうと推定しました。肩とか腕とか、そういう場所から漆が検出されて

いたのです。普通編み物でも、木で加工したもので、加工してからその仕上げに漆を塗ります。ところがこの漆製品はそのような方法ではなく、糸の一本ずつに漆を塗っていたようです。漆を塗った糸を使って編んだものを肩などに着けたようです(図35)。

ところで、ウルシを使う意味はなんだったのでしょうか。なぜそのようなことをするのでしょうか。しかも亡くなった人に……。これは私の考えですが、縄文の人はウルシというものに、魔力のようなすごい力があると思っていたのではないのでしょうか。なぜかといえば漆はかぶれます。触っただけで全身がかぶれるし、弱い人などは漆の木の下を通っただけでかぶれてしまいます。何もしないのにかぶれてしまう。それでウルシにはすごい力があると考えたのではないかと思うのです。ウルシを使えばなんとかなる、その魔力を使えばなんとかなると思ったのでしょうか。墓でウルシを塗ったものを身に着けることでその人が生き返るとか、生き返らなくても何か特別な力を与えてくれるのではないか、そういうことからウルシを使いはじめたのではないかと私はひそかに思っています。

もうひとつは、アスファルトです。北海道でもアスファルトを使った遺物が多く出土しているし、またアスファルトが採取できる場所もあります。

アスファルトを採取できるのは、油田地帯である日本海側の秋田県や新潟県ですが、アスファルトが出土する遺跡も東北が圧倒的に多いです。固形のアスファルトがそのまま出土する場合があります。弓などに矢と柄を付けるときにアスファルトが使われます。なぜそのように使うのかなと思



▲図34 縄文ウルシ



▲図35 世界最古の漆製品の復元

うくらいアスファルトを使います。ひとつは矢の根と柄をくっける接着剤として使用されますが、紐で結わえただけでも十分使えます。なぜわざわざアスファルトを付けるのでしょうか。私は、アスファルトに魔力があるということで意図的に使っているのではないかと考えています。理由は、アスファルトはそのままでは使えず熱する必要があります。熱するとすごい煙やガスが出ます。それを吸い込むと具合が悪くなります。したがって「燃える土」とも呼ばれています。火を点けただけで、そこら辺にあった土が燃えるわけですから驚きです。だから漆と同じくアスファルトにもすごい魔力があると考えたのではないのでしょうか。それを塗ることによって力をもらう、弓矢などでもそれを接着することで大きな力が得られるというように考えたのではないのでしょうか。アスファルトは東北の南部までは使用されますが、関東の方に行くとはほとんど使われません。生産地から遠くなるからでしょうか。

いずれにしても北海道・北東北の縄文人にとってウルシとアスファルトは精神的な支えになっていたのではないかと私は考えています。

<土屋根住居>

私は縄文時代に茅葺き屋根はおそらくなかっただろうと考えています。縄文時代にはカヤが大量に出てくることもほとんどありませんが、弥生時代ごろからは焼けた家からは炭化したカヤがそのまま出てきます。古代の奈良、平安時代でも同じく炭化したカヤがたくさん出てきます。

ところが、その時代でさえも、実はカヤを直接葺いていません。あくまでも土屋根の下地としてカヤを使用しているのです。したがって出土する

カヤの方向は一定ではなく、縦横交互に載せてその上に土を被せています。つまり土屋根の下地としてカヤを使っています。北海道でもおそらく擦文時代でも建物を復元するときには、私は茅葺きはやめた方がいいと思っています。むしろ樹皮とか土だと考えます。カヤは使ってもいいけれどもあくまでも下地として使うべきです。

カヤを下地として使うのはカヤの持つ特性によります。カヤにはガラスが入っているからです。そのため、普通の草と違って腐らない。だからカヤを土の下地にします。それ以外のものは土をかぶせるとすぐ腐ってしまうのです。

御所野で建物を作る時の実験で、当初はクリの木のいろいろな枝材を使っているという想定で、小さな枝まで束ねてそれを下地としてその上に土を被せてみました。ある時は葉っぱも使ってみました。両者ともあつという間に腐ってしまいます。皮がついたまま土を被せるとすぐに腐り、2年後には全くなくなり土になっていました。

おそらく現在イメージするような茅葺きの竪穴建物は中世以後に普及したと考えています。城館の多くも樹皮や柵板等であった可能性が高いです。以上から当然縄文時代には茅葺き屋根はなかったと私は考えています(図36)。

<家を焼く>

縄文時代の遺跡や縄文時代以降の竪穴住居跡を調査すると焼けた家の跡が出てきます。特に北海道の南部から東北北部が最も多いようです。それぞれの事例を調べると、土屋根だということが良くわかります。調査の結果どうも間違っって火事を起こしたり、火の不始末で火事を起こした、とか、そういうことではないということもわかってきま



▲図36 土屋根住居



▲図37 家を焼く

した。土屋根は燃えない。当たり前ですが、いくら火を点けても燃えません。なぜかという、屋根に土がのっている限り、竪穴の中は酸欠状態になるからです。つまり意図的に家に火を点けても土屋根竪穴の場合は消えてしまいます。

アイヌの家では、火をつけて燃やしていたことがわかっています。この事例で一番新しい記録は大正時代のもがありますが、既に法律で禁止されていました。この場合はもちろん茅葺き、例えばこの家に住んでいた長が亡くなったら、その人をあの世に送るために家を焼くという考えのようです。やはり縄文の人たちもそういうことがあったのかも知れません(図37)。

<木の実を焼いて送る>

家も焼いて送る。そのほかにストーンサークルの近くではクリ、クルミ、トチノミ、それを盛り上げ火を点けて燃やしたようです。木の実はそのまま燃やすと灰になってしまいます。炭にするためには途中で土を被せなければなりません。遺跡からは木の実の形のまま炭化したものがいくつも出土しているのは、意図的に形を崩さないように燃やしたと思われる。形を崩さないということは、木の実のままに届けるという意図を感じます。つまり自然に送り返すということでしょうか。そういえばクリにしてもトチにしても木の実はいずれも生り年なというのがあって、収穫は必ずしも一定ではない。つまり次年度以降の収穫を祈るための儀礼を行った結果、形がのこったまま炭化した木の実を大量に残したのかも知れません(図38)。



▲図38 木の実を焼いて送る (クリ、クルミ、トチノミ)

<骨を焼いて送る>

もう一つ注目するところは動物の骨です。専門家に長い間調べてもらっていますが、圧倒的にイノシシとシカが多く出土しています。しかも、ただ単に骨を焼くだけではなく、骨を焼いた後、何かで細かく砕いているということがわかってきました。発掘すると土に混じった状態が出てきます。一か所にまとまっているのではなく、あちこちに分散して出てきます。これはおそらく細かく砕いてからばらまいていると思います(図39)。なぜそのようなことをするのでしょうか。これも、シカやイノシシは自然のものだからおそらく自然に返して、次にまた自分たちがこれらの食糧を授かるように、というような送りの儀式ではなかったかと考えています。墓の周辺と高い盛土では骨を焼いたと考えられる場所まで確認されています。ここにはやがて配石遺構がつくられ、東西に広がっていた竪穴住居跡などは御所野から周辺の遺跡へ分散するが、やがて御所野には分散した人々が集まって共同の祭祀を行う場へと変わっていくとともに、それまでと同じくその後も墓がつくられます。この儀礼の場と居住地の分離は、おそらく自然との関わりの中でどう生きるのかということ考えた末に、当時の縄文人たちが作った社会の新しい仕掛けだと思えます。

<日本人の自然観>

十和田火山の爆発以来、いろいろな要素が複雑に絡み合い、御所野では、集落の場と儀礼の場がまとまっていた段階から、集落と儀礼の場がわかる段階に至りました。縄文時代の社会が長く続いたのは、自然との関わりをその都度いろいろ変



▲図39 骨を焼いて送る

えながら継続させてきたためと考えられます。

社会を継続させるためには、前に生きた人たちのことを次の世代に伝えること、さらにそれをまた次の世代に伝えていく。それを長い間ずっと継続させてきたことにより、縄文人の独特な社会観が醸成されてきたのでしょう。その結果、環状列石などと祭祀儀礼の支配する特殊な社会が形成されたと思います。独特の自然観が生んだ世界でも稀な精神性の強い社会、それが縄文時代でした。その基本はあくまでも自然です。そして、それを受け継いできたのが我々日本人なのです。したがって当然のことながらその自然観は西洋人とは大きく異なる筈ですが、明治以降大きく変わってしまいました。縄文時代以来自然と調和して、長い間継続してきた文化を絶やさず、次の世代に伝えていく必要があります。そのためにも縄文人が遺跡に残した知見を再確認して私達の将来に生かしたいものです。

ご清聴ありがとうございました。

8. 企画展示要旨

北海道・北東北の縄文遺跡群 3－縄文遺跡群とストーン サークル もっともっと驚ノ 木遺跡－展

(1) 展示の目的

本企画展示の目的はIV章1節2項で上述したように「世界文化遺産に登録された北海道・北東北の縄文遺跡群の土地利用や集落の変遷、精神文化を体感的に展示し、世界遺産や縄文文化への関心を高め、より理解を深めること」とした。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」（以下、縄文遺跡群）は令和3年（2021年）7月にユネスコの世界遺産リストに登録された世界文化遺産である。世界遺産は、真実性、完全性、永続的な保全体制と共に「顕著な普遍的価値」（以下、OUV）を証明することで、ユネスコ世界遺産委員会での採択を経て登録されるが、登録後はその価値の普及を行うことが責務となる。

縄文遺跡群については、北海道世界文化遺産活用推進実行委員会が2024年にWeb公開した調査研究報告書「北海道における世界文化遺産のインタープリテーションに関する調査研究2」で、各構成資産におけるインタープリテーション（適切な伝達・解説、理解促進に関わる、媒体を含めたコミュニケーション全般）で、縄文遺跡群が持つ顕著な普遍的価値（以下、OUV）の解説内容と方法が確立されていない課題が指摘されている（北海道世界文化遺産活用推進実行委員会2024）。

また、縄文遺跡群の価値の伝達に当たっては、OUV（顕著な普遍的価値）、オーセンティシティ（真実性）、インティグリティ（完全性）、シリアル・プロパティ（ある関連性に基づいて複数の資産を一連のものとする遺産）など一般には馴染みが薄い世界遺産特有の用語が、理解を難しくしている印象がある。

こうした状況を踏まえ、本企画展示では「世界遺産とはなにか?」、「北海道・北東北の縄文遺跡群の価値とはなにか?」を、子供にも興味を持って理解して貰える様、分かりやすく伝えることを目標とし、ビジュアルを重視した体感的な展示を目指した。

また本展示をきっかけに縄文遺跡群の構成資産・関連資産への興味関心を高め、現地へのアクセスを促すことも目的とした。

(2) 展示概要

企画展示の全体概要については本章1節2項「企画展示」に記載のとおりだが、ここでは下記ア～オの項目について概要を記載する。

展示開催期間は12月7日（土）～2月22日（土）の60日間で、開催期間中の来場者数は1,460名であった。

ア. 展示の構成

本企画展では大きく2つのテーマを設けた。

テーマ1は、1-①世界遺産とはなにか?、1-②「北海道・北東北の縄文遺跡群」の価値、についての展示である。1-①では、世界遺産の定義、登録の条件、種類、OUVとはなにか、OUVの評価基準について解説した。1-②では、OUVの内容と適合する評価基準、OUVを構成する4つの属性、シリアル・プロパティで価値を物語ること、について解説した。

テーマ2では前半で、2-①ストーンサークル（環状列石）の定義、2-②北海道・北東北におけるストーンサークルの時代、2-③ストーンサークルの役割・機能、2-④ストーンサークルの種類、2-⑤造営集団の集落はどこにあるか、2-⑥天体との関係、2-⑦造営の労力、の項目について解説し、後半で北海道最大の環状列石が確認された2-⑧関連資産驚ノ木遺跡の様相、について詳しく紹介した。

対象は主に中学生以上とし、小学生以下にも要点が伝わる様に努めた。また分かりやすく記憶に残る展示を目指し、イラストやジオラマなどビジュアルによる伝達を多く取り入れた。



▲企画展示開催のようす

イ. 展示資料

展示資料個体数は83点（全て借用資料）であった。展示資料・写真資料の借用にあたっては、森町教育委員会、八雲町教育委員会の協力を得ることができた。主な資料として下記を展示した。全て縄文時代後期前葉の天津式期～ウサクマイC式期にかけての遺物である。

【森町 鷺ノ木遺跡】

- 環状列石埋設土器
- 竪穴墓内出土土器
- 竪穴墓内1号土坑出土土器
- 土坑出土土器
- 土製品（鐸形土製品、三角形土製品、土製玉）
- 石製品（円形岩板、三角形岩板、軽石製品）

【森町 鷺ノ木4遺跡】

- 配石遺構出土遺物（土器、三角形土製品、三脚石器）
- 斜面大型土坑墓出土遺物（土器、キノコ形土製品）
- 造成土出土遺物（土器、石器、鐸形土製品、軽石製品、三脚石器）
- 特殊器形の土器（皿・壺・浅鉢など）
- 土製品（匙形土製品）

【八雲町 コタン温泉遺跡、浜松5遺跡】

- 鐸形土製品

ウ. ジオラマ展示

ジオラマは、縄文遺跡群に関する下記3点のほか、鷺ノ木遺跡の環状列石（縮尺1/73）を作成した。縄文遺跡群のステージの変遷と内容、竪穴建物の様子を伝える3つのジオラマを設置したこ



▲ステージモデルジオラマとリアルスケール年表



▲パカッとひらく！竪穴建物

とで、縄文文化を楽しく、分かりやすく伝えることができる。

■ 定住の6ステージの集落モデル

昨年度の縄文遺跡群展2で作成した「定住の6ステージ」ジオラマを、今回の企画展でも活用した。本ジオラマは1万数千年間のなかで集落施設が充実し精神文化と共に発展・成熟していく様子を体感的に理解して貰うため、定住の6ステージの集落モデルを、立体的に作成したものである。ジオラマにはミニチュアの土器・石器・装身具・土製品・土偶などを忍ばせ、良く観察すると色々な気付きが得られ、楽しめる工夫を施している。

■ パカッとひらく！竪穴建物

昨年度の縄文遺跡群展2でジオラマ展示の目玉として作成した「パカッとひらく！竪穴建物」を、好評に付き本企画展でも展示した。

縄文遺跡群は「農耕開始以前の狩猟採集のくらしで実現した1万年以上に亘る定住の発展と成熟」が価値として評価されたが、その定住を支えた要素として竪穴建物が重要であるため、構造などを体感的に楽しく理解して貰う目的で製作したものである。竪穴建物が中央から左右に開いて内部構造を観察できるつくりで、見学者が自由に触れて動かし、間近で内部を見ることができる。ジオラマの詳細は令和5年度刊行の年報25のIV章8節1項に記載している。

■ 北海道・北東北の縄文遺跡群の世界

縄文遺跡群の、自然資源利用、土地利用、交流、くらしの様子を体感的に理解して貰う目的で、今回新たに作成したジオラマである。大きさは125×70cmで、外側にパネルの付属品がつく。北海道南西部から北東北地域の地形地図をベースと



▲ジオラマ「北海道・北東北の縄文遺跡群の世界」

し、森、動物、植物、石材、海流などの自然要素、構成資産のミニジオラマ、自然を利用して暮らす縄文の人びとや丸木舟を配置した。構成資産のミニジオラマは、OUVへの貢献内容に関わる資産の特徴を表現する様に作り込んだ。

配置しているものすべてが関係しあって縄文世界が作られている様子を表現しており、見れば見るほど気付きが得られる様、細部にまでこだわって製作した。

【ジオラマの配置物】

森の資源（植物：ブナ・ミズナラ・トチ、動物：シカ・イノシシ・クマ）

海の資源（暖流の魚類：カツオ・マグロ・ブリ、寒流の魚類等：サケ・ウニ・コンブ、鹹水の貝：カキ、ベンケイガイ、汽水の貝：シジミ、海獣：オットセイ・イルカ・トド・シャチ）

大地の資源（黒曜石、アオトラ石、赤鉄鉱、アスファルト）

縄文の人びと（イヌと狩りをする人、山菜を採取する人、堅果類を調理する人、銚猟をする人、ウニ・昆布漁をする人）

その他（丸木船で津軽海峡を渡るクリとイノシシ）

エ. 時代区分

昨年度からの継続的な取り組みとして、日本考古学で提唱された時代区分（縄文時代草創期・早期・前期・後期・晩期までの土器型式を基準とした6期区分）を用いず、世界遺産登録推薦書で提示された「集落展開及び精神文化に関する6つのステージ」（「定住の6ステージ」）で時期を表した。縄文時代の6期区分に馴染んだ見学者にとってはかえって分かりづらくなる懸念もあるが、「ステージ」の用語と、各ステージの環境・生業・集

落・精神文化を多くの方に理解して貰うことを目的としている。

オ. 配布物

北海道立埋蔵文化財センターで作成したワークシートと解説冊子、森町で作成した縄文文化の普及啓発本を配布した。

■ ワークシート

ワークシートは「選べるAコース・Bコース」の2種類を用意した。Aコースは「ストーンサークルシールラリー」で、縄文遺跡群の6つのストーンサークルのシールを、ジオラマ「北海道・北東北の縄文遺跡群の世界」を観察してあてはまる場所に貼る内容である。ストーンサークルの石組みには遺跡ごとの特徴があることに気付き、その内容や理由に興味を持つことをねらいとしている。Bコースは「しらべよう！縄文世界」で、6つのミッションを、展示を巡って調べクリアする内容である。ミッションは縄文遺跡群のOUVや自然環境、ストーンサークルの遺物に関わる内容で、展示資料の観察を促すねらいがある。両コースともクリアすることで、体験ひろば「縄文工房」でメニュー交換に利用できるポイントを受け取ることができる。

■ 展示解説冊子

展示解説冊子は、展示した文字・図・写真パネルの内容を取りまとめたもので、展示パネルでは字数制限のために割愛した内容などを加えたほか、引用参考文献、展示資料一覧も掲載した。A4判縦カラー29ページの体裁で作成した。

■ 森町教育委員会刊行の普及啓発本

森町教育委員会から提供いただいた、森町の縄文遺跡に関係する以下の普及啓発本を来館者に配



▲ワークシートAコース「ストーンサークルシールラリー」

布した。

森町教育委員会2013『森町の縄文遺跡』

森町教育委員会2016『縄文たんけんブック』

森町教育委員会2024『北海道森町 鷲ノ木遺跡』

(3) 展示内容の詳細

展示構成は上述のとおり前半が世界遺産と縄文遺跡群のOUVを解説するコーナー、後半が縄文遺跡群のストーンサークルを解説するコーナーに分けられ、後半には鷲ノ木遺跡の詳細も紹介した。以下、企画展示の詳細について記載していく。

ア. 「はじまりの章 世界遺産とは」の展示

「世界遺産とは何か？」を分かりやすく伝えるパネル展示コーナーで、昨年度の縄文遺跡群展2で作成したパネルを引き続き活用した。世界遺産を下記の様に説明している。

【世界遺産とは?】「地球のなりたちと人類の歴史によって生み出されたもの」、「未来へ引き継いでいくべき人類みんなの「宝物」」

【世界遺産の目的】人類全体にとって価値のある宝物を破壊から守るために国際的な協力体制をつくること。

【世界遺産の種類】文化遺産、自然遺産、複合遺産の3つ(国内外遺産の紹介)

【世界遺産になるためには】登録には「顕著な普遍的価値」、「真正性」、「完全性」、「将来に亘り遺産を守る仕組みと体制」の4つの条件を満たす必要がある。「真正性」はオリジナルの状態を保っていること、「完全性」は価値を説明するために必要なものが全てのことである。「顕著な普遍的価値」は世界中の国や地域を越えて、さまざまな信仰をもつ人、現在だけでなく未来の人が、同じように「大切」と考えることができる価値のことである。

「顕著で普遍的な価値」の判断には10の評価基準があり、世界遺産になるためにはひとつ以上が該当する必要がある。

【世界遺産の意義】世界中の文化と自然を全ての人が知り、尊敬し、認め合うことで、世界平和に役立てる。

イ. 「北海道・北東北の縄文遺跡群の価値」の展示

(ア) OUVとシリアル・プロパティを伝えるパネル展示

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の顕著な普遍

的価値(OUV)の概要、なぜ北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産になったのか、シリアル・プロパティであること、OUVを構成する4つの特徴(属性)について解説を行った。OUVは、下記ふたつの「すごい!」で表現した。

すごい価値1:狩り・採集・漁をしながらムラを作って定住し、盛んにマツリを行う暮らしを1万年以上続けた。

すごい価値2:気候の変化にあわせて自然の恵みを上手に使い、いろいろな住みよい場所にムラを作った。

縄文遺跡群の4つの特徴(OUVを示す4属性)は下記内容で表現し、ビジュアルを重視したパネルを作成した。

特徴その1:自然を巧く利用してくらし

特徴その2:盛んにマツリをして心が豊か

特徴その3:住む場所に合わせてくらし方を工夫

特徴その4:1万年のムラの移り変わりが分かる

(イ) OUVを伝えるジオラマを活用した展示

a. リアルスケール年表と定住の6ステージのジオラマ展示

(2)-ウで上述した「定住の6ステージ」ジオラマを、展示方法の見直しを加え、長さ3.6mの「縄文遺跡群リアルスケール年表 100年=3cm」と共に展示した。この年表は伊達市北黄金貝塚情報センターで展示されている「JOMONリアルスケール年表 100年=5cm」のデジタルデータを伊達市教育委員会に提供いただき、縮尺や内容を改変して作成したものである。年表には気候変動、日本史と世界史のイベント、縄文遺跡群のイベント、17構成資産の位置付けなどの情報が盛り込まれている。ジオラマと年表を一緒に見ること、ステージの発展の様子とその背景が、関わる構成資産と共に理解できるものとなっている。

b. 「縄文遺跡群の世界」のジオラマ展示

(2)-ウで上述した様に、縄文遺跡群の自然資源利用、土地利用、交流、くらしの様子を表現したジオラマを展示し、縄文遺跡群が自然と共生して定住を発展させた文化であることを伝えた。

ウ. 「縄文遺跡群とストーンサークルの謎」の展示

ストーンサークルは縄文時代の北海道・北東北が同一の文化圏であったことを示す特殊な建造物

▼北海道の主要な環状列石・配石墓・配石遺構

	地域	町名	遺跡名	内容	時期	規模	
環状列石	1	渡島	森町	鷺ノ木遺跡	環状列石	後期前葉	30m以上
	2	後志	小樽市	忍路環状列石	環状列石	後期中葉	30m以上
	3	渡島	函館市	石倉貝塚	環状列石	後期前葉	30m以上
	4	渡島	北斗市	館野遺跡	環状列石	後期前葉	30m以上
環状の配石遺構 配石墓群 配石墓	5	渡島	函館市	日吉遺跡	環状配石墓	後期前～中葉	10～20m
	6	後志	仁木町	モンガクB遺跡	環状配石墓群	中期後半もしくは後期中葉	10m以下
	7	渡島	松前町	東山遺跡	環状配石遺構配石墓	後期前葉	10m以下
	8	渡島	知内町	湯の里5遺跡	環状配石遺構	後期前葉	10m以下
	9	渡島	森町	倉知川右岸遺跡	環状配石遺構	後期前葉	10m以下
	10	オホーツク	斜里町	オクシベツ川遺跡	環状配石遺構	後期中葉～後葉	10m以下
配石墓群 配石墓	11	渡島	八雲町	浜松5遺跡	配石墓群列状配石	後期前葉	30m以上
	12	空知	深川市	音江環状列石	配石墓群	後期中葉	30m以上
	13	渡島	八雲町	浜松2遺跡	配石墓群	後期中葉	20～30m
	14	渡島	知内町	湯の里1遺跡	配石墓群	後期前葉	20～30m
	15	後志	余市町	西崎山環状列石	配石墓群	後期中葉	10～20m
	16	渡島	函館市	八木B遺跡	配石墓群	後期中葉	10～20m
	17	上川	旭川市	神威古潭5遺跡	配石墓群	後期中葉	10～20m
	18	後志	二セコ町	曾我北栄環状列石	配石墓群	後期中葉	10m以下
	19	後志	小樽市	地鎮山環状列石	配石墓	後期中葉	10m以下
	20	宗谷	礼文町	船泊遺跡	配石墓	後期前葉	10m以下
配石遺構	21	空知	芦別市	野花南熊の沢遺跡	配石遺構(列状)	後期(後葉か)	10～20m
	22	後志	二セコ町	曾我滝台遺跡	配石遺構	後期中葉	10m以下
	23	後志	二セコ町	西富遺跡	配石遺構	後期	10m以下
	24	後志	余市町	八幡山環状列石	配石遺構	後期	10m以下
	25	渡島	松前町	大津遺跡	配石遺構	不明、後期か?	10m以下

である。またストーンサークルは複数世代にわたって多くの人びとが関わってつくった大規模な「記念物」と考えられ、縄文遺跡群の精緻で複雑な精神文化を表す要素でもある。本展示では北海道・北東北のストーンサークル(環状列石)にまつわる謎について考え、あわせて北海道を代表する環状列石の遺跡「鷺ノ木遺跡」について紹介した。

(ア) ストーンサークル(環状列石)ってなに？

「ストーンサークル」とはストーン・ヘンジなど先史ヨーロッパでつくられた巨石構造物のためにつくられた言葉である(宮尾2007)。日本では

明治時代に「環状石籬」と訳され、主に縄文時代の大型礫を並べて作られた施設に対して使われた。その後調査や研究が進められていくなか、戦前から戦後に行われた大湯環状列石の調査を契機に「環状列石」の言葉が定着していった(阿部2023)。本展示では、縄文時代に石を環状(輪っか状)に並べてつくられた、大きさが30mを超す大型の施設を「環状列石」(ストーンサークル)と呼ぶこととした。

また、他の配石遺構については次の様に整理した。石を円形や環状に並べた10m以下の小型のものについて、土坑墓の上に石を並べたものを「配石墓」、土坑墓を伴わないものを「配石遺構」と呼び、それらが集合し大型となっても環状でなければ「配石墓群」、「配石遺構群」と呼称し環状列石とは区別する。環状であればこれらの語に「環状」を冠する。忍路環状列石を除き、北海道で確認されている「〇〇環状列石」と名称がついている遺跡・遺構の殆どは「配石墓(群)」・「配石遺構(群)」となる。

(イ) 環状列石はいつごろつくられた？

ステージⅡbの終わりからⅢa(縄文時代後期前葉およそ4000年前)に、北海道・北東北で規格的で大規模な環状列石がつけられるようになる。



▲北海道の環状列石・配石墓・配石遺構の分布

▼北海道・北東北の環状列石のながれ

時期	土器型式		環状列石											
	北東北型式	北海道型式	北東北（縄文遺跡群）					北海道						
			岩手県 御所野 遺跡 配石墓群型	秋田県 伊勢堂岱 遺跡 列石型	秋田県 大湯 環状列石 配石墓群型	青森県 小牧野 遺跡 列石型	青森県 大森野山 遺跡 配石遺構群型	北海道 館野遺跡 環状墓土内列石型	北海道 石倉貝塚 環状墓土内列石型	北海道 鷲ノ木 遺跡 列石型	小樽市 忍路環状 列石 列石型			
中期後葉	大木9・10	大空9B9 ・ノダツPⅡ												
後期前葉	豊沢3群 ・沖野(2)	天祐寺・涌元Ⅰ												
	瀬野前 ・小牧野3組	天祐寺・涌元Ⅱ												
	十勝内1古	トリサキ												
	十勝内1新	大津・白坂3												
後期中葉	十勝内2	ウサクマイC												
	十勝内3	手稲・鯨岡												
後期後葉	十勝内4・5	豊林												
縄文前期	大前B1	東三川・札幌B												



伊勢堂岱や大湯は
何百年もかけて
環状列石をつくってる！

北東北に環状列石がはじまって
すぐに北海道に伝わり、
さらに道南から北へ広まった
様子がわかるね



▼北海道の配石墓・配石遺構のながれ

時期	北海道型式	北海道の主要な配石墓・配石遺構														
		岩手県 湯の里1 遺跡 配石墓群	岩手県 湯の里5 遺跡 環状配石遺構	秋田県 東山遺跡 環状配石遺構 配石墓	秋田県 浜松5遺跡 配石墓群 列状配石	秋田県 西崎山 環状列石 配石墓群 日持針状配石遺構	青森県 八幡山 環状列石 日持針状 配石遺構	青森県 モンガクB 遺跡 環状配石墓群	青森県 日吉遺跡 方形土坑 配石墓	青森県 八木B遺跡 方形土坑 配石墓	北海道 浜松2遺跡 方形土坑 配石墓群	北海道 地蔵山 環状列石 方形土坑 配石墓	北海道 豊我北栄 環状列石 方形土坑 配石墓群	北海道 香江 環状列石 方形土坑 配石墓群	北海道 神威古澤 5遺跡 方形土坑 配石墓群	北海道 オクシバツ 川遺跡 環状配石遺構
		中期後葉	大空9B9 ・ノダツPⅡ													
後期前葉	天祐寺・涌元Ⅰ															
	天祐寺・涌元Ⅱ															
	トリサキ															
	大津・白坂3															
後期中葉	ウサクマイC															
	手稲・鯨岡															
後期後葉	豊林															
縄文前期	東三川・札幌B															



配石遺構が下火になる
後期後葉は「周堤墓」が
登場する！

後期前葉では環状配石など
が目立つけど、
中葉には地蔵山遺跡に代表
される大型方形土坑墓を
伴う配石墓群が盛んになるね



気候の急激な寒冷化により、自然環境に大きな変化がみられた時期と重なる。

約4000年前から3500年前のおよそ500年間をピークに環状列石は造営されるが、ステージⅢb（後期後葉、約3000年前）までには土坑墓群や周堤墓など異なる集団墓地の形に変化していく。北海道では環状列石が下火となる約3500年前（後期中葉）までの過程で環状列石から配石遺構群・配石墓群が増加し、分布も道南西部から道央部日本海側、石狩川流域に広がる様子がみられる。またこれらには地鎮山環状列石に代表されるような敷石が施される方形土坑墓が目立って伴っている。

(ウ) 環状列石は何のためにつくられた？

環状列石の役割として下記3つの説がみられる。

■ 葬祭センターの役割

環状列石は共同墓地、もしくは墓に関わる祭祀施設と考えられる（藤井2009、赤坂2021、鹿角市教育委員会2017）。

環状列石には石を墓標とした「配石墓」で構成

されるタイプ（配石墓群型）があるため、墓地と考えることができる。しかし必ずしも石の下に墓を伴う訳ではなく、石列だけのタイプ（列石型）もあるため、祭祀施設とも考えられる。ただし列石タイプも「甕棺墓」・「埋設土器」などの葬送施設が付近で見つかる。こうしたことから葬送に関わる儀礼を行う場であったと考えることが可能である。

■ 地域社会の結束を高める役割

環状列石がつくられた時期、寒冷化によってそれまでの大きな集落を維持できなくなり、小集落への分散が起こった様子がみられる（岡田2004、文化庁2019）。こうした小規模化した集落同士が連携を強めて地域社会を維持していくため、共同で運営する「環状列石」をつくり、定期的に集まって関係性を確かめ合ったと考えられる。「連携強化装置」の位置付けである。

また環状列石は何十～何百年間にもわたって作り続けられた様子があり（榎本2004、宮尾2007、児玉2023）、自分たちの住む土地と共通の先祖を敬うため、世代を越えて営まれたモニュメント（記念物）であったと考えられる。

配石墓群型 配石墓が集合して環状となるタイプで、石は墓標であり環状列石は墓地と考えられる。配石遺構も付属する。

代表的な遺跡 大湯環状列石、御所野遺跡



列石型 石列だけが環状に巡るタイプで原則列石の下に墓はない。ただし列石のエリア内に土器棺墓・埋設土器などが設けられる。

代表的な遺跡 小牧野遺跡、伊勢堂岱遺跡、鷺ノ木遺跡、忍路環状列石

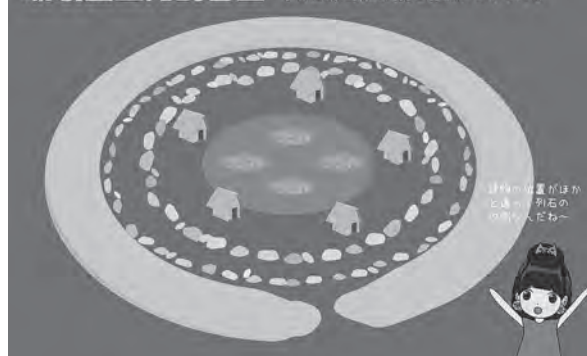


配石遺構群型 配石遺構が集合して環状となるタイプ

代表的な遺跡 大森山遺跡、太師森遺跡（配石を含むハイブリッド）



環状盛土内列石型 環状盛土の内側に列石をならべ、列石内の中央広場に掘立建物と墓域がつくられる



▲環状列石の種類



▲環状列石を囲む遺構群のようす

■ 地域社会を結ぶシンボルの役割

環状列石型は石の並び方や大きさなど共通した規格のものが100km以上離れた地域にまたがって作られている。離れた地域同士が同じ文化圏の仲間であることを可視化して示すシンボルであったと考えられる（小杉2019）。

（エ）環状列石の種類

環状列石は墓の有無や石の並び方によって「配石墓群型」「列石型」「配石遺構群型」の3つのタイプに分けることができる。北海道では列石型がつくられており、小牧野遺跡などで発生した形態が伝播したことが考えられる。

また北海道では後期初頭の環状列石を受容するなかで生じた、環状盛土に列石型が融合する「環状盛土内列石型」が津軽海峡沿岸部の函館市石倉

貝塚や、北斗市館野遺跡で見られる。「環状盛土内列石型」には環状盛土や環状列石の内側に掘立柱建物跡や環状配石遺構が伴い、中央部の広場に墓域が形成される特徴がある。

（オ）環状列石を作った人びとのムラはどこに？

環状列石の多くの遺跡では、縄文時代の一般的な家である竪穴住居跡がほとんどみつからない特徴があり、そのため環状列石は、近隣の小集落が集まってつくった「葬祭センター」と理解されている（小林2007、秋元2004）。しかしまた、周囲にあるはずの小集落もみつからない状況が各遺跡で見られる。環状列石をつくった人びとはどこに住んでいたのか？

大湯環状列石や伊勢堂岱などでは、環状列石の周りを何重にも取り囲む掘立柱建物跡・石組炉・配石遺構・貯蔵穴・捨て場などが確認されている（重環状構造）。これら周囲の施設をめぐり、大きく二つの見解がみられる。

【見解1 環状列石は集落から離れてつくられた葬祭センター説】

「葬祭センター説」では周囲施設は非日常の葬祭に関わるものと考えられている（岡田2004、小林2007・2019・2021、秋元2004）。周囲施設の具体的な機能として、再葬のための殯（もがり）施設、墓守など葬祭空間を維持するための施設、葬送儀礼に集まった人びとの短期の宿泊施設、葬祭用資材や食材を蓄えた高床倉庫などが推測されている。

再葬は遺体を一度骨にしてから埋葬する葬法

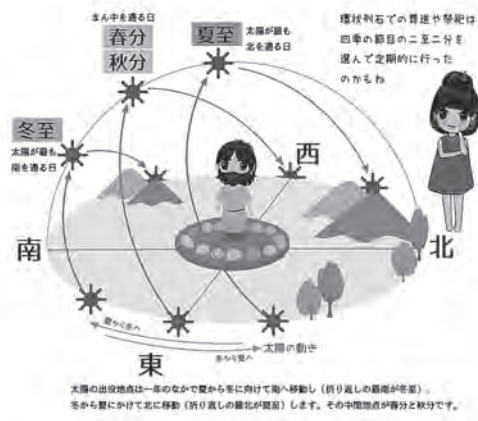


掘立柱建物と配石遺構に炉跡らしき焼土を伴う例が多いことから日常住んだ平地式の住居と考える説。環状列石は集落の真ん中に作られた墓域となる。



掘立柱建物や配石遺構は葬祭にきた人々の臨時的な宿泊施設や遺体を一時的に安置するもがり屋と考える説。環状列石は集落から離れてつくられた共同施設となる。

▲環状列石を造営した集落をめぐる二つの見解



▲環状列石と二至二分

で、環状列石で見つかる埋設土器・土器棺墓は再葬の人骨を納めたと考えられる。また石組炉や配石遺構も葬送祭祀のための施設とみる。環状列石は分散した小集落から葬祭のため臨時的・定期的に人が集合する場所で、常時の居住がない(集落ではない)特別な場所と位置付けられる。

【見解その2 環状列石は集落の中央広場に設けられた墓域説】

「集落のなかの墓域説」では周囲施設は日常の

住居と考えられている。

大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡では配石遺構に柱穴が伴うものや、炉跡を中心に壁柱穴が円形に巡るものがあり、そうしたものは住居の可能性が高いと考えられる。またこれらの遺跡で貯蔵穴とみられるフラスコ状土坑が多くみつかるとも集落であった蓋然性を高めている(鈴木2007、阿部2023、榎本2023、八木2023など)。こうしたことから、日常的に人が住む環状構造の集落の中央広場に環状列石が設けられたと考えられる。

(カ) 天体と関係するってホント？

環状列石は標高の高い丘陵の先端部など見晴らしの良い場所に造営される立地の特徴がある。環状列石からの景観にはしばしば秀麗な形をした山が含まれ、冬至や春分などの「二至二分」にはそうした山に日の出や日没の位置が重なることが指摘されている。つまり環状列石は天体の動きと関係してつくられたとする説がある。

一定の場所に一年を通して住む「定住」をすれば、太陽の出没位置を周辺地形と関連付けて定点観測できるため、容易に二至二分を把握することができる(大田原2007)。二至二分の太陽出没地点と特徴的な地形(独立した整った形の山など)が重



▲環状列石の造営作業



▲小牧野遺跡の石の運搬実験

なれば把握しやすいため、環状列石はそうした観察ができる場所を選んで造られたと考えられる。

二至二分は四季の節目であり、自然と共生した縄文の人びとにとっても、生業のスケジュールを管理する上で特別な日であったと考えられる。そうした特別な冬至や夏至の日に環状列石での葬祭儀礼を行い、秀麗な山と関連付けられたドラマチックな太陽を崇めたと推測される。

(キ) ストーンサークルを作った労力はどれくらい？

環状列石をつくるには、①場所を選ぶ、②木を伐採・抜根、③土地を平坦に造成、④石の探索・採取、⑤石の運搬、⑥配石作業、の工程が考えられ、多大な労働力が必要であった。

小牧野遺跡では石の運搬実験を行い、環状列石の2899個・推定総重量31 tを超える石をおよそ1 km離れた石の採取地から運ぶ作業量を試算している(児玉2004・2024)。そのデータを元にすれば12人が1日6時間労働をしても、石を運ぶだけで16日間かかる計算である。

さらに小牧野遺跡ではドラム缶2000本分の土を動かした土地造成も行われており、一人1日1本を動かしたとしても12人で160日以上かかることとなる。木の伐採や抜根はさらに大きな労力を必要としたことが推測される。

小牧野遺跡の様な大型の環状列石の場合、数世代に亘って多くの人びとが集まり、石材運搬や配石作業のため作業を計画的に継続したと考えられる。



▲鷲ノ木遺跡の位置

エ. 「北海道の環状列石 もっともっと鷲ノ木遺跡」の展示

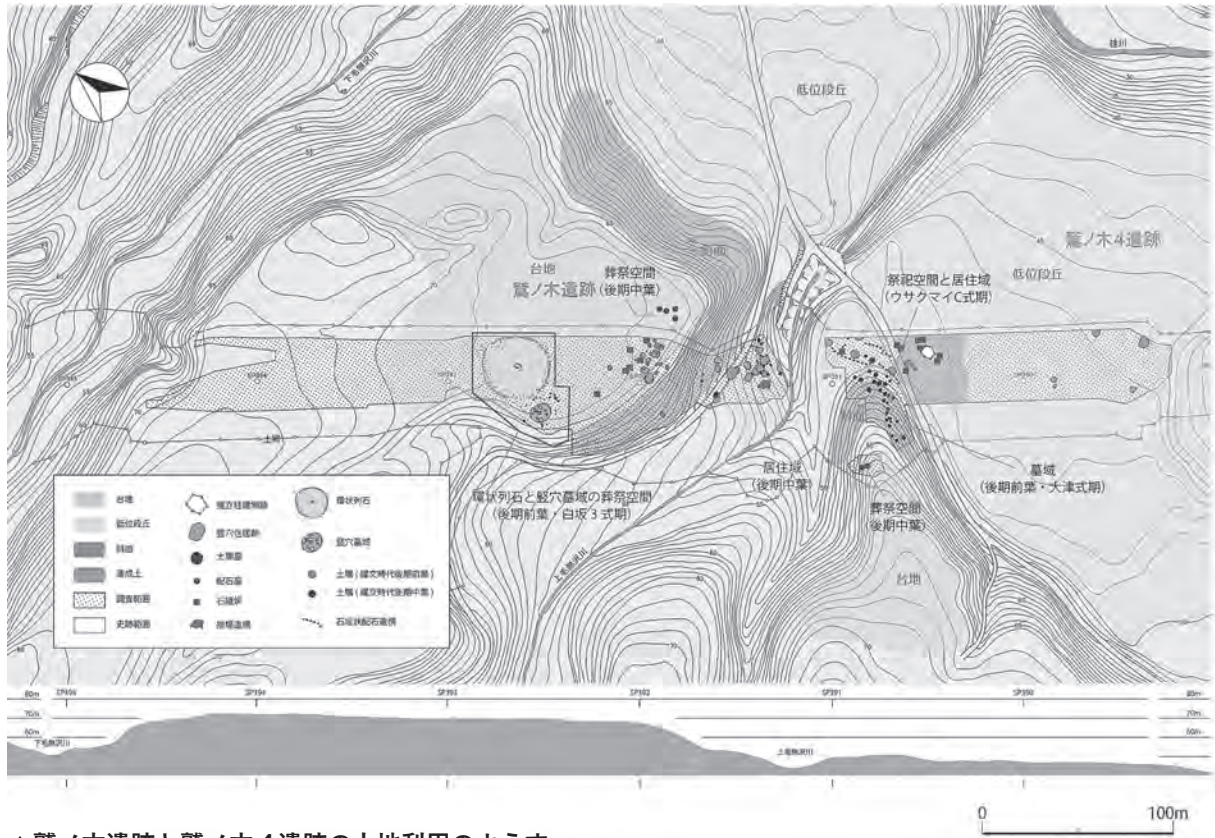
鷲ノ木遺跡は「北海道・北東北の縄文遺跡群」のステージⅢaに位置付けられる関連資産である。桂川支流の上毛無川と下毛無川に挟まれた標高67~73mの見晴らしの良い舌状台地上から、縄文時代後期前葉に営まれたほぼ完全な形をした環状列石と竪穴墓がセットで発見された。遺跡からは噴火湾、駒ヶ岳、羊蹄山を望むことができ、こうした眺望の良い場所を選んで環状列石を作ったことが考えられる。

また、上毛無川の対岸には同時期に営まれた鷲ノ木4遺跡が位置し、両者は一体の集落として営まれたと考えられる。鷲ノ木4遺跡では環状列石の時期に前後して、大型土坑墓群や石垣状配石遺構、掘立柱建物跡群、配石墓などがつくられている。

(ア) 鷲ノ木遺跡環状列石プロフィール 造営時期：ステージⅢa(縄文時代後期前葉白坂)



▲鷲ノ木遺跡環状列石と竪穴墓 JOMON ARCHIVES (森町教育委員会撮影)



▲鷲ノ木遺跡と鷲ノ木4遺跡の土地利用のようす

3式期 約3,700年前

大きさ：外帯：長径36.9m×短径33.8m

内帯：長径35.5m×短径32.5m

中央配石：長径4.0m×短径2.6m

配石特徴：外帯・内帯の二重の列石と中央帯で構成されている。外帯は40～50cm大の長楕円形礫の長軸を連ねてつくられ、内帯は50～60cm大の楕円形礫の長軸を外帯と直交方向に並べて列石としている。大半の礫は地面に埋め込まれ、直立や外側に傾いた状態となっている。

石の数：602個（外帯195個、内帯198個、中央帯71個、その他周囲の石131個）が使われている。石の種類から、約1km離れた桂川の河口付近で採取し、標高67m以上の遺跡まで運んだと考えられている。

土地造成：自然の台地地形を選び、内帯から中央帯付近を平坦化する小規模な整地を加えた様子がみられる。

付属遺構：環状列石に砂利集積遺構5基・埋設土器1基が付設されるほか、周辺に土坑11基、焼土1基、そして竪穴墓がつけられている。竪穴墓は11.6m×9.2mの大型竪穴の内部に7基の墓坑がつけられた墓域である。

(イ) 鷲ノ木遺跡のスゴイ価値

鷲ノ木遺跡は世界遺産の関連資産であると共に国指定史跡であり、史跡の価値として以下の4つが説明されている（森町教育委員会2017）。

■ 北海道で最大の環状列石！

発掘調査で全体の状況が明らかとなった北海道最大の環状列石。17世紀に噴火した駒ヶ岳の分厚い火山に覆われていたことで、後世の耕作などの影響を受けることなく、非常に良好な状態で保存されていた。

■ 北海道と北東北の交流を物語る！

直径30mを超す大規模な環状列石が北海道・北東北に共通してひろがることは、両地域が同一の文化圏であったことを示しており、鷲ノ木遺跡は代表となる物証である。また交流が物だけではなく、祭祀や儀礼に関わる精神性、土木工事の技術にまで及んでいたことがわかる。

■ 精緻で複雑な精神性を示す！

環状列石には葬送と祭祀に関わる施設と道具が多く伴い、縄文の人びとの神聖な空間であったと考えられる。こうした精緻で複雑な精神性を示す様子は、世界遺産である縄文遺跡群の顕著で普遍的な価値に貢献している。

▼鷲ノ木遺跡と鷲ノ木4遺跡の変遷のようす



環状列石以前 (①・②のようす)



環状列石の時期 (③のようす)



環状列石以後 (④のようす)



環状列石以後 (⑤のようす)

▼鷲ノ木遺跡と鷲ノ木4遺跡の変遷

時期	鷲ノ木遺跡						鷲ノ木4遺跡								
	竪穴住居跡	持遺構 土器集中	石椁伊	土坑	環状列石 (砂利敷・ 埋瓦土版)	竪穴墓塚	竪穴住居跡	大型竪立柱 埋物跡	石椁伊	土坑 ピット跡	土坑墓	大型土坑墓	別平面 蓋成層土	石椁状石 環状列石	配石墓
後期初葉 (天祐寺式期)	3軒 (台地・ 傾斜面)			1墓		利用他遺構	2軒 (傾斜面)								
後期前葉 (大津式期)			6墓 (台地縁 辺)	10墓 (台地縁 辺) ※1			8軒 (傾位)	9墓 (傾位)				20墓 (傾面) (※他5墓 可能性あり)			
後期前葉 (白坂3式期)		ストーンサークル		15墓 (台地中 央) (台地縁 辺)	1墓 (台地中 央)	2墓 (台地中 央)						2墓 (傾面)		石椁埋設石に 穴を掘り柱をさす	
後期中葉 (ウサクマイC期)							1軒		300墓 前後 (傾位)	2墓 (傾位)		1か所 (傾面・ 傾位)	2か所 (傾面・ 傾位)		
後期中葉 (手稲～ホックマ式期)	15軒 (傾斜面)	1か所 (傾面・ 傾位)		21墓 (傾斜面) ※2			3軒 (傾面)							3墓 (台地・ 傾位)	
後期前葉～中葉				15墓											

台地：標高65～70mの舌状台地上
 斜面：標高65～50mの台地縁辺から低位段丘にかけて
 低位：標高35～50mの低位段丘上

※1 土坑は大型含むが墓の判断が難しく貯蔵穴などの性格が主体と考えられる。
 ※2 低位段丘の住居群に伴う土坑墓も多く含まれる。
 ※ 遺物出土量も遺構が多い時期に増加する傾向がある。

■ 環状列石周辺に縄文時代後期前半（ステージⅢa）の生活空間がひろがる！

鷲ノ木遺跡と鷲ノ木4遺跡は台地上・斜面・低位段丘の広大な土地を利用したステージⅢaの拠点的な遺跡で、環状列石の前後を含めたおよそ500年間の集落の移り変わりが分かる貴重な例である。

（ウ）鷲ノ木遺跡と鷲ノ木4遺跡の変遷

両遺跡はステージⅢaに一体的に利用された遺跡であり、以下のような変遷がみられる（高橋2014、森町教育委員会2017）。

【環状列石以前】

- ①後期初頭（天佑寺式期）は両遺跡とも利用が低調。
- ②後期前葉（大津式期）で利用が活発化。鷲ノ木4では竪穴住居跡3軒と斜面に大規模な土坑墓群が形成される。

【環状列石の時期】

- ③後期前葉（白坂3式期）、鷲ノ木遺跡で環状列石と竪穴墓、土坑群が造られる。しかし両遺跡とも集落が営まれた様子がなく、鷲ノ木の祭祀空間利用に特化した様子が窺える。

【環状列石以後】

- ④後期中葉（ウサクマイC式期）に入り、鷲ノ木4遺跡の低位段丘が大きく造成され活発に利用される。石垣状配石遺構や大型掘立柱建物、300基を超える土坑群が造られる。
- ⑤後期中葉（手稲・鯉濶式期）には鷲ノ木遺跡の低位段丘の利用が活発となり、竪穴住居跡15軒、捨て場遺構、土坑群が造られる。鷲ノ木4は利用がやや低調だが、台地上に配石墓を造るなど祭祀空間としての利用がみられる。

（エ）開発と遺跡保存、守られた環状列石

鷲ノ木遺跡の環状列石は高速道路建設にもなう発掘調査で発見され、北海道の歴史を語る上で重要な遺跡として現地保存を求める声が町民をはじめ全国的な高まりをみせた。これを受けた北海道・森町・日本道路公団（現NEXCO東日本）は協議を重ね、遺跡の下に道路を通すことで環状列石の現地保存を決定した。トンネルへの工法変更や増額工事費の捻出など、道路公団の全面的な協力があってはじめて実現できたことであり、開発と遺跡保存を両立した稀有な例である（畑2006）。

【引用参考文献】

【論文等】

- 赤坂朋美
2021 「大湯環状列石の空間構造」『月刊考古学ジャーナル』No.756 株式会社ニューサイエンス社
- 秋元信夫
2004 「環状列石の周辺」『月刊文化財』485号 第一法規株式会社
2005 『石にこめた縄文人の祈り 大湯環状列石』シリーズ「遺跡を学ぶ」17 新泉社
- 阿部昭典
2011 「東北北部における環状列石の受容と集落構造－「景観論」の確立にむけて－」『古代文化』第63巻第1号 財団法人古代学協会
2023 「環状列石の研究視点と課題」『月刊考古学ジャーナル』No.789 株式会社ニューサイエンス社
2024 「環状列石と関連遺跡の調査研究の概略」『考古学ハンドブック24 環状列石』株式会社ニューサイエンス社
- 阿部昭典
2024 「環状列石の定義・範囲」『考古学ハンドブック24 環状列石』株式会社ニューサイエンス社
- 阿部昭典・國木田大・吉田邦夫
2016 「縄文時代における鐸形土製品の用途研究」『日本考古学』第41号 一般社団法人日本考古学協会
- 榎本剛治
2004 「群集する環状列石」『月刊文化財』485号 第一法規株式会社
2012 「三脚石器」『季刊考古学』第119号（株）雄山閣
2023 「北海道・北東北における環状列石の研究と課題-環状列石出現の背景-」『月刊考古学ジャーナル』No.789 株式会社ニューサイエンス社
- 大島秀俊
2007 「北海道の諸遺跡」『季刊考古学』第101号（株）雄山閣太田原潤
2007 「大規模記念物と二至二分」『縄文時代の考古学11 心と信仰－宗教的観念と社会秩序－』（株）同成社
- 大沼忠春ほか
1983 「礼文島船泊遺跡の墳墓と人骨」『北海道考古学』第19輯 北海道考古学会
- 岡田康博
2004 「北の環状列石」『月刊文化財』485号 第一法規株式会社
2024 「北東北の掘立柱建物の機能」『考古学ハンドブック24 環状列石』株式会社ニューサイエンス社
- 河野広道
1952 「カムイコタンのストーン・サークル」考古学雑誌第38巻第5・6号日本考古学会
- 小杉 康
2001 「大規模記念物の謎を探る」『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』北海道新聞社
2013 「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について（予察）」『北海道考古学』第49輯 北海道考古学会
2014 「文化制度としての縄文モニュメント」『日本考古学協会 2014年度伊達大会研究発表資料 貝塚研究の新視点 墓とモニュメント』日本考

- 古学協会2014年度伊達大会実行委員会
2019 「世界遺産としての縄文文化」『環状列石ってなんだ 御所野遺跡と北海道・北東北の④縄文遺跡群』新泉社
- 兄玉大成
2004 「環状列石にみる縄文時代の土木技術」『月刊文化財』485号 第一法規株式会社
2007 「青森県の諸遺跡」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
2007 「東北地方北部の再葬」『縄文時代の考古学9 死と弔い—葬制—』(株)同成社
2024 「環状列石の構築技術論」『考古学ハンドブック24 環状列石』株式会社ニューサイエンス社
- 小林 克
2007 「環状列石(東北・北海道)」『縄文時代の考古学11 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』(株)同成社
2019 「北東北環状列石研究の現段階」『物質文化』99
2021 「北東北における環状列石の成立」『令和3年度福島県文化財センター白河館(まほろん)縄文時代セミナー「縄文集落と葬送の画期」』講演会資料集
- 駒井和愛
1950 「日本に於ける巨石記念物」『考古学雑誌』第36巻第2号 日本考古学会
1951 「我が国に於ける巨石記念物(続)」『考古学雑誌』第37巻第1号 日本考古学会
1952 「我が国に於ける巨石記念物(続々)」『考古学雑誌』第38巻第1号 日本考古学会
1952 「日本に於ける巨石記念物(続々々)」『考古学雑誌』第38巻第5・6号 日本考古学会
1953 「余市付近のストーン・サークル、環状列石墓、其他」『余市』地方史研究所
- 鈴木克彦
2007 「日本のストーン・サークル眺望」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
2007 「北日本のストーン・サークル」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
- 高田和徳
2007 「岩手県の諸遺跡」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
2019 「御所野遺跡から環状列石を読み解く」『環状列石ってなんだ 御所野遺跡と北海道・北東北の縄文遺跡群』新泉社
- 高橋 毅
2014 「鷲ノ木遺跡の環状列石に見る土地利用と形成過程」日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料 貝塚研究の新視点 墓とモニュメント』日本考古学協会2014年度伊達大会実行委員会
- 滝本 学
2004 「太師森環状列石の一断面」『月刊文化財』485号 第一法規株式会社
- 富永勝也
2014 「縄文時代後期前葉の函館湾西岸地域の盛土遺構と配石遺構—北斗市館野遺跡・茂別遺跡の調査から—」『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料 貝塚研究の新視点 墓とモニュメント』日本考古学協会2014年度伊達大会実行委員会
- 畑 宏明
2006 「鷲ノ木遺跡の発見から保存までの経緯—高速道路建設と遺跡保存の両立を求めて—」『遺跡学研究』第3号 日本遺跡学会
- 福田裕二
2014 「円筒土器文化以降における集落と盛土遺構の変遷—垣ノ島遺跡の盛土遺構の調査から—」『日本考古学協会 2014年度伊達大会研究発表資料 貝塚研究の新視点 墓とモニュメント』日本考古学協会2014年度伊達大会実行委員会
- 藤井安正
2009 「第VI章 分析と考察」『特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(25)』鹿角市文化財調査資料96 鹿角市教育委員会
- 藤原秀樹
2006 「北海道における縄文時代後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』第3号 日本玉文化研究会
2014 「北海道における縄文墓制の沿革①—環状列石以前—」『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料 貝塚研究の新視点 墓とモニュメント』日本考古学協会2014年度伊達大会実行委員会
- 水野正好
1992 「〈講演〉ストーンサークルのナゾ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
- 松田 功
2009 「縄文後期の代表的な遺跡② オクシベツ川遺跡」『しれとこライブラリー9 知床の考古』北海道新聞社
- 宮尾 学
2007 「環状列石の造営」『縄文時代の考古学11 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』(株)同成社
- 武藤祐浩
2007 「秋田県の諸遺跡」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
- 八木勝枝
2024 「環状列石と居住域—集落と葬祭センター説」『考古学ハンドブック24 環状列石』株式会社ニューサイエンス社
- 矢吹俊男
1988 「配石遺構」『北海道考古学』第24輯 北海道考古学会
- 山田康弘
2015 「縄文時代の葬墓制・社会・死生観」『季刊考古学』第130号(株)雄山閣
2015 「土器棺墓(土器埋設遺構)」『季刊考古学』第130号(株)雄山閣
- 山本暉久
2007 「東日本のストーン・サークル」『季刊考古学』第101号(株)雄山閣
- 【一般書等】
札幌市教育委員会
1989 『新札幌市史』札幌市
三内丸山遺跡センター
2020 『特別史跡指定20周年記念企画展 三内丸山と大湯—縄文の大集落からストーンサークルへ—』
斜里町立知床博物館
1980 『第2回特別展 オクシベツ川流域の先史文化』

- 斜里町立知床博物館協力会
2009 『知床博物館第22回特別展 斜里町の縄文時代』
- 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館
2022 『八戸発見ブック 世界遺産になった！是川石器時代遺跡』
- 文化庁
2019 『Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan』登録推薦書
- 北海道環境生活部
2022 『世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」北海道のガイド教本』
- 北海道立埋蔵文化財センター
2023 『すすめ！縄文ワールド』令和5年度企画展示「北海道・北東北の縄文遺跡群展2」解説絵本
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター
2004 『遺跡が語る北海道の歴史』（財）北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌
- 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
2022 『調査研究報告書 北海道における世界文化遺産のインタープリテーションに関する調査研究』北海道世界文化遺産活用推進実行委員会
2023 『調査研究報告書 北海道における世界文化遺産のインタープリテーションに関する調査研究2』北海道世界文化遺産活用推進実行委員会

【報告書等】

【北海道】

- 旭川市教育委員会
1990 『神威古潭ストーンサークル遺跡調査報告書』
- 芦別市教育委員会
1987 『芦別市野花南熊の沢遺跡』
- 小樽市教育委員会
1999 『忍路環状列石』平成10年度小樽市埋蔵文化財調査概報
2001 『忍路環状列石Ⅱ』小樽市埋蔵文化財調査報告書第18集 狩太町教育委員会
1957 『狩太遺跡』
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター
1985 『湯の里遺跡群』北埋調報18
2011 『北斗市館野遺跡（2）』北埋調報282
- 知内町教育委員会
1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡 北海道上磯部知内町湯の里1遺跡発掘調査報告』
- 仁木町教育委員会
1998 『モンガクB遺跡』
- ニセコ町教育委員会
1982 『昭和56年度ニセコ町内遺跡分布調査報告書Ⅰ』
1984 『昭和58年度ニセコ町内遺跡分布調査報告書Ⅲ』
- 函館市教育委員会
1999 『函館市石倉貝塚』
- 函館市日吉遺跡発掘調査団
1971 『函館市日吉遺跡発掘報告書』市立函館博物館
- 北海道立埋蔵文化財センター
2001 『西崎山ストーンサークル』重要遺跡確認調査報告書第1集
- 松前町教育委員会
1974 『松前町大津遺跡発掘報告書』
2005 『東山遺跡』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団

- 1992 『八木B遺跡』
- 森町教育委員会
2006 『鷺ノ木4遺跡』茅部郡森町埋蔵文化財調査報告書
2008 『鷺ノ木遺跡』森町埋蔵文化財調査報告書第14集
2008 『鷺ノ木遺跡 縄文時代後期前葉の環状列石と竪穴墓域』森町埋蔵文化財調査報告書第15集
2008 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅰ 鷺ノ木遺跡』森町埋蔵文化財調査報告書第16集
2009 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅱ 鷺ノ木遺跡』森町埋蔵文化財調査報告書第17集
2010 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅲ 鷺ノ木遺跡Ⅴ』森町埋蔵文化財調査報告書第18集
2011 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅳ 鷺ノ木遺跡Ⅵ』森町埋蔵文化財調査報告書第19集
2015 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅷ 鷺ノ木遺跡Ⅶ』森町埋蔵文化財調査報告書第23集
2017 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅸ 鷺ノ木遺跡Ⅷ』森町埋蔵文化財調査報告書第24集
2019 『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅺ 鷺ノ木遺跡Ⅸ』森町埋蔵文化財調査報告書第27集
2024 『史跡整備に伴う発掘調査報告書 鷺ノ木遺跡Ⅹ』森町埋蔵文化財調査報告書第29集

八雲町教育委員会

- 1991 『浜松2遺跡』
1992 『コタン温泉遺跡 縄文時代集落と貝塚の調査』
1995 『浜松5遺跡』
- 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
1965 『西崎山』郷土研究No.7
- 礼文町教育委員会
1999 『礼文町船泊遺跡発掘長報告書』
- 駒井和愛
1959 『音江 北海道環状列石の研究』有限会社慶友社

【青森県】

青森市教育委員会

- 2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』青森市埋蔵文化財調査報告書第70集
2005 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ～第13～16次発掘調査報告・第1～16次発掘調査のまとめ（総括編）』青森市埋蔵文化財調査報告書第85集

平賀町教育委員会

- 2002 『太師森遺跡発掘調査報告書』
2004 『太師森遺跡発掘調査報告書』
2005 『太師森遺跡発掘調査報告書』

平川市教育委員会

- 2007 『太師森遺跡発掘調査報告書』

弘前市教育委員会

- 2009 『大森勝山遺跡発掘調査報告書』

【秋田県】

鹿角市教育委員会

- 2005 『特別史跡大湯環状列石（Ⅰ）』鹿角市文化財調査資料77集
2017 『特別史跡大湯環状列石総括報告書』鹿角市文化財調査資料110集

北秋田市教育委員会

- 2011 『史跡伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集

弘前市教育委員会

- 2009 『大森勝山遺跡発掘調査報告書』

【岩手県】
一戸町教育委員会
2015 『御所野遺跡Ⅴ―総括報告書―』一戸町文化財
報告書70集

北海道立埋蔵文化財センター年報26

令和6（2024）年度

2025年6月30日発行

編集：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

